

イエズス会宣教師の渡来から鎖国まで

「インバウンド（来訪外客）発展史」第1章インバウンド観光創世記第2節の予定稿

はじめに

大航海時代はまさに「旅と発見の時代」であった。それまでばらばらに発展してきた文明と文化が、それらを隔ててきた大洋を人類が航路に換えたことによって結ばれ、相互発見の機会がもたらされたのであった。

日本と西欧の接触の始まりは、16世紀半ばの鉄砲伝来、ポルトガル商人の南九州への来港、そして、イエズス会宣教師の来日であった。閉鎖的で精神の自由を抑圧してきたヨーロッパ中世は、十字軍の数次にわたる聖地派遣をきっかけに外的世界に目を開かれ、ルネサンス運動と人文主義の発展によって科学技術を発展させ、その技術をもとに大洋へ、大航海時代へと外に向かって展開してきた。その流れがユーラシア大陸東端の日本にまでたどり着いたとき、日本は戦国動乱の時代であった。

大航海時代を主導したのはポルトガルとスペインのイベリア半島の2国家であった。地中海経由の東方貿易では脇役に過ぎなかった両国が開かれた大洋に向かったのは必然の展開だが、両国が長きにわたる先進的イスラムの支配下にあつて、ヨーロッパの中でどの国よりも科学が進んでいたことが大きな理由であった。航海術やそのもとになる天文学、造船術、物理学、力学などは、イベリア半島におけるイスラム大学の水準が非常に高かった。他のヨーロッパ諸国では失われていたギリシャの哲学や自然科学、インドの数学や医学まで、この地が学問発展の最先端にあり、いったんアラビア語に翻訳されてからラテン語に翻訳されてヨーロッパに伝えられていた。

イスラムを追い落とした両国は、同時期に北ヨーロッパで展開しつつあった宗教改革においてはローマ（カトリック）教会派であり、教会内改革派として新教と対峙する勢力の中核であった。また両国は、7世紀の長きにわたる国土回復運動（レコンキスタ）によって半島を支配してきたイスラム勢力を武力で追い払ったのだが、その延長線上に海外に進出して行ったのであったから、武器・武力の使用には長けていた。

未知の海洋進出に成功した両国は、教皇承認のもとにトルデシリアス条約を結んで（1494年）、大西洋上の西経46度37分の子午線を境界線として地球を東西に分け合った。ポルトガルはアフリカ南端回りで東インド（アジア）に向かい、他方、スペインは大西洋を西に向かってアメリカ新大陸（西インド）に辿りつき、さらに太平洋航路を探索してアジアへ向かった。大西洋上の境界のみ定められただけで、地球の反対側のことはまだ知られていなかったから、スペインが太平洋経由で香料諸島に到達したとき、先着していたポルトガルとの間で境界線をめぐる勢力争いが生じるのは必然であった。

ポルトガルとスペインが東アジアに現れて日本でもヨーロッパ人との接触が始まり、政治・経済・軍事・文化上の影響を直接間接蒙ることになる。この時期、日本は戦国時代が

ようやく収束に向かい、中央集権的封建制度の編成期にあり、強大に見えた外からの影響にいかに対応するかが重大な課題であった。鉄砲が普及して戦争の形態が激変し、貿易と交流によってもたらされる西洋の異質な文化を驚きの眼をもって迎える一方で、最初期の接触からカトリック教の激しい布教活動にさらされた。ポルトガル・スペイン両国の海外展開は、必然的にカトリック教会の海外布教努力に結びついており、未知の世界での布教のために、宣教師たちは命をかけて故郷を出ていった。

宣教師たちの活動は果敢であった。その激しさがアジアやアメリカを植民地化していく勢力と密接に結びついていたことから、秀吉も家康も警戒感を強めていく。両者とも、南蛮貿易による利を望みながらキリスト教の過度の浸透を恐れ、宗教と貿易の分離に失敗してキリスト教布教の禁止に踏み切ったのだが、その勢いを止める難しさゆえに、ついに世界との人的交流を絶つ鎖国へと進んでいった。

1. ポルトガル人到来時の日本をめぐる東アジアの情勢

14世紀に入ると、南北朝の騒乱で困窮した壱岐・対馬や北九州松浦地方の漁民や農民が、食糧や財物を求めて西日本の沿岸地方から朝鮮半島に進出して荒らしまわるようになった。これに周辺国の民も加わって、東シナ海で倭寇と呼ばれる海賊が活動する。中国で明(1368～1644)が建国すると、倭寇取締まりのために海禁政策を導入し、自国民の貿易目的の海外渡航を禁じる一方で、近隣諸国(冊封国)に対しては許可証(日本では勘合)所持の船による朝貢貿易のみを認める政策をとった。南北朝の対立を解消した三代将軍足利義満は、窮乏する幕府財政立て直しのために貿易の実利を重視し、1401年、遣唐使廃止(894年)以来国交が途絶えていた中国に使節を派遣し、外交関係を復活させ(冊封を受け)、1404年に明国との間で勘合貿易が始まった。

勘合貿易と後期倭寇

14世紀末期から16世紀初頭にかけて、東アジアの貿易秩序は厳格な管理体制のもとで安定していたが、日本では、1467年に応仁の乱が起って室町幕府は機能不全に陥り、有力大名らに勘合を切り売りすることで財政を補うようになった。大名どうしの権力闘争が日常化し、その中から大内氏と細川氏が台頭した。その結果、勘合貿易は「大内氏+博多商人グループ」と「細川氏+堺商人グループ」に二分され、中央での権力闘争と連動しつつ対外貿易でも主導権争いを展開した。1523年に二つのグループが寧波で入港争いをした結果、大内グループが細川グループの船を焼き払ったのみならず、内陸部をも荒らし、現地の武官を殺害するといういわゆる寧波事件が起こり、明側はこれを機に勘合貿易を停止してしまった。もともと勘合貿易は、日本に倭寇を取り締まらせるという側面が強く、明にとっては大なる財政負担となっていたからでもあった。これがちょうどポルトガル船が東アジアに登場したばかりの時期であった。

日本の世はすでに戦国時代であり、大内、細川両大名ともに幕府を無視して別ルートの勘合貿易の再開を画策し、大内側の勝利で二度ほど遣明船が派遣されたが、大内義隆が陶晴賢に殺害された（1551年）ことによって勘合貿易は完全に停止された。正規の貿易は途絶えたが、すでに16世紀初頭から、後期倭寇と呼ばれる密貿易・海賊のグループによる大掛かりな違法貿易や海賊行為が蔓延し、実質的な交易は彼らの手によって行われていた。ただし、16世紀の後期倭寇は、明の海禁政策によって私貿易を禁じられて暮らしが立たなくなった中国沿岸住民の密貿易が中心であり、倭寇とは呼ばれたものの、主力は王直に代表される中国沿岸の密貿易グループであって、日本人は1～3割程度であったとされている。彼らの活動は東南アジア方面にまで及び、16世紀半ばにポルトガルの勢力がこの地域にまで及んでくると、相互に活発に商取引が行われるようになった。

後期倭寇は、指導者の王直が1557年に捕えられて勢いを失い、1567年には明が実態に合わせ海禁政策を解除して国民の私貿易を自由化する一方、日本の天下を統一した豊臣秀吉が海賊停止令を発して日本海賊の活動を停止させたことによって終焉を迎えた。

倭寇は収まったが、この間にかなりの数の日本人が中国や東南アジア方面に出て行って活動していたし、琉球はもちろん九州周辺には中国人をはじめ、近隣国の人々が来訪していたと思われるが、こうした人々は村井章介の言う境界人^{マージナルマン}というべき存在で、東シナ海、南シナ海をまたにかけて往来していた国境を超える海の民であった。

ポルトガル人のアジア登場

ヨーロッパとアジアの交易は、ローマ帝国時代以来、東地中海から紅海あるいはペルシャ湾を経由して、アジア方面との交易が行われていた。紀元40～70年頃の「エリュトラエ海案内記」には、インド洋を超えてマレー半島からシナ海の状況まで述べられているし、イスラム勃興後の9世紀には、イスラム商人がインド洋からマラッカ海峡を経て、中国の泉州方面まで商業活動を展開している（「旅と観光の世界史」第2部中世の旅第1章イスラムを参照）。とくに、イスラム教徒であった明の鄭和（1371～1434）による7次に及ぶインド洋遠征以来とくに交易が活発化し、イスラム商人がポルトガル登場までのアジア交易を支配していた。インド洋と太平洋をつなぐ海峡の中央部にあったマラッカが、両洋間の交易活動の要の地であった。

ポルトガルがアジアに登場するのは16世紀のはじめである。ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路の発見（1498年）に引き続いて艦隊が派遣され、1503年に南インドのコーチンを攻略して初の拠点を築き、1510年にゴアを占領、1511年には東南アジアへ向かう拠点としてマラッカを奪取した。香料独占をもくろむポルトガルはモルッカ諸島に進出し、1522年にはテルナテにまで支配力を延ばしていた。

中国との交易開始は失敗 中国に対してはどうであったか。第二代インド総督アフォンソ・デ・アルブケルケが1511年にマラッカを攻略したとき、港内にいた中国船の船長たちと友好関係を結び、中国について多くの情報を得ることができた。マラッカ要塞の司令官

に選ばれたブリトは、1513年、部下のジョルジュ・アルヴァレスに中国行きを命じ、アルヴァレスはポルトガル人として初めて広州に行ったのだが、当時明は海禁政策をとっていたため上陸を許されず、マラッカに引き返した。彼は中国に来た最初のポルトガル人であるが、後年薩摩人アンジローをザビエルに紹介したジョルジュ・アルヴァレス（後述）とは同名の別人である。

次いでポルトガルは、1517年にマラッカ攻略の武将の一人フェルナン・ペレス・デ・アンドラーデの艦隊と使節トメ・ピレスを派遣し、中国と国交を開く交渉をさせようとしたが、これも失敗した。そもそも当時の中国には対等の貿易という概念がなく、他国をすべて朝貢国とみなしていたから成功するはずがなかった。アンドラーデはいったんマラッカに引き返し、再度ピレスが使節として中国（明）と交渉することとなった。ピレスは広州への上陸は許されたが、北京への出発許可を待っているうちに、1519年にピレスを迎えるアンドラーデの艦船がやってきて、使節が未だに北京へも行けていないことを怒り、威嚇や武力行使を行なって中国官憲を怒らせてしまった。トメ・ピレス使節の一行は、1521年1月23日、ようやく広州を出発して北京に向かったが、ちょうどその頃、ポルトガルに領地を奪われたマラッカ王の使節が宮廷に来ていたうえ（マラッカは明の朝貢国として成長してきた）、ポルトガル艦船が残した悪印象のために謁見を許されず、広州への帰還を命じられた。アンドラーデの無神経な行動のあと、広州を訪れるポルトガル商船は中国側の攻撃を受けるようになっており、北京から広州に帰着した使節トメ・ピレス一行も捉えられ、持参した贈物などもすべて没収され、ピレス一行はそれきり消息が絶えてしまった。

トメ・ピレスは中国に派遣される前に膨大な記録を残しており、その記録がのちに「東方諸国記」として刊行された。その第4部は「シナからボルネオにいたる国々」と題され、第2項は『琉球・日本』のタイトルを持ち、ほんの数行ではあるが、マルコ・ポーロ以来となる西洋人による日本国への言及が見られる。

マカオに拠点を得る ポルトガルは、かくして中国との正規の交易開始に失敗したが、この時期はすでに明の海禁政策が崩れていて、前述のとおり、後期倭寇と呼ばれる密貿易、私貿易の集団が中国沿岸から日本列島にかけて活動していた。ポルトガルは、やむなくそうした非合法集団との取引を行なうようになり、その根拠地は浙江省の東方海上にある双嶼であったが、1548年に中国の官憲によってこの根拠地が破壊されると、交易の場所を上川島などに移して、密貿易者たちとの交易を続けていた。中国側の資料によると、1535年頃に他国船に混じってマカオにもポルトガル船が来航していたとあるので、この時期マカオも交易の場として使われていたらしいが、マカオの名が初めて西欧の資料に登場するのは1555年である。いつ頃からどのような事情でポルトガル人がマカオに居住するようになったかは資料によって異なるが、1557年に海賊平定の功績によって、マカオに永久居留権を獲得して中国との正規の交易がはじまったという説が妥当のようである。

後期倭寇のために日中間の正規の貿易が断絶していた間に、ポルトガルが日本と中国の間の仲介貿易を一手に引き受けるようになった。これによってマカオは急速に発展し、以

来マカオが東アジアにおけるポルトガルの根拠地となった。(松田毅一「日本の南蛮文化」、東光博英「マカオの歴史」)。

鉄砲伝来 そこにいたる過程の1543年、中国船に乗ったポルトガル人が種子島に流れ着き、鉄砲を日本に伝えたことはよく知られている。後期倭寇の非合法交易の一拠点になっていた琉球を別にすれば、鉄砲を伝えたこのポルトガル人の種子島来訪が記録に残された初の訪日西洋人ということになる。鉄砲伝来は種子島14代領主種子島時堯(1528~79)の時代であるが、これを伝える日本側の資料は、時堯の次男16代領主久時(1568~1612)の時に、薩摩の家臣南浦文之がまとめた「鉄炮記」(1625年刊)の記述である。これによると、1543(天文12)年、百余人を乗せた中国の大船が種子島南端の門倉岬に漂着した。その地を治めていた西村織部丞が同船に乗っていた明人(倭寇の首魁王直と推定されている)と筆談を交わしたところ、同船にポルトガル人(フランシスコ、ダ・モッタら3名とされる)が乗っており、彼らは交易を求めていると伝えたため、種子島領主の居城のある赤尾木の湊に行かせ、時堯に面会させた。その際、ポルトガル人が火縄銃を実射して見せ、その威力に驚いた時堯が大金を払って小銃2丁を買い取った。のみならず、家臣の篠川小四郎に火薬を、鍛冶の矢板金兵衛に銃の製造を学ばせて、ついに種子島で独自に火縄銃を製造することに成功したとされている。ポルトガル人による鉄砲の伝来と、これを学んだ種子島の一党が自前で鉄砲の製造に成功したことは史実だが、来訪の年と来訪したポルトガル人の名前等については、ポルトガル側の資料と符合しない点があり、研究者の間でも決め手がないようである。(宇田川武久「鉄砲伝来」、村井章介「世界史の中の戦国日本」ほか)。

種子島へのポルトガル人来訪は意図したものではなく、嵐による漂流の結果であったが、これをきっかけにポルトガル商船が鹿児島を訪れるようになった。しかし、商人たちの行動は港湾地区とその周辺にとどまっておらず、日本の内陸深くにまで足跡を残した最初の西欧人は、カトリック教布教のために来日したイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルとその一行であった。日本史のなかで16世紀後半から17世紀前半にかけての約100年間は、「キリシタンの世紀」という呼び名でも知られる特別な時代である。はるばるイベリア半島のポルトガル・スペイン両国とイタリアから、カトリック教の布教のために、多数の宣教師や修道士が命をかけてアジアにまでやってきた。日本人でさえ国内旅行が極めて困難であった戦乱の時期に、宣教師たちが縦横に列島を旅してまわる様子は、その足跡を追ってみるとまことに驚嘆に値する。

2. フランシスコ・ザビエルの来日と初期の布教

西欧人(南蛮人と呼ばれた)との接触は、日本人にとって、学びかつなじんできた中国や韓国との交流とは異質で、彼らはまったく新しい文明と文化をもたらした。宣教師の説く世界観は人々を驚かせ、彼らが持ち込んだ世界地図や地球儀を見て、それまでの日本人の世界観は崩壊した。それらがいかに強烈なカルチャーショックであったかを知るために、

まず、初期のキリスト教布教者たちの活動を少し詳しくみてみよう。

ザビエル来日まで

ポルトガルのアジアへの進出は、イエズス会によるカトリック教の布教と一体となっていた。イエズス会はヨーロッパのルネサンスと宗教改革の激動の時代に誕生した新しいカトリック修道会である。指導者はピレネー山中のナバラ州貴族出身のイグナチオ・デ・ロヨラであった。フランシスコ・ザビエルも同じナバラ州出身で、ロヨラのイエズス会設立の同志であり、アジア布教活動のリーダーとなった。本章の最重要主人公の一人であるザビエルを中心に、イエズス会設立の経緯を簡単に見ておこう。

イエズス会 フランシスコ・ザビエル（1506～52）は、ピレネー山中バスク地方のナバラ王国の名門スペイン貴族の子として生まれた。1525年、19歳でパリ大学に留学し、ここで転入してきた同じバスク出身の年長のロヨラ（1491～1556）と出会い、この出会いが彼の人生を激変させることになった。二人の出会いに先立つ1521年、二人の出身地ナバラ王国で、神聖ローマ帝国の皇帝位を継いだスペイン・ハプスブルク家のカール五世と皇帝位継承のライバルでもあった隣国フランスのフランソワ一世との間で戦いが行われ、ザビエル家はフランス側、ロヨラ家はスペイン側について闘った。ロヨラはこの戦いで脚に砲弾を受けて瀕死の重傷を負った。死線をさまよったが幸い回復し、その過程でロヨラは信仰を深め、聖職者の道を志すこととなった。1523年に聖地エルサレムを訪れ、そのまま留まることを望んだが、聖地のフランシスコ修道会代表はトルコとの関係が不安定で危険であることから長期滞在を許可せず、ロヨラはいったんスペインに戻った。スペインで神学を学んだあと、1525年、37歳でパリ大学に転入してザビエルに出会ったのであった。ロヨラは後世カトリック教の金字塔となる「霊操」（肉体を鍛えるように精神を鍛える法）を創造し、これによって若き友人たちを指導して仲間を得た。1534年8月15日、ザビエルを含むパリ大学の学生6人とともにモンマルトルの丘の中腹にあったサンドニ聖堂（現在サクレ・クール寺院が建っている場所にあった）に集まり、生涯を神にささげ、聖地エルサレムでの奉仕、それができなければ教皇の命ずる場所のどこにでも行って奉仕することを誓った。カトリック教会の世俗化と腐敗への批判から生じた宗教改革運動の中で、カトリック教会側に立つ熱烈な改革派の登場であった。

そのあと彼らはオスマントルコ帝国支配下の聖地エルサレムに行こうとしたが、当時ヴェネチアとトルコの間で戦争（プレヴェザの海戦）が行われていて果たせなかった。そこで1538年、ローマ教皇を訪問し、カトリック教会のために心身を捧げて働くことを申し出て、イエスに心身をささげることの意味する「イエズス会」（the Society of Jesus）結成の許可を申請した。行動力に溢れる若き信徒たちに期待した教皇は、1540年、新修道会「イエズス会」の設立を許可し、折からポルトガル王の使節によってもたらされたアジア伝道への協力要請を彼らに託したのであった。

当時のポルトガル王ジョアン3世（在位1521～57）は、アジア進出に成功すると、キリ

スト教の布教もポルトガルの使命と考え、アジアに派遣できる宣教師を推薦してもらうようローマ教皇に依頼したのであった。教皇のもとに派遣されたジョアン三世の使節がローマに到着したのと同じ時期にロヨラたちがローマに現れ、教皇がポルトガル王の意向をロヨラに伝え、イエズス会は喜んでこの使命を受入れた。アジア布教がいわばイエズス会の初仕事となり、メンバーの中からポルトガル人シモン・ロドリゲスとスペイン人ニコラス・ボバディリアの2名がアジア布教の任務を与えられた。ところがボバディリアが病気で行けなくなり、代わってフランシスコ・ザビエルがアジアに赴くことになったのであった。

ザビエルのアジアへの旅 かくしてザビエルは、ポルトガル王派遣によるローマ教皇使節の肩書を得て、翌1541年4月7日、2名のイエズス会員（いずれもスペイン人）とともに、リスボン港からアジアに旅立って行った。この時ザビエルは35歳であった。1541年の秋と冬はアフリカ東岸のモザンビークで過ごし、翌1542年2月に同地を出発、5月6日にゴアに到着した。ゴアを拠点にインド各地で布教活動を行なったのち、1545年にはマラッカ、1546年にはモルッカ諸島へと移動して、それぞれの地で布教活動に従事した。

この時まで、ザビエルは日本に行くなど夢にも考えていなかったし、そもそも日本のことなど聞いたこともなかった。ザビエルが日本での布教を決意するのは、鹿児島県出身のアンジロー（またはヤジロー）という日本人青年に出会い、アンジローの人柄に好感を持ち、彼から聞いた日本を理想的な布教の地と考えたためであった。ザビエル来訪のきっかけをつくったアンジローについても触れておこう。

アンジローとの出会い ザビエルに日本布教を決意させた日本人アンジローについて、日本側には何一つ資料が残っていない。しかし、ザビエルをはじめ、ルイス・フロイス、メンデス・ピントなど日本に来た初期のポルトガル人の間ではよく知られた存在で、彼らの報告に頻りに登場する。アンジローは、薩摩で犯した罪の救いを求めてマラッカに赴いてザビエルに会い、ポルトガル語で自身の思いを語り、日本の事情を説明した。ザビエルにゴアの聖パウロ学院で学ぶよう招かれ、日本人として初めて洗礼をうけ、以後パウロ・デ・サンタ・フェの洗礼名で知られることになる。その後、日本でのキリスト教布教の協力者としてザビエルとともに薩摩に戻り、薩摩ではザビエルの通訳として活躍した。

アンジローがザビエルに会い、ザビエルに日本行きを決意させるに至るいきさつは、1548年11月29日にアンジローがイエズス会本部に出した書簡（イエズス会日本年報上 p 3～4）で自らくわしく書いているし、アンジローの行動については、岸野久「ザビエルの同伴者アンジロー：戦国時代の国際人」が整理して詳しく紹介している。ザビエルの書簡集（「聖フランシスコ・ザビエル全書簡①～④」）からも適宜補って紹介すると、概要次の通りである。

アンジローは何らかの事情で人を殺し、鹿児島のある僧院に隠れていたが、同地にポルトガル船が複数隻停泊しており、その1隻の船長アルヴァロ・ヴァスを知っていた。ヴァスはアンジローの身に起こったことを知って、彼の土地（マラッカ）に来る気はないかと

誘った。アンジローがそれを望んだので、ヴァスは先に船出する別のポルトガル船の船長ドン・エルナンドへの紹介状を書き、アンジローはその紹介状をもって夜間密かにポルトガル船を訪れ、紹介状を渡して乗船させてもらった。ところが、港にはポルトガル船が3隻繫留していて、どう間違えたのか、彼が乗船した船はジョルジェ・アルヴァレス船長（最初に広州に行った同名の人物とは別人）の船であった。アルヴァレスはアンジローを歓待し、親友でもあったザビエルに彼を託そうと考え、ザビエルの人となりや事績をいろいろ語った。アンジローはザビエルに救いを求めてマラッカまで行くことにし、航海中にアルヴァレスが説明してくれたキリスト教の教えに心を動かされ、キリスト教徒になる決心をした。ところが、マラッカについてみると、ザビエルはモルッカ諸島に布教に出かけて不在だった。マラッカ教区長はアンジローの素性或境遇を訊ね、彼がすでに結婚していること、家に戻らなければならないことなどを話すと、異教徒の妻と生活するために国に帰るなら洗礼はできないと言って受け入れなかった。しかたなくアンジローは中国船で中国まで戻り、そこから便を求めて日本への帰国の途に着いたのだが、あと少しというところで大嵐に遭い、中国に吹き戻されてしまった。本来ならここで物事は終わるはずだったが、マラッカ行きを勧めてくれたアルヴァロ・ヴァスに偶然中国で再会し、それまでのいきさつを話すと、自分の船でマラッカに戻ろうと言われ、1547年12月初旬に再びマラッカに行った。マラッカには恩人アルヴァレスもいて、彼の案内でザビエルと会うことができた。

ザビエルのほうは、同年7月にモルッカでの仕事を終えてマラッカに戻り、ゴアへの船便を待つて半年ほどマラッカに滞在していたのだった。間もなくゴアに戻ろうとしていた時期に自ら進んで彼の教えを求めにやってきた日本人アンジローに会い、話し合い、ザビエルはそのことを天からの授かりもののように喜んだ（ヴァリニャーノ p 71）。ザビエルはアンジローに日本の事情をいろいろ尋ねた結果、これまで体験したインドやモルッカ諸島などでの布教に比べ、日本人が知的にも性格的にもキリスト教の教えを受入れる可能性が高いと判断し、日本への布教を決意した。ザビエルとアンジローの最初の邂逅は、上述の通りザビエルがゴアに出発するまでのわずか1週間ほどの間の出来事で、その間に二人は多くを語り合った。アンジローは、かなりの程度ポルトガル語を話す能力を身につけていたから、ザビエルは現地人と通訳を介せずに直接会話できたこと自体を大変喜んだ。ザビエルはアンジローの話に感銘を受け、日本への布教を真剣に考えるようになったが、これにはイエズス会本部の了解が必要だったから、ゴアへの帰還前に日本布教の可否を判断して結論を出す必要があった。

アンジローの教育 アンジローの身分について、実際にアンジローを知っていたイエズス会の宣教師たちは、アンジローを武士階級ないし裕福な家の出と推定しているが、岸野は薩摩脱出前にポルトガル商人の知己を得ていてポルトガル語を多少なりとも話せたこと、ザビエルがアンジローは漢文の読み書きができず、日本の情報を文書で確認することができなかつたと言っていることなどから、商人であった可能性が高いとしている。また、アンジローには二人の日本人の従者がおり、それぞれ洗礼を受けてジョアネおよびアントニ

オの洗礼名をもらっているが、彼らの日本名は伝わっていない。ジョアネの方はアンジローの召使いであったが、アントニオの方はザビエルに譲渡されたと書かれており、ポルトガル人が所有していた奴隷だった可能性がある」と推論している。

ザビエルは、アンジローをゴアに設置されていた現地人のための布教要員養成学校である聖パウロ学院に入学させて日本布教の支援者に育てるため、ゴアに帯同しようとしたが、アンジローはゴアには恩人アルヴァレスの船で行きたいと希望を述べて別行した。かくして、アンジローは日本人のジョアネとアントニオとともに洗礼を受け、ゴアの聖パウロ学院で約1年間日本布教要員としてポルトガル語や教理を学んだ。彼らは初めて西洋式教育を受けた日本人であった。学院長ランチロットはアンジローを「非常に才知ある聡明な者で、私たちの誰からも羨ましがられるほどだった」と高く評価している。こうしたいきさは、アンジローが1548年にイエズス会のロヨラ総長あてに出した書簡に詳しく述べられている。

アンジローの教育係としてもう一人コスメ・デ・トーレスが加えられた。トーレスはヴァレンシア生まれのスペイン人で、スペインの西廻り航路でヌエヴァ・エスパーニャ（メキシコ）に渡って布教に従事したあと、ルイ・ロペス・デ・ビリャロボス率いるアジア向け太平洋航路探検隊に参加して香料諸島にやってきたが、この時のスペイン艦隊はポルトガル艦隊に拿捕され（1545年）、トーレスも捕えられた。ポルトガルに護送される途中、香料諸島で布教中のザビエルに出会い、これがトーレスの人生を変えることとなった。トーレスはザビエルに心酔し、ゴアでイエズス会に入会した。その結果、ザビエルの日本布教に同行してザビエルが日本を去った後を託され、初代の日本布教長となって20年間を過ごし、日本に骨を埋めることになる。

日本に関する情報収集 ザビエルは日本布教を決意し、来るべき布教に備え、日本に行ったことのあるアルヴァレスに日本情報を取りまとめてくれるよう依頼した。アルヴァレスはこれに応じてそれまでの知識を整理し、短期間に日本の地理、気候、動植物などの自然地理分野の情報から、衣食住、社会生活、風俗習慣、そして日本人の宗教にまで及ぶ「日本情報」（1547年）をまとめてザビエルに提供した。他方、アンジローはゴアで日本布教の即戦力となるよう教育を受ける一方で、ランチロット学院長はアンジローと生活を共にし、アンジローから日本事情を聞きとり、知り得た情報をまとめてザビエルに提供した。岸野久「西欧人の日本発見：ザビエル来日前日本情報の研究」によれば、アルヴァレスの「日本情報」は、マルコ・ポーロ以来の聞きかじり断片情報とは異なり、日本を実際に見た西欧人による初めての日本概論として貴重な資料であった。アルヴァレスは日本に来る前に世界の様々な文化を見聞していて、比較文化的な視点で日本を客観的にとらえており、彼の「日本情報」は日本に対して非常に好意的な内容であった。

次いで、アンジローの話をまとめたランチロットの「日本事情」（1548年）が二番目の日本資料であるが、その最初の情報（第一情報）は、日本布教に直接関わる宗教関係が主であった。これを見たゴアの総督がより広く一般情報をも提供するよう求めたため、第二情

報として日本の歴史や地理、産業、生活習慣などを含む情報がまとめられた。アンジローの情報は、日本人でなくてはわからない具体的な情報をポルトガルに提供した。

日本への苦難の航海 かくしてザビエルは、日本に関するかなりの事前情報を得て、1549年4月15日、日本に向かうべくゴアを出発した。同行者は上記のトーレスと、同じくイエズス会所属の修道士（イルマン）ジョアン・フェルナンデス、それにキリスト教徒となったアンジローとお付の日本人2名、ほかに改宗したインド人と中国人各1名の従僕を含む総勢8名であった。日本布教団は、まず東南アジアへの拠点マラッカに寄り、ポルトガルのマラッカ長官の支援を得て、中国船に乗って直接鹿児島に向かった。ポルトガル船の便が得られず中国船に乗ることになったことについて、アンジローは、日本でキリスト教を布教する場合、キリスト教徒であるポルトガル船員たちの愚行が日本人に不快感を及ぼすことを心配して、むしろ非教徒のシナ人であれば態度が悪く横暴でも、布教への影響がないからむしろ歓迎したと伝えられている。

マラッカからアジアの辺境日本に至る航海は、当時は大変苦難の多い旅であった。ザビエルの書簡は、この時代のアジアでの航海がいかに困難かつ危険であるかを如実に示す証言である。ザビエルは日本に渡航する前にヨーロッパに送った書簡で次のように書いている。「…日本への渡航はたいへん危険で、大暴風雨、たくさんの浅瀬、無数の海賊の脅威があり、3隻のうち2隻が到着できれば大成功とされているくらいです」と書き、併せて、日本への船の便の確保が困難な事情が書かれている。定期的な便船のようなものがあるわけではないし、この時点では軍艦で送ってもらうことは論外だったから、ポルトガル商船か中国商船に特別に依頼して乗せてもらうしか方法がなかった。ゴアの総督はマラッカ要塞長官に対し、日本布教のための便宜をはかるよう指示を出し、長官も最善を尽くしてくれたのだが、ザビエルの希望する日本への直行輸送に同意するポルトガル船は1隻もなかった。中国に寄って商売をするついでに日本まで行くのならともかく、直行するメリットは何もなかったからである。そこで長官は中国のジャンク船を手配するのだが、権威を背景に、妻帯してマラッカに住んでいるアバンなる（あだ名は海賊）異教徒の中国商人にジャンク船を用意することを命じたうえに、「…長官は船長に、私（ザビエル）たちを日本に渡航させる責務を課しました。この船長がもし日本から私^{バドロン}が書いた手紙を持ってこなければ、船長の妻と持っている財産のすべてを没収されることを認めると書いた保証書を作成しました。そして長官は私たちが必要とする物をすべて、完全に準備してくださいました」（「ザビエル全書簡③」書簡第84）。

鹿児島到着後に書いたザビエルの書簡第90は、その航海が苦難の連続であったことを抑制された怒りとともに記している。「…1549年の洗礼者ヨハネの祝日（6月24日）に乗船し、出帆してからは好天と順風に恵まれていたのに、変わりやすいのは異教徒の常で、船長は日本への針路を変えはじめ、途中の島々で船を停泊させました。」そして、季節風の時期が終わりそうになり、次の季節風を待って越冬しなければならなくなることをザビエルらが心配するのをよそに、「…中国人たちはおみくじを引いて占いを始めました。おみくじ



によれば、日本へは行けるがマラッカへは帰れないと出て、中国で越冬することに決めてしまいました。」ところが、コーチシナを北上中の7月21日、しけ模様になって船を停泊しているときに、ザビエルの従僕の中国人マヌエルがどうしたのか開いていたハッチに落ちて大けがをした。なんとか彼は救出されたのだが、荒れ続ける天候の中で船長の娘が波にさらわれて行方不明になってしまった。彼らはまたしても占をし、船長の娘が死んだ理由はマヌエルがハッチに落ちて騒ぎが起きた結果であると出てひと騒動にな

った。ザビエルはこの事件を報告した後で、「私たちの生命が悪魔のおみくじとその僕^{しもべ}や族^{やから}の手中に握られていたことを考えてみてください。もしも神が、悪魔の望むままに私たちに害を加えることをお許しになっていたら、私たちはどうなっていたでしょうか。彼らが偶像を崇拝することで主なる神を公然と侮辱するのを見ていながら、私たちはそれをどうすることもできませんでした」（全書簡③ p 90）。

このあと嵐が治まって航海を続け、広州の正面にある島の港に着くと、彼らはここで越冬することを決めてしまった。ザビエルたちは、約束を果たそうとしないことをマラッカの長官に手紙を書くし、出会うポルトガル船の商人たちに話すや脅したりすかしたりしてなんとか旅を続けさせた。船がチンチェオ（漳州）という港まで来た時、船長は今度こそ日本行きを1年先延ばしにしてこの港で越冬すると言って港に入ろうとした。だが、港から来た帆船が同港は海賊に占拠されていて危険だと伝えたため、広州に引き返そうとしたが逆風で戻れず、やむを得ず順風だった日本の方向に向けて走り出すことになった。かくして神の加護を得てさまざまな困難を排し、マラッカから直航しようと船出して50余日かかって、1549年8月15日、ついに一行は鹿児島に到着したのであった。

ザビエルの手紙はこんな具合にいらだちと迷信に満ちた中国人への反感に満ちているが、村井章介は「世界史の中の戦国日本」の中で、手紙をよく読むと、船長の行動はザビエルが思うほど『迷信』に支配されていたわけではなく、ザビエルを日本に送り届けることだけでは採算がとれないから、あちこちの岬によって錨を降ろしては南海産物を中国に運ぶ密貿易行為をしながらの航海であったに違いないと述べている。布教を急ぐだけのザビエルの目には何の理由もない行為と映ったであろうが、様々な荷を積み降ろしした様子が窺われると言っている。おそらくそういうことだったのであろう。

ちなみに、当時の航海法では、東南方面から6、7月ごろに南の季節風に乗って日本の港に到着し、帰途は晩秋、初冬の北風には帆をはらませて往来するのが唯一の方法であった。

鹿児島上陸 鹿児島は琉球列島から薩南諸島を経て日本に到達する南の玄関である。ザビ

エルが鹿児島に来たときの薩摩の藩主は島津貴久で、島津家の内乱を鎮め、南九州一帯に支配勢力を伸ばそうとしていた。貴久は島津家再興の祖といわれる英名な君主で、種子島氏から鉄砲を献上されると、最初に戦闘で使用した人物とされている。南蛮貿易に関心が高く、応仁の乱以降とくに勘合貿易に積極的に係わり、国力を増強しようとしていた。

このような時期に現れたザビエル一行は、鹿児島の官憲や市民の予想外の大歓迎を受けた。その様子が以下のように、ザビエルの本部への書簡に残されている。

善良で誠実な友、パウロ・デ・サンタフェ（アンジローのこと）の町で、城代や奉行はたいへんな好意と愛情をもって迎えてくださいました。そして、一般の人すべても同じように歓迎し、ポルトガルの地から来た神父たちを見て、皆たいそう驚嘆しています。パウロがキリスト教徒になったことを奇異に感じる者は誰もおりません。むしろ彼を尊敬しています。そして親戚も、親戚でない人たちもすべて、彼がこの地の日本人が見たこともないものをインドで見してきたことを、パウロ本人とともに喜んでいきます。また、この地の領主（島津貴久）も彼を引見して大いに喜ばれ、たいへん礼遇して、ポルトガル人の生活様式や気品の高いことなどについて訊ねられました。そしてパウロはすべての質問についてよく説明をしましたので、領主はたいへん満足されました。（1549年11月5日付け鹿児島発書簡90）

アンジローは到着後すぐにザビエルの名代として島津貴久の居城伊集院城に出向いている。貴久はポルトガル人への興味や南蛮貿易への関心からザビエルらの来訪を歓迎し、外国を体験して国際人となって戻ってきたアンジローにも敬意を表した。ザビエル自身が貴久に会ったのは、到着後1か月ほどたった6月29日であった。貴久はザビエルを歓迎し、臣下がキリスト教徒になることを快く許可し、布教の自由を与えたのであった。上のザビエルの書簡はその時の喜びを書き送った鹿児島到着後の第一信である。ザビエルは今後の布教の予定については、なるべく早くミヤコ（京都）に行きたいが、京都行きは風向きが順風になるまで5か月ほど待たなくてはならないだろうと書いている。岸野「ザビエルの同伴者アンジロー」によれば、ザビエルは貴久とのこの時の面談で、できるだけ速やかに天皇に面会し、布教の許可を得、さらに京都にある諸大学を訪れて日本の宗教について調べたいとの希望を述べ、貴久に船の便を使用させてほしいと要望した。これに対し貴久は、万事便宜を図ろうと約束はしたが、風向きの具合もあり、また目下国内は戦争中ですぐには要望に応じられないとことわっている。

日本におけるザビエル

ザビエルは日本に2年3か月滞在して京都まで行ったが、戦乱が激しくて布教活動はままならず、後事をトーレス神父に託して豊後大分からインドに戻っていく。その経緯をざっと辿ってみよう。

鹿児島ー平戸ー山口 ザビエルの鹿児島滞在は10か月に及んだが、貴久は戦争で道が寸断

されていて京都に上がるのは不可能だと言って引き留めていた。その頃、平戸に中国からポルトガル船が入ったという知らせが鹿児島に届いた。ザビエルは、インドやヨーロッパのイエズス会員からの書簡などが同船でもたらされたかもしれないと期待して、平戸に向いて行った。1か月ほどで鹿児島に戻ったが、京都への旅があまりにも遅れることに我慢ができなくなり、ポルトガル船のいる平戸に布教団を移動させることを決意した。他方、当初こそ物珍しさとポルトガルとの通商の期待が絡んで、鹿児島の社会全体がザビエルら一行を歓迎するムードにあったが、やがて仏教界からの反発が強まって軋轢が生じると、貴久が態度を変えてキリスト教の布教を禁じる方向に転じていた。このためザビエルは、アンジローひとりを布教者兼改宗キリシタンの世話役として残し、1550年9月、ゴアから一緒に来たトーレス神父、フェルナンデス修道士の両イエズス会員、日本人のジョアンとアントニオ、ほかにザビエルが鹿児島で洗礼を受けた日本人ベルナルド（日本名は不詳）を連れて平戸に移った。

当時平戸には、後期倭寇の首領王直が中国を追われて五島列島に本拠を移し、南蛮貿易を求める領主松浦隆信の許しを得て、平戸にも館を構えていた。平戸港にポルトガル商船が初めて入港してきたのはそのためであった。松浦隆信はザビエルを歓迎して布教を許したが、ザビエルは平戸では2カ月活動しただけで京都行きを急ぎ、直接京都へ行く方法が見つからなかったため、いったん周防まで行ってそこから京都への道を探すこととした。ザビエルはトーレス神父と日本人のジョアネとアントニオ、改宗インド人（アマドル）を平戸に残し、すでに日本語が達者になっていたフェルナデス修道士と薩摩人ベルナルドだけを連れて山口に向かった。当時各地が戦国争乱で疲弊している中で、山口は勘合貿易を支配していた大内義隆の城下町として栄え、町の人口も4万人に達していて、京都の文化が一時的にここに移ってきた（小京都）と言われるほど賑わっていたからである。途中博多に立ち寄った時、禅宗の大きな寺院に赴き僧侶たちと面会した。この時の会見について、僧侶らはザビエルを仏教祖先の地インドからの来訪者として歓迎したが、ザビエルは僧侶たちが現世だけを認めて天国を否定し、公然と男児を抱えて男色にふけていることを知って激しく怒り、呆然とする僧侶たちを残して立ち去った、と同行したフェルナンデスがフロイスに語っている。（フロイスの日本史⑥「ザビエルの来日と初期の布教活動」p44.）

山口では街頭で布教活動を行ったが、関心を持った武士階級に呼ばれたほか、藩主大内義隆にも招かれて、日本に来た理由その他さまざまな質問を受け、キリスト教の教えについて説明した。ザビエルの書簡では、義隆は注意深く聞いてくれ、帰りには見送ってくれたと書いているが、この時義隆は、ザビエルが汚れた服装のまま進物も持たずに現れ、多妻制や男色などを非難する彼の言説を聴いて立腹し、布教の許可を出さなかったという。

京都への旅 そこで、ザビエルは山口には数日滞在しただけで京都に向かった。山口から京都への旅はおよそ2カ月かかった。「私たちが通った所で沢山の戦があったので、途中でいろいろ危険な目にあいました。でも、ここではミヤコでの酷い寒さや、途中で出会ったたくさんの盗人のことは話しません」と書いている（ヨーロッパのイエズス会員あて書簡

96)。実際、京都に来て見ると、天皇も将軍も統治能力を失って内戦状態にあり、布教どころではなかったため、ザビエルは11日間京都に滞在しただけで山口に戻っていった。再訪した山口では、ゴアから持参してきた天皇ないし国王への贈物としてえりすぐった品々を大内義隆に献上して喜ばれた。日本では見ることもできない精巧な大型の機械時計や小型ピアノ、美しいガラス器や鏡、眼鏡、それに当時まだヨーロッパでも高級品であった燧石銃も含まれていた。いずれもヨーロッパ文明の素晴らしさを示すものの最初の到来物と言えそうだが、残念ながらこれらの現物は残っていない。

最初の時と違い、すでに偉い人に面会するには着飾る必要があることも学習していたので、美々しく礼装して訪問したことも良い結果につながった。義隆は贈物へのお礼として多くの贈物や金銀を与えようとしたが、ザビエルは頂くなら贈物や金銀ではなく、キリスト教の教えを説く許可を求めたいといい、布教の許可を与えられた。かくて山口での布教が始まったのだが、周防滞在中の1551年8月、大内義隆が家臣の陶晴賢に討たれるという事件が起こり、同年9月には豊後の領主大友義鎮（宗麟）から、ポルトガル船が来訪し、話したいこともあるので来てほしいとの依頼を受けた。その船長がザビエルの旧知の者（ドゥアルテ・デ・ガマ：アルメイダ p 11、宗麟 I p 59）であり、インドからの書簡や送付物への期待もあって、求めに応じて豊後（大分）に行った（フロイス① p 58）。

豊後大分から帰国の旅へ このときザビエルは、トーレス神父とフェルナンデス修道士を、山口で得た信徒とともに残して大分にいった。しかし、インド本部からの書簡は来ておらず、ザビエルは連絡が途絶えていることを心配し、一度ゴアに戻って日本の布教陣を強化する決意を固めた。そこで山口には帰らず、日本での布教の後事をトーレス神父に託して、1551年のうちに豊後から乗船して帰国の旅へと出帆した。ザビエルは、鹿児島で洗礼を受けた4人の日本人と山口で得た信徒マテオを伴ってゴアに戻った。このうち薩摩のベルナルドと山口のマテオは聖パウロ学院で学び、ともにローマまで行くことを希望したが、マテオは1552年にゴアで死亡し、ベルナルドだけが日本人として初めてヨーロッパに渡った。ベルナルドは1553年にリスボンに着き、コインブラでイエズス会に入会し、さらに1555年にはローマに行って総長ロヨラにも面会している。彼は日本に帰国することなくコインブラで亡くなった。

ザビエルは、本格的な日本布教のためには、日本文化に大きな影響を与えている中国での布教が不可欠と判断していた。というのは、日本に来てみて、日本人とくに仏僧はすべて良いものは中国に由来すると考えており、実際に「中国人からキリスト教徒のことなど聞いたことがない、もしキリスト教の偉大さが本当なら、中国でも知られているはずだ」などと言われることが多かったからである。そこで、1552年4月、中国に向けてゴアを出港し、9月に広東省の上川島に到着したが、中国入国がままならないまま同地で病に倒れ、同年12月3日に亡くなった。本国出発以来二度と故国に帰ることのない46歳での死であった。中国はもともと外国人が国内に居住することを好まず、1557年以降もマカオ以外に南蛮人は居住できなかった。中国布教がはじまるのは日本より半世紀遅れ、マカオで中国

語と中国文化を学んだマテオ・リッチ（1552～1610）が有力者の信任を得て、1601年に北京に住むことを許されてからのことである。

なお、鹿児島に残されたアンジローは、その後仏教徒との確執などから鹿児島を離れ、中国で海賊に殺されたとされているが、記録は残っていない。

トーレスの時代：ザビエル以後の布教活動

ザビエルが日本を去ったあと、コスメ・デ・トーレス（1510～70）がザビエルの指名によって日本布教の初代（ザビエルを初代とすれば二代目）責任者になった。トーレスはスペインのヴァレンシア出身の司祭で、アメリカ大陸経由太平洋を横断してモルッカ諸島にやってきた人であることは既に述べた。モルッカでザビエルに会って心酔し、一緒にゴアに行き、イエズス会に入会し、ザビエルに同行して日本に来たのであった。トーレスは、このうち1570年に亡くなるまでの約20年間、日本布教の責任者として過ごすことになる。

ザビエルが去って、西欧人は宣教師トーレスと修道士フェルナンデスの二人だけになったが、ザビエルはゴアに戻ると、1552年4月、バルタザール・ガーゴ（1520～83）と修道士2名（ドゥアルテ・ダ・シルヴァとペドロ・デ・アルカソヴァ）に、日本人アントニオを通訳につけて日本に送ることにし、自身は中国に赴くために彼らとともに船出したのであった。ガーゴらはマラッカでザビエルと別れ、8月14日鹿児島に到着した。薩摩藩主には歓迎されたが、鹿児島には1週間ほど滞在しただけで豊後に向かい、9月7日に到着した。トーレスは当時山口にいたので、ガーゴは山口に出向いて指示を受け、豊後の布教担当に任じられた。ガーゴは豊後で多くの信徒を獲得したが、トーレスは信徒およそ500人がいる平戸が司祭不在のままであることを心配し、1555年ガーゴを平戸に送り、ガーゴは以後平戸で活動した。ガーゴが豊後を発って平戸に向かうとき、大友宗麟が支援したことがダ・シルバ修道士の書簡に次に様に書かれている。「…ガーゴ神父が豊後を出発せんとするとき、豊後の王大友殿がわが住院に来て、平戸への旅の途中必要な一切の世話をなす一人の武士を派遣するので道中少しも心配するに及ばずと言ひ、また神父に馬および糧食を供給するよう道中の在域の武将たちに命じ、当地にては馬四頭を給せられたので、ガーゴ神父一行は安全な旅ができました。このような配慮は道中に盗賊が多いので必要なことでした」（1555年9月22日付ドゥアルテ・ダ・シルバ修道士の豊後からインドのイエズス会員宛書簡、翻訳が文語体なので東野利夫「南蛮医アルメイダ」の同個所の改訳を借用した）。

山口での布教 トーレスは、陶晴賢の仲介で大内家の嗣子に迎えられた大友宗麟の実弟晴英（義長）によって、古寺のあった広大な地域を与えられ、教会（大道寺）と司祭館を建てた。トーレスらはここを日本布教の拠点とし、後続の宣教師らとともに北九州から山口にいたる地域で活発な布教活動を行い、かなりの信徒を得ることができた。1552年のクリスマスは、到着したばかりのガーゴ神父と修道士2名とともに、司祭館に信徒たちを招いて盛大に祝い、これが日本で祝われた初のクリスマスとされている。山口での布教は成功

し、山口のキリシタンは1553年に1500人、1555年には2000人へと増えていた。山口での成功に自信を得たトーレスは、ザビエルの意志を継いで京都での布教に着手するため、1556年はじめに京都布教の免許状をもらうべく日本人説教師ロレンソを比叡山に派遣した。京都に赴いたロレンソは大内氏の信任状を持参するよう言われて断られ、山口に戻ってきたのだったが、その時点で既に山口は毛利元就の攻撃を受け、大内義長は避難し、トーレスも豊後府内（大分）に退避していて、京都布教の件は立ち消えとなった。ロレンソは平戸生まれの半盲の琵琶法師だった人で、山口でザビエルの説教を聞いてキリシタンになり、ザビエル離日後はイエズス会の神父や修道士を助けて日本布教に尽力した人物である。

世は戦国時代で、1555年にこの地域の実質的権力者だった陶晴賢が厳島の戦いで死ぬと、大内領内の長門・周防は統制を失った。1556年からは毛利元就が領内に進攻し、山口も戦火にみまわれて教会も司祭館も焼失してしまった。トーレスらは大分に退避し、1557年には庇護者大内義長も戦死し、そのあとに権力の座に着いた毛利元就がキリスト教を嫌ったため、山口での布教活動は終了した。

ガスパール・ヴィレラ 次いで日本に送られてきた宣教師がガスパール・ヴィレラ（1525？～72）である。彼は1553年にゴアに来てイエズス会に入り、司祭に任じられた。翌1554年に日本視察に赴くイエズス会のインド管区副管区長ヌーネス・バレットと一緒にゴアを出立したが、この旅は様々な障害や苦難に満ちた航海であった。上川島でザビエルの墓に詣でてミサを上げ、出立後2年もかかってようやく1556年に豊後府内（大分）に到着した。ヴィレラはただちに布教活動に備えて日本語と日本文化の研究を開始し、同地で布教活動に入った。他方、ヌーネス神父は当時のインドで神学の第一人者とされた人であったが、日本滞在中に熱病にかかり、日本布教の助けにならなかつたばかりか、「…日本人を蔑視し、木の枕、筵に寝ることを野蛮とした。また味気ない米と大根や干魚を食べている人種を低級」とした人で、府内滞在わずか3か月で、乗ってきたポルトガル船で同年中にインドへ戻っていった。

1557年9月にポルトガル船2隻が平戸に到着すると、トーレスはヴィレラをガーゴの補佐として平戸に送った。翌1558年に博多を支配下に置いていた大友義鎮（宗麟）が同地に教会を建てる土地を与えてくれたので、ガーゴが博多に移って教会を建設した。しかし、翌1559年筑紫惟門の乱が起って市内が焼き払われ、宣教師たちは避難して一時市民や信徒にかくまわれて過ごした。その間にガーゴ神父が病気になるため、トーレスは彼をゴアに返し、日本布教の状況を報告させ、陣容不足を補う司祭の増派を訴える任務を託した。ガーゴは多くのキリシタンとの涙の別れの後豊後を出発し、大変苦難な航海の末に1561年1月マラッカに辿りつき、そこからようやくゴアに帰着した。

ガーゴに代わって平戸布教の責任者となったヴィレラは、平戸で約1500人に洗礼を施し、その意味では成功した。しかし、ヴィレラは日本の既成宗教（仏教）を悪魔の宗教とみなし、悪習をただちに根絶したいという直情から、日本人信徒らに寺社から仏像や經典などを奪って焼却させるなどの過激な行動に出たため、仏教僧たちとの摩擦が激化し、領主松

浦隆信によって退去を命じられた（1558年）。さらに1561年には、寄港したポルトガル商船の船長以下乗組員14人が地元商人との取引がこじれて殺される事件（宮ノ前事件）が起きた時、松浦隆信がこれを座視したことから、トーレスは以後平戸へのポルトガル船の入港を禁止し、ひそかに測量して水深も充分あって適地と判断した大村領内の横瀬浦（現西海市）を寄港地として使うこととなった。

宮ノ前事件のあと、ヴィレラはトーレスの命で京都に派遣され、ザビエルが果たせなかったミヤコでの布教に乗り出していく。京都および畿内での布教については次項で扱うことにし、先に九州における布教の状況をもう少し見ておこう。

ルイス・デ・アルメイダの九州伝道の旅

まず、日本布教で大なる貢献を果たしたイルマン（修道士）ルイス・デ・アルメイダ（1525?～83）について見ておきたい。アルメイダは1546年にポルトガル王ジョアン三世から、ポルトガル全領土における外科の施術と教授の免許証を下付されて医師となり（アルメイダ p130）、2年後の1548年、商人として世界に雄飛すべくインドに向かった。1552年に初来日し、中国と日本の間を往復しながら商人として多大の富を築いた。この間アルメイダはトーレス師に会い、考えるところがあって1555年に平戸に再来し、豊後府内（大分）に行った。イエズス会員となるための厳しい修業を行ない、1556年に蓄えていた巨額の富を寄進して入会した。商人から修道士への転身の理由は不明だが、アルメイダの事績を追究した東野利夫「南蛮医アルメイダ」は、1554年に難破した商船にアルメイダが乗っていて、九死に一生を得た体験が彼を変えたのではないかと推論している。裏付ける資料はない。

南蛮医アルメイダ 戦国の厳しい世のこととて、民衆の間で生活苦と子育ての心労から、生まれて間もない子を殺す嬰兒殺しの悪習がはびこっていた。入り江の砂地に乳児を置き去りにして満ち潮で溺死させるなどの子殺しを知って心を痛めたアルメイダは、1555年、私財を投じて育児施設を設置することを領主大友義鎮（宗麟）に申し出た。子育てができない場合も殺してはならず、この施設に連れてくるよう命令を出してくれるよう請願し、聞き届けられた。「この施設には貧しいキリシタンの乳母と2頭の牝牛、その他必要な設備を施して、孤児たちが栄養失調で死亡しないよう配慮」し（ガーゴ書簡）、ミゼリコルディア（慈悲の組織）によって運営された。しかし、牛の乳を飲ませるといふ当時の日本の習慣では考えられない手段であったせいも、「人間を畜生にする悪魔の仕業」とか「パードレ達は孤児を住院に連れて来させて生き血を吸っている…」などの噂を立てられたうえ、昼夜兼行で奉仕したミゼリコルディアの組員たちの労苦が甚だしく、寒さや下痢の症状などにも苦しんだ。このため約1年後に孤児収容の施設を廃止し、新たに総合病院を創設した。

慈善病院の創設 1557年、アルメイダはトーレス神父の指示と支援により、領主の了解を得て豊後府内にハンセン病棟と一般病棟からなるホスピタル（慈善病院）を建て、内科を日本人キリシタンの医師に任せ、アルメイダは外科医として治療に当たり、日本人スタッ

フに外科医術を伝授した。この病院の運営や治療の内容、医師たちについては東野利夫「南蛮医アルメイダ：戦国日本を生き抜いたポルトガル人」が多くの記録を渉猟して詳しく描いている。豊後府内のこの慈善病院は評判になり、遠く京都や鎌倉からまで患者が訪れるほどであったという。フロイス「日本史」第1部第31章「1562年、豊後で生じたこと」の冒頭に、「慈善病院には、毎日集まってくる人々以外に、百名以上の人が入院していた。われらの主なるデウスは、彼らに寛大さを示すことを嘉して、重病でまったく回復の望みのなかった人々に完全な健康を与え給うた。彼らの大部分は瘻性の傷を患っていてもう治しようもなかった。彼らは地元の医師に絶望して上記の病院に来たのであるが、デウスの恩寵によって予期されたより短期間に元気になった。それは日本人に大いなる驚嘆の念を起こさせ、彼らにとっては聖なる福音に近づく一つの動機となった…（以下略）」と書かれている。

しかし、このように盛況であったにもかかわらず、1560年に宣教師が医術に携わることを禁じるイエズス会本部の命令が送られてきたため、アルメイダらイエズス会士は病院から手を引き、日本人医療従事者に任された。結局、日本人医療従事者の技量では評判も落ちて衰退し、イエズス会の支援なしには同病院を維持できず、1562年を境にイエズス会の記録から情報が途絶えてしまう。宣教師による医療行為の禁止令は、1558年のイエズス会最高宗門会議で決定されたもので、その趣旨は、聖職者は死すべき宿命を持った人間の魂の永遠の救済こそが真の職務で、現世での肉体の生死にかかわる医療行為や生殺与奪の権をもつ裁判官になってはならぬ、というものであった。

アルメイダがこの命令をどう受け取ったかの記録はない。この措置は日本にとって大変残念なことであり、歴史の「もし」の一つであるが、篠田達明「聖母の鐘：南蛮医アルメイダの遺産」（新潮社、1990）がこの時の話をフィクションとして採り上げていることをご紹介しておこう。こののち、この慈善病院の記述はまったく出てこないが、アルメイダや他の聖職者の書簡の中では、アルメイダが病に悩む人々に助言や薬を与え、診療を行った記録はちらほら垣間見ることができるし、アルメイダから教育を受けた日本人キリシタンの医師らによる医療活動も当然ながらカトリック教の普及に力があつた（宗麟Ⅰ p224）。

ただし、イエズス会は医療を放棄したが、後年スペイン系の修道士会がメキシコ、マニラ経由来日してからは、彼らが南蛮病院を各地に設立して、南蛮医療を通じて信徒を獲得する努力を行っている。

開拓伝道師アルメイダ 病院での医師の仕事を離れたアルメイダは、固定した場所にとどまらない修道士として各地に派遣され、新規伝道地の開拓やキリシタン社会の維持のために座の温まる暇のない活動に追いまわられている。四方八方に飛ぶアルメイダの足跡を追ってみよう。

トーレス師は、1561年6月、アルメイダ修道士に遠隔地にいるキリシタンたちを歴訪するよう指示し、アルメイダはまず博多に行つて同地にいる信徒を慰め、信徒を増やし、18日間滞在した。この時アルメイダのもとには治療を求める病人が多数訪れ、アルメイダは

治療を施した。その中に2人の重病者がいた。「…一人は頭痛がひどく数回自殺を試みた者だったが13日間で健康を回復し、後の一人は全身らい病におかされた青年でしたが、この病にきく薬を持参していなかったため、簡易な薬を試み、三日後には見違えるように清潔になっていました。これらのキリシタンに対しては、薬によって治癒したのではなく、主が彼を癒し給うたのであると話しました」（1561年10月1日付アルメイダ書簡、関連⑥のp217）。そのあと平戸に回り、領主ドン・アントニオ（籠手田安経）の島々である度島、生月島、平戸島を回り、布教に活躍する。この時期に平戸で先述のポルトガル船と地元商人との衝突事件（宮ノ前事件）が起こり、アルメイダは商人時代の知識を活かし、平戸に代わる港として横瀬浦の調査を行っている。アルメイダはこれらの島々での布教に動き回り、海上の嵐、陸上の豪雨や悪路など、幾多の旅行中に会った苦難のため、死ぬのかと思うほどひどく病み、同年8月に豊後に戻った時には1か月間病臥した。p220.

アルメイダが健康を取り戻すと、トーレスは次いで放置したままの薩摩の信徒たちを慰めるためにアルメイダを派遣した。これは鹿児島島の泊港（坊津）に停泊しているポルトガル船の司令官一行が、司祭の来訪を促す島津貴久の書簡を携え、告白のために豊後のトーレスを訪ねてきたので、この機会に薩摩に戻る一行にアルメイダを同行させることにしたのであった。1562年10月25日付けのアルメイダの書簡（日本通信上p265）によると、一行は1561年12月の寒い中を、馬20頭による多人数で九州山脈を横断して有明海に向かっている。第1夜は9レグア離れた山中のキリシタンの寒村朽網で歓迎を受けて過ごし、そこから3日をかけて有明海の港に行き、船を乗り継ぎながら阿久根へ行き、停泊中のポルトガル船の人たちに歓迎された。さらに阿久根からは小舟と陸路を使って市来城の外港に12月末に到着したと推定されている。キリシタンである市来城主新納殿に会い、そのあと鹿児島に行き島津貴久に面会した。貴久はキリスト教には関心がなく、ポルトガル貿易の利だけを求めていると分かってがっかりするが、腰を落ち着けて宣教活動に励む。事実、鹿児島はザビエルが去って以来、神父（パードレ）も修道士（イルマン）もおらず、やるべきことが多かった。

鹿児島滞りが5か月ほどになった翌1562年の4月、トーレス神父から手紙が届き、薩摩のキリシタンの世話役を他に誰か決めて至急豊後に戻り、大村純忠の希望に応じて教を説きに行くようにと書かれていた。大村純忠がイエズス会に横瀬浦の寄進を申し出たからであった。泊港（坊津）を出発し、17日かけていったん豊後に戻り、7月5日（永禄5年6月4日）にフェルナンデス修道士らとともに平戸に代わる貿易港となっていた横瀬浦に向けて出発した。フェルナンデス修道士は経由地の博多に駐在者として残り、アルメイダは7月15日に横瀬浦に到着した。大村純忠に面会し、前年冬にポルトガル船の来訪を歓迎して純忠がイエズス会に約束した、①横瀬浦に数カ所の会堂を建て、維持費を付与するために横瀬浦港の周囲約2レグア（1レグワは約5km）の土地を居住農民とともにイエズス会に寄進すること、②同港内にパードレの意思に反して異教徒が居住することを許さないこと、③ポルトガル船が貿易のために横瀬浦に来る場合10年間一切の税を免除すること、な

どの書面による確認を求めたところ、①の寄進地については、教会領は半分で、残り半分は大村領としたいとのことであったので、この件についてはトーレス神父に報告し、その回答を待ちたいとして辞去した。

トーレスからの返事を待つ間に一軒の住居を建てて祭殿を設けると、平戸からポルトガル人や日本人キリシタンたちが大勢やってきた。そうこうしているうちに、高齢であるうえに過労と過酷な生活条件で消耗して横瀬浦に来るのはもはや体力的に無理と考えられていたトーレスが付近まで来ているとの情報が入り、大いに驚いて出迎えに行った。トーレスは、豊後の領主大友宗麟はキリスト教に同情的ではあるが、領内のキリシタンは増えていかないので、布教の本拠を横瀬浦に移すために来たのであった。ゆえに、この後横瀬浦が豊後府内（大分）に代わって日本布教の本拠地となった。

横瀬浦、口ノ津から長崎へ 平戸入港をやめた後、1562年と63年にかけてポルトガルの大型貿易船が横瀬浦に5隻も入港した。横瀬浦を領有する大村純忠は、1563年6月に家臣25人とともに横瀬浦教会で受洗して初のキリシタン大名となり、大なる貿易の利を得ることができた。しかし、周辺には平戸の松浦隆信、佐賀の竜造寺氏、武雄の後藤貴明らが、大村領内に侵入しようとする状況であったし、純忠（有馬家から大村家に入った養子）の実兄である島原の有馬義貞もポルトガル船誘致という点ではライバルで、1563年には領内島原半島南端の口ノ津を開港していた。口ノ津が選ばれたのは、横瀬浦を布教拠点として以来アルメイダが積極的に周辺に布教活動を広げ、有馬領内でも活動していたからであった。アルメイダは有馬領内で最も熱心にキリスト教を受入れようとした島原純茂の領地から始め、有馬義貞にも接近していた。義貞は実弟の大村純忠から情報を得てキリスト教やポルトガル貿易のことをよく知っており、かねて領内の口ノ津港へのポルトガル船の来航を希望していたという事情があった（アルメイダ p 186）。

横瀬浦はおよそ2年間繁栄したが、大村純忠が信仰熱心なあまり神社仏閣を破壊し、先祖の位牌をないがしろにして仏教徒らを怒らせたこと、弱小戦国武将に過ぎなかった大村純忠の力は弱く、各地で貿易港をめぐる勢力争いが頻発する中で、後藤貴明（大村家を廃嫡されて純忠に座を奪われた人）らによって横瀬浦は焼き払われ（1563年）、その混乱の中で横瀬浦港の役割は終ってしまった。横瀬浦が使えなくなったあと、しばらく長崎湾外北西の福田浦が使われたが、福田浦は直接外洋にさらされていて船の停泊が必ずしも安全といえず、のち1571年に宣教師フィゲレイドとポルトガル船の船長らが調査して、湾の奥の良港長崎を見出してこちらに移転することになる。

横瀬浦焼き討ちのあと、トーレス神父は難を避けて口ノ津へ移り、ポルトガル船も口ノ津港に頻繁に来訪するようになった。この時期に日本にいた西洋人宣教師は、トーレスとヴィレラの2司祭、フェルナデス、アルメイダほか4名の修道士だけであった。そうした弱体の布教体制の中、日本布教強化のために、ルイス・フロイスとイタリア人ジョアン・バプティスタ・デ・モンテの2名の司祭が派遣されてきた。二人は1563年に横瀬浦に到着し、フロイスはフェルナンデスについて日本語を勉強した。1564年、トーレスは京都で孤

軍奮闘しているヴィレラのもとに新任のフロイスを派遣することにし、アルメイダをつけて京都に送り出したのであった。

アルメイダは、京都での使命を終えて豊後に戻ると、大友宗麟と毛利元就の決戦に際し、反キリスト教の毛利に対抗する宗麟を軍事的に応援し、大砲の調達や弾丸製造のための硝石の輸入などで便宜を図ってもいた。戦国時代にあってイエズス会は、積極的にキリシタン大名やキリシタンに好意的な大名に軍事的支援することを当然のこととして行っていたのである。

京都・畿内の布教事始め

ここでしばらく九州を離れ、遡って京都および畿内での布教を始まりからみてみよう。トーレスは、仏教徒との軋轢で平戸を撤退して大分に戻ったヴィレラを、京都に派遣することとした（p 16 参照）。1559年9月5日、日本人修道士ロレンソと同宿（宣教師の補助者）のダミアン、ほかに坂本出身の信徒ディオゴを道案内につけて、豊後の沖の浜から船に乗った。この時代の歴史書で瀬戸内海の旅の実情を描いているものは少ないので、少し長いですが、フロイス「日本史」の記述をもとに、瀬戸内海を経て京都へ行った彼らの旅の模様を紹介しておこう。

ヴィレラ京都へ向かう 沖の浜（この後津波で消失した豊後湾の港）で船に乗り、半里ほど先の守江に行き、潮流を待っているうちに天候がひどくなってきた。そこで日本人たちは彼らの間で布施を集めてその地の神社の巫子に差し出し、神が自分たちによい天候を授けてくれるよう祈ってほしいと願うことにした。彼らはヴィレラにも同意を求め、割り当て分を請うた。これに対しヴィレラは次のように回答したという。

…司祭（ヴィレラ）はそれに答え、自分は天地の創造主に仕える者であり、天候も全人類の生命もその御方の力の内にある。したがって悪魔が考案した神々などに寄進することはできない。その代り、船の水夫たちに馳走するためなら寄付しよう、といった。この返答を聞くと、一同は激昂し、全然寄進しないのならこの船で同行させるわけにはいかぬ、陸に置き去りにしよう、と繰り返した。

司祭は謙虚に主張を繰り返し、自分は外国人なので同情してもらいたいといい、納得はしてもらえなかったようだが、船には乗ることはできた。パードレ（伴天連）達は日本の風俗習慣に適応しようとの方針をもってはいたが、本質的な問題では譲らず、至る所で摩擦を起こしており、違い過ぎる文化のもとでの布教の大変さを思わせる。乗船はできたものの狭く悪臭を放つ場所をあてがわれ、守江から宮島までそれほどの距離はないのに逆風のために5日もかかり、そのことまでも伴天連を乗船させたせいだと罵詈雑言を浴び、侮辱されたと書いている。宮島に着くと、山口でザビエルから洗礼を受けたという老齢のキリシタンに出会い、感激の一夜を過ごしてもいる。そのあと松山の堀江から福山の鞆へ行き、そこで船を乗り換えて播磨の室津（現たつの市）、兵庫の港を経て堺まで行った。その

間風待ちが長引くたびに同じような意地悪をされ、苦しい経験をしている。ちなみに、ザビエルが京都にのぼって時は、山口から陸路を行って雪に難渋し、どこかの港で船に乗っているが、港の名前は書かれていない。

ヴィレラが乗った船には豊後から堺に帰る女性客が1人いて、輦で大きな船に乗り換えて行動に余裕ができた時、デウスのお話を聞きたいと申し出た。この女性は詩歌に優れ、読み書きもでき、理解力・判断力に優れていたもので、説教を聞いて洗礼を受けた（教名ウルスラ）。堺では誰も宿を提供してくれる者がいなかったが、このウルスラの知人の家に泊めてもらうことができた。堺の町を見物していると、山口出身のキリシタンに出会った。50歳くらいの医師で教名パウロ・イエサンといい、身分ある人で、大内義隆の死に際して山口を放逐されて堺に来たのだという。ヴィレラがこのあと比叡山を訪ねて布教の許可をもらい、五畿内で教えを説くつもりだと話すと、京都の建仁寺の僧永源庵あての紹介状を書いてくれた。

布教の許可を求めて 堺を出てからは大阪で1夜を過ごし、翌日悪天候をつけて出立して山崎に達し、山崎で船に乗って六地蔵まで行き、そこから山科、醍醐、逢坂関を経て大津に出た。ヴィレラは京都の宗教界を支配する比叡山の許可なくして布教は無理と言われていたので、比叡山の高僧宛の大内義隆とトーレス神父の紹介状を持参していた。伴侶の信徒ディオゴの坂本の実家を宿にして比叡山の高僧らと交渉するが、彼らを納得させるどころか、大いに怒らせてしまった。身の危険を感じる状況にいたったので、ロレンソらの忠告に従って京都に逃れ、ディオゴの知人の紹介で家を借りたが、掘立小屋同然で、非常にみじめな日々であった。

比叡山の許可を得ることはできなかったが、公方様（足利義輝）の許可をもらえば布教は可能と考え、堺で紹介状をもらった建仁寺の永源庵を訪ねて仲介を依頼した。永源庵は高僧で、ヴィレラの訪問を喜び、足利義輝に面会できるよう手配してくれた。義輝はもはや政治的実権はもっておらず、逃避していた坂本から京都に復帰してきたばかりで、当時妙覚寺に住んでいた。ヴィレラは、妙覚寺の義輝を訪ねるとき、貧しくて日本の慣習である貴人への進物を何も持っていなかったため、所持していた黙想や痛悔のときに使用する砂時計だけを贈った。義輝はヴィレラ達を歓迎し、パードレらに害をなすこと、彼らの住居に侵入することを禁止し、課税や負担を課してはならないことなどを内容とする3箇条の免許状を与えた。免許状を得たからと言って僧侶や民衆の嘲笑や侮辱、住居の提供拒否などの実態が改善されたわけではなかったが、免許状を門前に掲げると、様々な階層の日本人が司祭館代わりの貧相な陋屋を訪れるようになり、信徒の数は少しずつ増えていった。

公方の免許状には逆らえない僧侶や反対派は、熱心な法華経の信者であった実力者松永久秀と謀り、「公方様が許可を取消し、伴天連たちを追放するよう指令が出された」と偽って触れ伝えたので、ヴィレラ達は身の危険を感じて一時京都を退去して八幡に退避した。ここに滞在している間にロレンソが公方の側近を訪ねて公方の意向を再確認し、公方は伴天連たちを追放する指示をしていないという書状をもって帰り、京都に戻ることができた。

しかし、反対派は万事につけて邪魔をし、伴天連たちに家を貸す者を糾弾したから、京都での布教活動は思うように進まなかった。

ヴィレラ、堺へ：畿内への布教 そこでヴィレラは、キリストの教えを広め、靈魂の救済を広くもたらすにはどうすればよいかを考え、堺を布教の地として選んだ。堺は日本のヴェネチアをもいうべき自由な都市で、全国から人が集まり、豊かで商取引が活発であった。堺にも戦国の争乱が及ばないわけではなかったが、武将たちは、この街に火をかけるより、強い商業力と手を結ぶ方を選んだ。ポルトガル人がもたらした最新鋭の武器「鉄砲」を大量に供給できるのも堺の強みであった。とはいえ、ヴィレラは堺に寄るべき家も知人ももたず、どうすべきか思案していたが、関心をもった堺の名家の一人である日比屋了珪が、人を通じて、堺に来られれば家を提供、支援する用意があると伝えてきた。そこでヴィレラは 1561 年 8 月に堺へ移動した。その直後に京をめぐる戦火が激しくなり、その後 1 年間は京に戻る事が出来なかった。1562 年 9 月に一時京都に戻ったが、戦火のため布教どころではなく、翌 1563 年 4 月には、再び戦火を避けて堺に戻っていった。

ヴィレラは堺について次のように言っている。「われわれがこの堺に居をもつことができるならどんなに喜ばしいであろうか。暴君（松永久秀のこと）が堺からわれわれを追放したいと思っても不可能なのだ。彼は殺したいと思う多くの敵を堺にもっているが、これも出来はしない。トーレス師よ、堺と博多のちがいをご理解ください。堺ははなはだ堅固であり、一つの町が外国人の滞留を許可すれば全町これに同意する習慣になっております。堺に住むのは、われわれにとって、城塞の中にいるようなものなのです。」（高野澄「呂宋助左衛門」p20～22 より）。

堺に戻ると、ディオゴの活動の結果、奈良にいる反対派の有力者である結城山城守から話を聞きたいという招待がきた。比叡山の僧侶たちから提出された伴天連追放の要請を受けた松永久秀が、査問の結果で判定する意向を示し、その吟味役として選ばれた碩学の結城山城守と清原外記にヴィレラが招かれたのであった。その少し前に別件で奈良の結城山城守を訪ねていたディオゴが、たまたま神父の京都追放の話が出た時、キリスト教の教義について語り、山城守の質問に的確に答えて驚嘆させたことがあって、心ひかれた山城守が奈良にヴィレラを招くことになったのであった。ヴィレラはまずロレンソを派遣し、ロレンソは奈良に赴いて結城山城守、清原外記らに教えを説いた。次いでヴィレラ自身が奈良に赴いたときには、結城山城守、清原外記、高山飛驒守ら有力者に洗礼を施し、改宗させることができた。父飛驒守について高山右近も翌 1564 年に洗礼を受けたのであった。

かくして光明が見えてきたヴィレラは布教陣の強化を求め、これに応じて京都に派遣されてきたのがルイス・フロイスであった。同伴のアルメイダは中央での布教の状況を視察して報告することが与えられた任務であり、ルイス・フロイスはこの後京都に駐在して布教の責任者となる。

知識人ルイス・フロイス

ルイス・フロイス (1532～97) はリスボンに生まれた。9歳でポルトガルの宮廷に仕え、1548年に16歳でイエズス会に入会、同年インドに渡り、ゴアで宣教師としての訓練を受けた。ゴアで日本布教に旅立つ直前のザビエルとアンジローに会っているが、このことはフロイスが後年「日本史」と題する大部の日本布教史を執筆することになったことを考えればまことに幸運であり、意義深いことであった(『ルイス・フロイス略伝』「完訳フロイス日本史①」)。

天性の書記官 フロイスは、1554年に日本巡察に赴くヌーネス・バレット師とマラッカまで一緒に行くが、この時彼は日本までは行かず、3年間をマラッカで過ごしてゴアに戻っている。上長らは早くから彼の才能を認め、1559年の総長への書簡の中で「あらゆる文筆の仕事に優秀、判断力優秀、天性語学的才能があり、良き教師たらん」と書いている(『ルイス・フロイス略伝』)。1561年に司祭に叙階され、ゴア管区長の下で東アジア各地から届くヨーロッパへの報告書を扱う係りとして働いたから、日本の事情にもよく通じていた。日本から発信された書類はすべてゴア管区長の手を経ることになっていたからである。

フロイスは日本布教の強化のために、イタリア人ジョアン・バプティスタ・デ・モンテ神父とともに派遣され、1563年7月6日にトーレス師がいる横瀬浦に到着した。フロイス等が着任する前に日本にいたイエズス会会員は、トーレスと京都で活動しているヴィレラの2人の神父と4名の修道士しかおらず、ほかには日本人の修道士が数人いるだけであった。トーレスは多忙で過酷な日々疲れ果てており、病にも侵されていたから、フロイスとデ・モンテの2人を迎えたとき、喜びのあまり次のように語ったと記録されている。「…我らの主なるデウスは、かくもひどく困窮している折に、この大いなる葡萄園における働き手たちを送るといふ深い恩寵を授け給うたのであるから、自分は安んじて死んで行きたい。というのも、私はもう高齢となり、病み、疲れ果てた。数日前からやっといつも歩行に用いていた松葉杖を外すことができた有様で、ミサを聴きたがっているキリシタンたちの心を満たさせるために、患っている片足を小さな台の上に載せてミサを捧げている。このようにしないと自分はまっすぐに立っていることもできない。」

京都へ派遣 フロイス「日本史」の記述によれば、フロイスとアルメイダは、1564年11月、島原から菊池川沿いの高瀬まで船で行き、そこから4日をかけて豊後府内に行った。当時臼杵にいた大友宗麟を訪ねて都への紹介状をもらい、豊後府内から船で都に出発しようとしたが、風向きが悪く1か月も船待ちを余儀なくされた。1564年の暮れか正月によく船出ができ、3日をかけて海峡を横断して伊予の堀江(松山市)に着いた。堀江から6日もかかって塩飽の港(泊浦)に行ったが、そこから堺まで乗せてくれる船がなかった。やむなく小舟に乗って堺行きの船に乗れそうな別の港に行ったのだが、海賊に襲われはしないかとひやひやしなごらだつた。行った先は坂越港(赤穂市)で、そこで便船を待たしたが、到着した船が伴天連やイルマンを乗せることを拒否したので、何日も別の船を待たねばならなかった。そして、豊後を出てから40日もかかって、ようやく1565年2月1日(ま

たは1月31日)、堺にたどりついた。堺では日比谷了珪が出迎えてくれて、同家に丁重に迎え入れられた。アルメイダは旅の途中で病気になり、堺でなすべき用件もあったのでしばらく堺に滞在したが、フロイスは約4年間にわたって聴罪師一人いない京都で頑張っているヴィレラ師に一刻も早く会うべく、翌日には京都に向けて出立して行った。瀬戸内海の船旅については、この時期九州方面から伊勢参宮に出かけた人のリスト（天正十六年参宮帳など）があり、そうした人々が豊後から船に乗っているの、乗り継ぎながらも一般人が堺などへ行く船旅が可能であったことを示している。アルメイダ p57

上京したフロイスは、2月12日にヴィレラとともに足利義輝に面会した。復活祭の4月22日にはキリシタン約250人を招き、ヴィレラ、フロイスのパードレ2人、アルメイダ修道士、日本人イルマンのダミアンが参加して盛大に祝われた。アルメイダは畿内の視察を終え、ロレンソを伴って京都を発ち、5月15日堺を出帆して豊後に帰っていった。そのあと京都では、恒例となっていた幕府の重臣数名を教会に招いてもてなす会を催し、順調に布教が進むかに見えていた矢先の6月17日（永禄8年5月19日）、三好、松永の手によって支援者足利義輝が弑逆され、キリシタン教界と宣教師の立場は暗転した。教会は没収され、聖具など持ち運べるものは堺に運んだが、宣教師たちは都にいられなくなった。いかなる者も彼らの世話をしてはならないというお触れが出され、ヴィレラはフロイスに後事を託して、1566年4月、トーレスに呼び戻されて九州に戻って行った。

信長とフロイス ヴィレラに替わって畿内の布教代表となったフロイスは、戦国争乱の中で孤軍奮闘の状態であった。ところが、1568年に織田信長が台頭して入京すると、状況は一変した。信長側近の武将和田惟政は、配下の高山飛騨守（ダリオ）から伴天連のことを教えられ、早い機会に都に連れ戻してくれるよう頼まれていた。惟政は堺滞在中のフロイスと面談して強い関心を抱き、自分の権限で都に連れ帰って保護することにした。高山ダリオからフロイスにこの知らせが届き、馬と付き人が用意され、フロイスは1569年2月26日京都に向かった。ダリオは京都から3里の山崎で一行を待っていた。都のキリシタンにも司祭帰京の吉報が伝えられ、受け入れの準備を整え、彼らも山崎まで出迎えた。山崎に着くころから天候が悪化し豪雨になってきたので山崎に1泊し、翌日司祭を乗せた立派な駕籠が、250名のキリシタンとダリオの家臣に付き添われて都に戻った。フロイスにとって5年ぶりの京都であった。以来、フロイスは1576年に後任のイタリア人司祭ニエッキ・ソルド・オルガンチーノに後事を託すまで、中日本布教長として活動することになる。

再度京都入りしたフロイスを待っていたのは、南蛮の文物に強い関心を抱く織田信長との運命的な出会いであった。フロイスは、京都到着後3日目に、非常に大きなヨーロッパの鏡、美しい孔雀の尾、黒いビロードの帽子、ベンガル産の籐杖など日本にないものを贈物として携え、信長の館を訪問した。最初の謁見では、信長はフロイスを観察しただけでひと言も言葉をかけず、持参の贈物の内ビロードの帽子のみ受けとっただけだったが、二度目の会見は建設途上の二条城の堀の上で全く違ったやり方で行われた。

川崎桃太「フロイスの見た日本」が描く織田信長は、暴虐な独裁者とはまったく異なる

相貌を見せる。最初の訪問の時に信長が声をかけなかったのは、「…実は、予は、この教えを説くために幾千里もの遠国からはるばる日本に来た異国人をどのように迎えたらいかがわからなかったからである」とのちに語っている。二度目の約束の日、信長は橋の上でフロイスを待っており、二人は腰を下ろして懇談した。フロイス「日本史」によると、信長はただちに質問したという。……年齢はいくつか、ポルトガルとインドから来てどれくらいになるか、どれだけの期間勉強したか、親族はポルトガルで再び汝に会いたく思っているか、ヨーロッパやインドから毎年書簡を受け取るか、どれくらいの道のりがあるか、などなど。そして、日本でデウスの教えが広まらなかった時にはインドに帰るのかどうかを訊ねた。これに対し、フロイスは、たとい一人の信者しかいなくても、終生日本にとどまる決意である、と答えている。会見は2時間余り続き、信長はゆったりした気分で会話を楽しんだ。二度目の会見に先立ち、フロイスは信長から布教の免許状を得たいと思い、貧しい中から銀の延べ棒を3本用意して和田惟政に仲介を依頼した。これだけでは信長に渡すには不十分の額だったので、惟政は自分の世話で7本を加え、信長に貧しい伴天連のために配慮を乞うた。信長は笑いながら、予には金も銀も必要ではない。伴天連は異国人であり、もし予が彼から免許状のために金銭の贈与を受けるならば、予の品位は失墜するであろうと言って、惟政に無償で免許状を与えるように命じた(フロイス日本史第2巻p150)。この時、惟政の勧めで目覚し時計を持参して信長に送ろうとしたとき、信長はこのような機械が正確に時を告げることに驚嘆し、大なる喜びの表情に変わったが、信長はいつくしむようにフロイスに目をやって、「予は非常に喜んで受け取りたいが、受け取っても予の手元で動かし続けるのはむづかしく、駄目になってしまうだろうから頂戴しない」と言ったという(「フロイスの見た戦国日本」 p34~35)。

かくして、1569年4月、信長はフロイスの求めに応じて京都での布教を許す免許状を与え、これ以降信長の天下統一に向けての歩みとともに、フロイスは信長の保護を受けつつ布教に励んだ。

日本布教の第二世代

トーレスの死 1570年、初代日本布教長として奮闘したトーレス師が病に倒れて死去した。トーレスの死で、日本布教に來日した第一陣のザビエル(1552年上川島で死去)、フェルナンドス修道士(1568年に平戸で死去・「日本史」第1部第80章)の3人の西洋人伝道師がすべて亡くなり、布教陣は第二世代に替わった。トーレス師は高齢かつ病気がちであったため、以前から上長としての職責を十分に果たすことができないことを自認し、かねて新しい日本布教長の派遣をインド管区長に申請していた。このため、インド管区長は、1566年4月、ペドロ・ラミレスを送ったのだが、彼はシャム湾で遭難死し、1568年フランシスコ・カブラルが改めて責任者として日本渡航を命じられた。カブラルは、1570年6月、ポルトガル商人のジャンク船で、イタリア人宣教師グネッキ・ソルディ・オルガンティーノとともに天草志岐に來着した。

同船してきたオルガンチーノ（1532～1609）は、1556年フェラーラでイエズス会に入会し、総長に異教地伝道に派遣してほしいと9年間懇願を続け、念願かなってアジアに派遣された人である。1566年10月22日にジェノアを出帆し、バルセロナ、アルカラ、マドリード、トレドを経て、1567年3月にリスボンを出発、1569年にゴアに到着している。実は、オルガンチーノもカブラルと同じ各地の巡視とその後の日本布教長任命という使命を帯びていたのだったが、先に出発したカブラルが風と船便待ちで1年間日本に出帆できずマカオに滞在していたところ、重複して同じ使命を帯びたオルガンチーノとマカオで遭遇したのであった。二人は布教長の地位をめぐる確執のほか、日本布教の方針をめぐる激しく対立した。

トーレスからカブラルへ 結局カブラルがトーレスの後任の布教長となり、およそ10年活動したが、カブラルは非西洋の文化を軽蔑し、宣教師が日本語を学ぶことや日本人信徒を重用することを禁じ、日本人が西洋の言葉や習俗を知ることが許さず、通訳以上の役割を与えなかった。このため、カブラルの10年は、宣教師たちと日本人修道士らとの間に溝をつくり、対立が生じてしまった。こうした布教方針を巡る対立は、イエズス会本部から派遣されてきた巡察使ヴァリニャーノがカブラルを罷免するという結末で終わった。この間の経緯はヴァリニャーノ「日本巡察記」の訳者松田毅一の解題Ⅱ「ヴァリニャーノの第一次日本巡察について」に詳細に説明されている。

フランシスコ・カブラル（1529～1609）はポルトガル旧家の出で、リスボンとコインブラで学んだ後、軍人としてインドに赴き、1554年、ゴアでイエズス会に入会した。ゴアの神学校の教授を務め、インド各地の修道院長を歴任したあと、日本布教長トーレスの後任として派遣されてきた。着任したカブラルは、1か月後に、京都にいたフロイスを除く宣教師会議を開催したが、この会議には同じ年来日した3名を含む10名のパードレと4名のイermanが出席した。カブラルは、各宣教師の担当地域を確認し、新来のオルガンチーノを京都のフロイスのもとに配属した。カブラル着任で日本布教長の任を解かれたトーレスはこの会議に参加したあと、同年10月に死去した。さらにその1か月後、ヴィレラがインド管区長の要請に応じて日本布教の状況を報告するためにインドに派遣され、再び日本に戻ることなく、1572年にゴアで亡くなった。

インドに帰ったヴィレラの報告によると、彼の出発時の日本におけるキリシタンの数は2万人以上であった。1571年10月10日付書簡によると、その内訳は概要以下の通りであった。カッコ内はそれぞれの地の教会の数である。

九州地区は、薩摩 300人（1）、豊後 5000人（5）、五島 2000人（3）、平戸 5000人（14）、島原 800人、ロノ津 3000人（2）、樺島 400人（2）、天草 50人（1）、志岐 2000人（3）、大村 2500人（3）、長崎 500人（1）、福田・ホマチ・手熊 1200人（1）であった。

九州以外では、山口に 1000人（1）、都・堺・他の畿内 1500人（5）であった。（五野井「日本キリスト教会史」P89）

カブラルの時代 (1570～82) カブラルは、1570年9月下旬、アルメイダを伴って九州巡視のために志岐を出発し、樺島、長崎、福田、大村、ロノ津、島原、豊後、秋月、博多、平戸の各地を巡歴した。長崎はすでにキリシタンの町としての様相を呈し、各地で迫害を受けて追放されたキリシタンたちが移住して、新しい都市を形成しつつあった。京都から戻ったヴィレラが派遣されて、1569年にキリシタン領主長崎甚左衛門が寄進した寺院を建て替えて教会を新築し、数回に分けて200人、400人に洗礼を授けて集団改宗させていた。アルメイダらの協力で開港した長崎は賑わいを見せはじめていた。五野井 p 88

1年後の1571年9月、カブラルは日本人イルマン2名を連れて、今度は京都と畿内の視察に出かけて行った。イエズス会は「会憲」で管区長は1年に1度管内の全布教地を視察すると規定しており、日本はインド管区の管轄下にあったので、1556年にヌーネス・バレットが巡察に来たことは既に述べた。日本は遠隔地にあるため、それ以降は日本教区長に委ねられた形であったが、トーレスは打続く戦乱と不安定な政治状況の中で、体力的にも無理であり、教区巡視を実行することができなかった。トーレスが自分の代わりにアルメイダをフロイスに同行させて京都と畿内を視察させたのはそのためであった。

さて、カブラルは京へ向かうのに、ポルトガル船に乗り、瀬戸内海経由ではなく、太平洋を通過して四国南端の土佐清水から紀伊根来を訪問した後、12月15日に堺に入っている。河内の三箇でクリスマスを迎え、翌1572年1月に上京し、日本布教長として將軍義昭に拝謁した。さらにフロイスとロレンソを伴って岐阜に赴き、信長にも面会している。そのあと摂津と河内のキリシタン教界を巡視し、復活祭を三箇で祝い、4月末に堺から出帆して九州に戻っていった。戦国時代たけなわの時期であり、キリスト教の布教はほとんど不可能であったが、カブラルは、九州に帰った次の年1573年9月7日、日本人イルマンのジョアン・デ・トーレス一人だけを連れて、ロノ津から再び上京の旅に出ている。今回はまず豊後府内で大友宗麟に会い、博多、下関を回って山口へ行った。宣教師の山口訪問はトーレス師が1556年に去って以来のことであり、カブラルは3カ月滞在して200人余のキリシタンを新たに得た。山口からさらに石見津和野の領主吉見正頼を訪ねて家臣団に教えを説き、安芸の毛利輝元をも訪ねる予定だったが雪のため果たせず、ジョアン・デ・トーレスを代参させるにとどめた。そのあと岩国に行き、そこから堺に向かおうとしたが、持病のため安芸川尻で長逗留し、塩飽を経由して翌1574年4月1日、出立以来7カ月をかけてようやく堺に入った。河内三箇で復活祭を祝った後上洛し、在京中だった信長に面会している。その後5カ月にわたって五畿内地方を巡歴し、8月24日高山ダリオ・ジュスト父子に面会し、9月6日、フロイスに見送られて堺を出帆した。

カブラルは精力的に各地を回って布教に務めたが、日本布教の方針でオルガンチーノらと対立し、先述のとおり、やがて来日した巡察師ヴァリニャーノによってコエリヨと交代させられて日本を去ることになる。カブラル布教長の時代(1570～82)は、織田信長が姉川の戦いで浅井・朝倉連合軍を破った年(1570)から、信長が足利義昭の挙兵を打ち砕き(室町幕府滅亡)、石山本願寺と戦い、各地に転戦して次第に天下人になっていく途中本能寺で



倒れる 1582 年までの同じ時期、すなわち戦国最盛期と重なっている。カブラルの後任にはコエリヨが任じられた。

都の南蛮寺 この時期、京都は比較的安定していた。都のキリシタンたちは、ヴィレラによって建てられた下京区姥柳町にあった質素で老朽化した教会の代わりに新しい教会堂を建設することを決めた。京都を担当していたフロイスとオルガンチーノの発案で畿内の主だったキリシタンと協議した結果であり、畿内のキリ

シタンから寄進された金銀と米は 2,500 クルザードに達した。上長カブラルに申請して通常経費からもかなりの額を回すことができたから、建設費は 3000 クルザードを超えていたであろう（五野井 p 109）。建設工事には、都のキリシタンだけでなく、摂津の高槻、河内の岡山、若江、三箇のキリシタン領主と武将が、信長の本願寺攻めの合間を縫って駆けつけ、大工や人夫を提供し、建築資材の運搬等にも率先して参加した。京の南蛮寺と呼ばれることになるこの新しい教会堂は、1576 年秋に完成した。敷地が狭く、充分の広さを確保できなかったため建物は 3 階建てとなった。建設の過程で 3 階建てにすることに住民から異議が申し立てられたが、時の京都所司代村井貞勝はパードレらに好意的で、異議を却下している。南蛮寺の様子は狩野元秀筆の扇面洛中洛外図 61 面の 50 番目として描かれている。この美しい教会の出現は仏教寺院に少なからぬ衝撃を与え、またこの南蛮寺が名所として評判になったことは、その後の布教に好結果をもたらしたと言われている。

しかし、こうして評判になった南蛮寺だったが、信長が死に、秀吉の伴天連追放令（1587 年）が出された後、破壊されてしまった。建築の詳細は不明だが、狩野元秀の絵やその他の資料から、日本の大工・職人による和風建築に、イタリア人宣教師オルガンチーノによるイタリア風の加味、そしてキリスト教関連のモチーフなどが盛られたものであったと推定されている。

3. 巡察師ヴァリニャーノ

イタリア人アレッサンドロ・ヴァリニャーノ（1539～1606）は、34 歳の時に第 4 代イエズス会長の名代として東インド管区の巡察師に抜擢され、多数のポルトガル人、イタリア人、スペイン人を含む 41 名を引率し、1574 年 3 月 21 日にリスボンを出帆、同年 9 月ゴアに到着した。インド管区をくまなく視察した後、1577 年 9 月にゴアを発ってマラッカに向かい、マカオを経て、1579 年（天正 7 年）7 月 25 日、ロノ津に到着した。ザビエルの初来

日からちょうど 30 年が経っており、この間日本の初期教会は困難の中で 13 万人を超えるキリシタンを数えるようになっていた。ヴァリニャーノは 3 年間日本に滞在し、初期の日本布教の実績の評価と反省のもとに、新しい基本方針を決定して布教体制を確立した。このことにより、ヴァリニャーノは日本布教の中興の祖と呼ばれている。

布教体制の確立

ヴァリニャーノの功績の第一は、布教体制の確立である。巡察師としてローマを出発するに当たり、日本をインド管区から独立させて準管区に格上げすることを総長から指示されていたが、日本到着後、1580 年 6 月 24 日付けで「日本布教長規則」を定め、日本を①豊後、②豊後以外の九州（下）、③都（畿内諸国）の 3 布教区に分けてそれぞれに教区長を配置し、各教区に修院 Casa を置き、これを中心に司祭館（住院）Residencia を設置することとした。教区長は毎年担当教区内を巡見し、日本布教長（準管区長）が 3 年に一度全国の修院と司祭館とを巡見すること、さらに日本人修道者の霊的・教育的陶冶のための学院、日本人青少年のための神学校、修道者と司祭養成のための修練院、来日するヨーロッパ人宣教師らのための日本語学習のための語学校等の設置を決めた。

彼はこの規則において、ヨーロッパ人宣教師と日本人との文化的落差を克服して融和を図るために、とくにヨーロッパ人説教師が何をなすべきであり、日本の風俗習慣に適應するためにどうあるべきかという見地から、両者が平等の立場にあるべきこと、日本人の礼儀作法を学び、これを習得しなければ日本のキリスト教布教事業に輝かしい未来はないことを強調した。この方針は「適応主義」と呼ばれ、当時の日本布教長カブラルの両者を分け隔てるに行き方を真っ向から否定するものであった。

適応主義の推進 かくしてヴァリニャーノの布教方針が示されたのだが、これを実行に移すためには、在日宣教師全員の支持を得ることが必要であった。その目的のため、彼は協議会を主催して討議にかけることにした。1580 年 7 月末に長崎で予備会議を開いたうえで、在留宣教師全員が一堂に会することは不可能だから、3 つの教区ごとに別々に同一議題を討議に付すことにした。同年 10 月 5 日に豊後教区のイエズス会員が臼杵に参会し、次いで翌 1581 年 3 月にヴァリニャーノが上京して 7 月に安土山で都地区の協議会を開き、さらに長崎に戻った 12 月に、同地で下教区の協議会を開催した。26 人のパードレがどれかの協議会に参加し、ヴァリニャーノが提示した 21 の議題について討議した。

討議事項は広範囲にわたったが、とくに重要であったのはイエズス会宣教師と日本人の修道士・協力者・信徒との関係であり、接し方の問題であった。ヴァリニャーノの方針は両者を隔てなく遇し、ヨーロッパ人は日本語を学んで日本の文化や習俗に適應することを勧め、日本人にはヨーロッパの言語や文化を学ばせて育成していくという方針であった。これに強硬に反対したのが当時の日本布教長カブラルであった。ヴァリニャーノは 1581 年秋にカブラルを辞任に追い込み、後任にガスパール・コエリヨを任命した。1582 年 1 月 6 日付けでこの問題に裁決を下し、決着をつけたのであった。

通信制度の改革 ヴァリニャーノは来日した時、事前に読んだ様々な書簡や報告から日本について抱いていたイメージや知識が、日本の現実とかけ離れていることに愕然とした。従来日本在留のイエズス会員は、パードレもイルマンも上長を経ることなく、個人的書簡を自由に海外に発送したために、不統一の内容が報告され、日本布教の良い所と彼らに好都合なことが多く報告される傾向があったからである。ヴァリニャーノの1579年12月14日付口ノ津発信の書簡は、「日本のキリシタン教界に関しては、良いことだけが書簡に書かれていたので、自分は日本教界を『初代教会』（ローマ帝国の国教となる以前のキリスト教会）のようなものと考え、当地に来れば大聖堂を持つことができるし、多くの現地人（日本人）を司祭叙階し、ほかにもいろいろできるものと考えていたが、実際に来て見て、今後長年にわたってそんなことは不可能であることが分かった」と書いている。ヴァリニャーノは、少なくとも今後は公式の年度報告、すなわち公式の「年報」が日本布教長の責任において作成執筆されるべきことを定め、初年度の「1579年度日本年報」をフロイスに作成させている。

フロイスは1576年にオルガンチーノに中日本布教長の職を譲って九州に戻り、ヴァリニャーノの指名で日本年報を執筆したほか、1580年にヴァリニャーノが五畿内の視察に出た際は通訳として同行し、岐阜から越前方面へも行っている。また、ヴァリニャーノの在日中に、ポルトガル王ドン・エンリケの委嘱で「ポルトガル領東インド史」が編纂されることになった時、編纂責任者（イエズス会員マフェイ師）は、早くからインドおよび日本からの通信者として名高かったフロイスを布教の第一線からはずし、「日本布教史」の著述に専念するようヴァリニャーノを経由して要請してきた。これによりフロイスは、以後毎年の年報をはじめとする多くの著述に専念した。晩年は病が篤くなり、最後となった1596年の「日本年報」を執筆したあと、1597年3月15日付けの「26聖人殉教事件報告」をもって多彩な文筆活動を終え、翌1598年7月8日、長崎で息を引き取った。（「ルイス・フロイス略伝」p324）

長崎の領有 ヴァリニャーノによるもう一つの重要な決断が長崎の寄進の受け入れだった。長崎は1570年に開港して以来、港として優れ、ポルトガルの貿易船が多く出入りして急速な発展を続けていたが、別格のキリシタン都市に成長したのは、大村純忠が長崎の町を周縁の田畑を含め、茂木の領地とともにイエズス会に寄進したことによる。問題は、イエズス会は本来領地を所有することを禁じられていたことで、ヴァリニャーノは寄進を受け入れるかどうかを、宣教師会議の議題の一つとして採り上げたのであった。

事はイエズス会の活動経費に関わる最重要課題であった。イエズス会の布教活動に関わる様々な経費とその負担の仕方については、五野井「日本キリスト教史」が詳しく説明している（p122～128「布教活動費の確保」）。イエズス会本部は、かねて宣教師らが生糸貿易による利益を布教活動に充当することには消極的であり、日本でも他の財源の可能性を検討したが、当時の状況では貿易以外に経費をねん出する可能性はなかった。それゆえや

むなく貿易を合法とする形になってはいるものの、本来貿易は自分たちの仕事にふさわしいことではないとされていた。それに、貿易に依存することは、商船が欠航すれば収益は得られず、万一遭難して船が沈没すれば、資産も得られるべき収益も無に帰し、経常経費を賄うにも事欠くことにもなりかねなかった。

そのような時に、1580年大村純忠が長崎・茂木の寄進を申し出た。ヴァリニャーノは、宣教師会議で慎重に検討した上で、この申し出を受入れることに決したのであった。五野井の解説によると、大村純忠が長崎・茂木の寄進を申し出た理由は、①強大な竜造寺氏が長崎に長崎譲渡を迫り、拒めば武力行使されるかもしれない、そうなればポルトガル船貿易による収益も失われる、②長崎がイエズス会所有地になれば、ポルトガル船は確実に長崎に入り、大村氏は永久に貿易の利を確保できる、③何か事が起こっても長崎に避難ができる、などであった。

他方、イエズス会側が譲渡を受入れた理由は、「協議会議題 14」に述べられているところによれば、①下地方は絶えず戦乱状態にあり、しかも異教徒の領主に取り囲まれているため、安全で堅固な長崎を保有すれば貿易の利益を確保することができる、②長崎は戦争勃発や迫害のために土地を追われた信徒たちの避難場として最適地であり、パードレ達^{パドレ}の生活維持のためにも重要な土地である、③商船の停泊料とともに、長崎と茂木からの定収入を通常経費に充てることができる、④イエズス会の必需品がポルトガル船によって搬入されるゆえに、長崎の所有は好都合である、⑤イエズス会はいつでも土地を手放す自由裁量をもっている、というものであった。

ちなみに、イエズス会の出費は、経常費としての人件費と布教活動費、非キリスト教徒領主に追放されて長崎などに移住してくるキリシタンの救済費、生活困窮キリシタンへの補助、それに信長をはじめとする異教徒の大名や領主への贈物経費などがあり、一年間の通常経費は1万クルザードほど必要であったという。これに加えて、教会・修院・司祭館の新築や増改築費、新規の布教事業費、弱小キリシタン大名に対する軍事援助、巡察師や準管区長の巡察旅費などの出費があった。(五野井 p 125)

信長の厚遇と安土教会 前述の協議会開催のために上京した際、ヴァリニャーノは都^{みやこ}教区を巡視するとともに、滞在中何度も信長に面会している。ヴァリニャーノが上京した1581年3月の中央の政治情勢は、前年に石山本願寺との和議が成立したため、京都の情勢はかなり安定していた。1579年に完成した安土城の城下町が建設途上にあり、家臣団の安土移住が強制され、彼らの屋敷が建設されつつあった。イエズス会の都教区長オルガンチーノは、信長に申請して湖畔の埋め立て地に用地をもらい、突貫工事で修院を完成させていた。京都にセミナリオを建設する用材がすでにあつたため、キリシタン大名高山氏などの協力によって1か月前後の短期間で完成したのであった。1階に茶室と来客用の座敷(応接間)、2階にパードレらの居室(寝室)と貴人用の客室があり、3階がセミナリオとして使用され、神学生たちの居室を兼ねていた。ヴァリニャーノが上京したとき、領主や身分ある人

たちの子弟 25 人がセミナリオに在籍していた。

ヴァリニャーノは3月に本能寺で初めて信長に会い、京都滞在中フロイスを越前に派遣し、日本人イルマンを播磨へ、セスペデス神父を美濃と尾張に派遣するなどして各地のキリシタンを慰問させた。そして、4月に前述の協議会を安土の修院で開催したのであった。この間信長とは何度も面会し、厚遇を受けている。8月に巡察を終えて九州に戻る際には安土城に招かれ、帰任の許可をもらっている。

遣欧少年使節の派遣

ヴァリニャーノが多く仕事を成し遂げて1582年にインドに帰る際、九州の大友、大村、有馬のキリシタン大名の名代として伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルチノの4名の少年をヨーロッパへの派遣使節として伴ったことはよく知られている。派遣の目的は、①ヨーロッパ諸国の偉大さを直接体験させて、その事実を帰国後日本人に知らしめる、②ヨーロッパ世界におけるキリスト教の力と勢いを知らせる、③世界の晴れの舞台に日本人を登場させ、教皇の日本に対する愛情と配慮を梃子にして日本布教を推進する、ということであった。P134

天正遣欧少年使節は1582年2月に出発し、経由地のアジア・アフリカとヨーロッパで多くを学び、8年5か月をかけて1590年7月、溢れるほどの知識と知見を持ち帰った。ヨーロッパでは行く先々の王侯・議会・教会で華々しい歓迎を受け、ローマでの教皇謁見に際しては、各国大使を招いた盛大な迎撃の儀式が行われた。

なお、少年遣欧使節団の旅行については、「旅と観光の世界史」で詳細に紹介しているし、また、アウトバウンドの歴史の一環としても採り上げる予定なので、ここではこれ以上の言及を控えることとする。

4. 伴天連追放令

ヴァリニャーノが離日して4か月後の1582年6月20日（西暦）、パードレ達に好意的であった織田信長が本能寺の変で倒れた。保護者の死を知ったオルガンチーノは、その後の混乱を避けるべく、日本人イルマンのヴィセンテと日本人信徒6、7名を修院に残して安土を離れ、坂本を経由して都の修院へと避難していった。当時畿内にいたイエズス会員は安土山に8名（内パードレ3名）、都に3名（同1名）堺に2名（同1名）の計13名（内日本人イルマンが4名）であった。

ザビエル来日以来、群雄割拠の戦国時代であったから、各地の領主がそれぞれの意向によってポルトガル人と交易し、カトリック教の布教を許可したり拒否したりしつつ30年が過ぎ、キリシタンの数も九州と畿内を中心に増加していた。中央を制して全国制覇に近づきつつあった信長が倒れたあと、信長の全国平定事業を継承した豊臣秀吉は、キリスト教に対して、しばらくは信長の政策を踏襲した。しかし、中央集権国家への体制が固まりはじめ、諸大名を支配して国策を展開しようとする時期になると、生まれたばかりで弱体の

権力を阻害する勢力は、何であれ制圧に向かうのは必然であった。

秀吉とキリシタン

1583年に大阪城の建設を始めた秀吉を都^{みやこ}教区長オルガンチーノが訪ね、秀吉はオルガンチーノの要請に応じて、大阪城下に教会建設のための土地を供与した（1583年9月）。オルガンチーノらは早速新しい教会堂を建設し、この年のクリスマスをここで祝っている。この時期の秀吉はキリシタンに対して好意的であり、1583年の3つの教区で合計8,300人が改宗している。とくに、畿内のキリシタン大名高山右近の尽力によって、領主や武将・知識人たちが続々キリスト教に改宗した。翌1584年には、利休七哲人の一人で、秀吉の馬廻衆であった牧村長左衛門政治、秀吉の祐筆安威領左衛門（シモン）、当代随一と言われた漢方医曲直瀬道三（ベルシオール）らが改宗し、翌年には蒲生氏郷（レオン）、黒田官兵衛（シメオン）らもキリシタンとなった。

一方、日本教区長（準管区長）の座についたばかりのコエリヨは、3年に一度の全国イエズス会の施設巡視の義務を果たそうと、早くから上京を希望していたが、九州地区の戦闘激化のため果たせなかった。ようやく1586年3月6日に長崎を発ち、4月24日に堺に着いた。5月4日にパードレ4人、イルマン4人、同宿15人を含む30余人を伴って大阪城に登城し、秀吉に謁見した。通訳はフロイスが務めた。秀吉はコエリヨを歓待し、謁見にはキリシタンの安威と高山の両人を臨席させ、金銀財宝やポルトガル船がもたらした生糸・緞子等を収納した部屋を見せ、ヨーロッパ製の寝台と黄金造りの組み立て式茶室を見せるなど、最大限のもてなしをしている。この時の謁見で秀吉は、九州征伐によって新しい知行割りを行ない、全国を統一した後朝鮮と中国（明）を征服する意向を表明したという。そのためコエリヨに対し、充分に艤装をしたナウ船2隻と航海士雇用のあっせんを依頼している。公式報告はこの要請に教会側がどのような回答したのか全く触れていないが、この場に同席していたオルガンチーノが、後年総会長あての書簡で、コエリヨは「大いに助力することができ、船が必要なら供給できること、また、ポルトガル人にこのことを指図することも可能である」と答えたと記されている。この時期洋船の黒船（瀝青で塗ってあった）を作る技術が日本にはなく、洋帆船の操船は日本人にはまだ無理だったのである。

コエリヨはキリスト教布教の特許状を求め、秀吉は1586年6月20日に特許状を2通与えている。1通はパードレ達が日本国内を巡回する時に使うためであり、他の1通はインド・ポルトガルへ送付するためであった。特許状の内容は、①伴天連の日本居住を許し、②伴天連の修院（カーザ）に兵士らを宿泊させず、仏教寺院に課せられている義務の一切を免除し、③キリシタンの教えを説く宣教師らへの乱暴狼藉を禁止する、というものであった（フロイス日本史第2部76章←五野井p144）。この特許状の効果はただちに現れ、備前・備後・美作3国の大名宇喜多秀家が布教免許状を発して岡山に教会の建設を許可し、黒田官兵衛（シモン）はコエリヨの依頼を受けて山口での布教復活に尽力し、毛利氏からパードレ入国についての了解をとりつけたりしている。

突然の伴天連追放令 ところが、翌 1587 年、秀吉は島津氏征伐のために九州に出陣し、九州平定が終わって博多滞陣中の 6 月 19 日、突然「伴天連追放令」を発してキリスト教界を驚かせた。五野井「日本キリスト教史」は、秀吉が手のひらを返したように厳しい伴天連追放令を発するまでの経緯を詳細に辿っている。秀吉はポルトガルとの貿易による利益を重視していたし、朝鮮出兵のための軍船や輸送船の購入あっせんをパードレに求めていたくらいだから、キリシタンに不信の念はあっても、商船来訪と布教活動を切り離すだけで足りるとして、それまで厳しい禁教措置を考えていなかった。その間に、コエリヨの積極的な拡大主義によって布教の成果が大きく広がりはじめ、とくに畿内では教区长オルガンチーノの適応主義が功を奏して多くの武将や知識人が改宗し、それによって民衆の改宗にも弾みがついていた。

島津征伐に成功して博多に凱旋してきた秀吉を迎えるために、準管区长コエリヨは大砲を積んだ小型武装帆船（フスタ船）に乗って長崎を出発し、平戸を経由して博多に来ていた。6 月 4 日に秀吉が博多に帰着し、6 月 10 日にはフスタ船上で秀吉とコエリヨが面会し、秀吉は長崎にいるナウ船（スペイン語ではカラック船）を博多に回航して見せてくれるよう依頼している。この日から伴天連追放令が出される 6 月 19 日までの 10 日足らずの間に何があったのか。五野井は、秀吉がコエリヨに出した 4 項目の詰問状とこれに対するコエリヨの回答を解説しているが、秀吉が本気で問題にしているのは、つまるところ、①パードレ達はなぜこんなに熱心に人々に強制してキリシタンにしようとするのか、②なぜ日本の神々や仏たちの神社仏閣を破壊し、僧侶たちを迫害して彼らと融和しないのか、という 2 点であった。仏教のように寺院で説教するだけでなく、地方から地方へ動き回って激しく教えを説き、伝統の神道・仏教を目の敵として圧迫する布教の在り方に不安を覚え、限りなく増えて行きそうなキリシタンの存在が、将来の政治不安のもととなることを秀吉が憂慮していることが明らかであった。そうした懸念があって、側近の高山右近に棄教を命じたところ拒絶され、これが伴天連追放令の引き金になっただけらしい。ちなみに、右近は秀吉の言うことに従わず、信仰を守ることを条件にすべての領地と財産を放棄し、不遇に過ぎつつ信仰のために生きるが、1614 年、家康のキリシタン追放令によってマニラに追われ、数か月して病に倒れてマニラで亡くなっている。

秀吉がキリスト教容認から布教禁止に反転したうえ、ただちに長崎・茂木・浦上のイエズス会の領地を没収し、宣教師全員を追放するという強硬措置をとるにいたったのは、キリシタンとポルトガルの軍事力が結びついていることへの不安、キリシタン大名が増えて秀吉の命令に従わない者が対抗勢力となる懸念を覚えていたところへ、秀吉が再三要請したナウ船の博多回航を船長が拒絶したことが秀吉を怒らせた結果であったとされる。

没収した長崎は直轄地となり、肥前佐賀城主鍋島直茂を代官とし、1592 年からは肥前唐津城主寺沢広高を奉行として管理させた。しかし、秀吉はポルトガル商船の来訪は望んでいたから、伴天連追放令を発してから黙認ないしそれ以上厳しい詮索はしなかった。イエズス会は、あらゆる努力を重ねて布教活動を継続し、むしろ秀吉の時代にキリシタン大

名の改易などによって、武士階級のキリシタン化は次々に地方へ広がっていった。

信長と秀吉のちがい 信長の死後、秀吉も宣教師らと友好関係を維持してきたから、1587年の伴天連追放令の発令は唐突に思われるようだが、秀吉は信長と違い、宣教師によってもたらされたキリスト教に警戒心をもっていた。事実、信長の伴天連に対する信頼振りを見て苦言を呈したこともあった。

信長のキリシタンへの関わりは強い好奇心によるもので、まったく警戒の対象になっていない。それは信長自身の資質にもよるが、信長の時代はまだキリシタンの勢力が弱く、ヴァリニャーノが来日してようやく教会組織が形を成しつつあった時期であり、取るにたりない勢力であった。それに、キリシタンの本拠である九州は信長の勢力圏外のはるか彼方にある大名らの領地であって、全国平定に程遠い状況では問題外であった。しかも、相手はイエズス会だけで、のちにスペインのフランシスコ会やドミニコ会などの托鉢修道会が参入して仲間内で紛糾する以前の状態であったから、信長の当面の相手はキリシタンより一向一揆や石山本願寺だったのである。

これに対し、九州を平定して全国統一を果たした秀吉にとって、キリシタンの存在はまったく異なって見えたに違いない。キリスト教界の方も、信長時代とくらべて目覚ましい進歩を遂げており、そのことは貿易で栄える長崎の現実によく現れていた。それゆえ秀吉は、伴天連追放令でキリシタンのこれ以上の拡大に歯止めをかけはしたが、他方で南蛮貿易の利を求めていたから、それ以上厳格に追放令を適用してキリシタンを迫害するようなことはしなかった。

追放令後のイエズス会の対応 追放令が出た当時、キリシタンの数は20万人ほどと推定されていた。教会は大小合わせて200、イエズス会が所有するカーザとレジデンシア等の施設は22を数え、宣教師は日本人イルマン47名を含めて113名がいた（五野井 p 160）。追放令によって、これらのうち小豆島に潜伏していたオルガンチーノら3名と、豊後地方にいた5名を除く全員が肥前のキリシタン領主のもとに身を潜ませた。とくに有馬領内には約70名のパードレとイルマン、セミナリオの学生73名が移り住んだ。準管区長コエリヨは各地に散在していた宣教師たちを平戸に集めて会議を開き、日本を退去すべきか、それとも殉教覚悟で信徒たちの司牧に当たるべきかを討議した。結果は、死を賭して日本にとどまり、信徒らの霊の救済に務めることに決した。しかしその一方で、コエリヨは強硬手段をも検討していた。かねてから竜造寺氏をはじめ、実力ある反対勢力の領主たちからいつ武力攻撃されるかわからない状況下であり、そうした場合どこにも避難する拠点をもたない不安があったから、長崎と茂木を要塞化し、武力による防衛力を持ってキリシタン界を維持するという強硬策も選択肢としてもっていたのである。

ヴァリニャーノの再訪 他方、巡察師ヴァリニャーノは、1587年5月29日にヨーロッパからゴアに戻った伊東マンショらの少年使節を伴って再度訪日すべく、1588年4月22日にゴアを発って日本に向かっていた。ヴァリニャーノが伴天連追放令を知ったのは、彼ら

がマカオに着いた 1588 年 8 月 11 日のことであった。コエリヨは武力防衛の可否についてヴァリニャーノの指示を仰ぐべく使いを派遣し、マカオでこれを受けたヴァリニャーノは、コエリヨの強硬策を不可能かつ危険であるとして一蹴した。ヴァリニャーノは日本への渡航を急ぎながらも、日本への船便が出たばかりで翌年まで便がなく、また彼自身秀吉の了解のもとに訪日することを選んだため、彼がインド副王使節の資格をもって少年使節らとともに長崎に着いたのは、2 年も遅れて、1590 年 7 月 21 日であった。この時すでにコエリヨは同年 5 月病のため死去していた。ヴァリニャーノは到着後も秀吉の了解のもとに行動し、1590 年 11 月に長崎を発って播磨の室津で待機した。小西行長や黒田孝高らキリシタン大名の助言を容れて秀吉の疑惑を招かぬよう、宣教師の同行者を少なくし、俗人のポルトガル人 11～2 名を含む 22 名を伴っていた。その中にオルガンチーノ、四人の少年使節、少年使節をローマに伴ったディエゴ・デ・メスキータ神父、それにイルマンのジョアン・ロドリゲスが通訳として加わっていた。

室津に 2 カ月ほど滞在して秀吉の指示を待ち、1591 年 2 月 17 日に京都に向かい、3 月 3 日聚楽第で秀吉に面会した。謁見の間には公家衆が列座し、次の間には大名らが列した。ヴァリニャーノはインド副王からの書簡を捧呈した。書簡は、秀吉の全国統一の偉業をたたえ、これまでの宣教師らへの厚遇を感謝し、巡察師とパードレへの庇護を懇請していた。秀吉は引見後の食膳の席で、伊東マンショらに言葉をかけ、自分に隨身するよう勧めたという。彼はマンショらがヨーロッパの楽器を演奏するのを聴いてしばし心を和めた風情であり、ヴァリニャーノに対しては、インド副王との間に厚誼を結ぶ意向であることを表明した。謁見は和やかに行われたが、秀吉はキリスト教への警戒心を解いたわけではなく、伴天連追放令を撤廃することはなかった。秀吉から副王宛ての書簡には、改めてキリスト教の布教が禁じられていることを明記する一方で、ポルトガル人が通商貿易のために自由に来日して取引できることを約束した。宣教師の長崎在住については、日本中に教えを広める活動を行わず、長崎において自重して過ごすことを条件に認めている。かくして、ヴァリニャーノ再訪によって、伴天連追放令以前への復帰はならなかったものの、秀吉がポルトガル貿易継続のために宣教師の長崎居住を許したことで、禁令は次第に骨抜きにされて行き、イエズス会宣教師約 130 名が西南九州に留まって慎重な布教活動を続けることとなった。

ヴァリニャーノは、死去したコエリヨの後任の準管区長に豊後教区の上長であったスペイン人のペドロ・ゴメスを任命し、秀吉によって余儀なくされた日本布教に関わる諸事項の変更と禁令下の対応策を指示して、1592 年 10 月、長崎からマカオに向けて出帆していた。

ちなみに、ヴァリニャーノはこの時、少年使節に同行させてヨーロッパの印刷技術を取得させた同宿のコンスタンティーノ・ドゥラードとともに 1 台の印刷機を残していった。教授に必要な書物を日本で容易に手に入るようにするには印刷機が必要と考えたからであった。ヴァリニャーノに代わって引率役を務めたメスキータ神父は、リスボンで印刷機を

購入し、コンスタンチーノに印刷術と金属活字の原型造りを習得させたのであった。これにより、以後日本でポルトガル語はもちろん、ローマ字日本文や仮名と漢字交じりの日本語文を印刷して使用するようになり、そうした出版物の現物が今に伝えられている。

スペイン系修道会の登場

トルデシリアス条約でポルトガルと地球を東西二分して管理権を設定したスペインは、西廻りでアメリカ大陸経由太平洋を渡ってアジアに登場した。1520年、マゼランが南米大陸南端の海峡を発見して太平洋に出て、1521年3月6日グアム島、4月7日にフィリピンのセブ島に到着した。これがスペイン国のアジア初登場であった。マゼランはセブで現地人との紛争で命を落としたが、セバスティアン・デルカノが引き継いで乗船ヴィクトリア号によって世界一周を果たしたことはよく知られている。その後何度かヌエヴァ・エスパーニャ（メキシコ）から太平洋を渡ってフィリピンや香料諸島に達してはいるが、風向きや技術的な問題で、アメリカ大陸に戻る航路を発見できなかった。この問題が解決されたのは1565年で、この年ロペス・デ・レガスピとアンドレス・デ・ウルネーダがメキシコからフィリピン諸島までやってきて、セブ島に東洋初のスペイン人の町を建設した。ウルネーダは同年6月9日にセブを出発して帰途につき、北東貿易風を避けながら北緯42度くらいまで北上し、いわゆる大気圏航路をとって無事メキシコのアカプルコ港に帰着することができた。この航路発見によって太平洋の往復が可能になり、1571年6月にレガスピがルソン島のマニラ市をフィリピン首都として建設し、まもなくマニラ～アカプルコ間に定期的航路が開かれたのであった。

東廻りで半世紀以上前にアジアに来て、すでにゴア、マラッカ、香料諸島、マカオ等に拠点を持っていたポルトガルに比べ、太平洋廻りでアジアに来たばかりのスペインはポルトガルとの競争では圧倒的に不利であった。しかし、1580年にポルトガル王エンリケ1世が後継者を残さずに没し、1581年にスペイン王フェリペ2世がポルトガル王位を継承して、両国は同君連合となって争いはなくなった。ちなみに、1640年にポルトガルが再独立したとき、すでに日本は鎖国時代に入っていた。

日本との接触の始まり 日本とスペインの接触が始まるのは、1584年の夏、マニラからマカオに向かったポルトガル船が途中で針路を誤って北上し、平戸港に入港したのがきっかけであった。この船にアウグスチノ修道会の宣教師が二人、フランシスコ修道会の宣教師二人が乗っていた。かねて、イエズス会に敬遠されて長崎に貿易の利権を奪われていた松浦鎮信はこの船の入港を歓迎した。フィリピンと貿易関係を開きたいとの要請をマニラに伝え、併せてアウグスチノ会宣教師の派遣を求め、1587年（天正15年）、乗員40名の船に商品や武器を積んでマニラに派遣したのであった。こうして平戸を起点にスペイン（フィリピン）との友好的な貿易関係が開かれたのだが、この関係はまもなく天下統一を成し遂げた秀吉の対外政策によって乱されることになる。

秀吉の対外強硬策 秀吉は1591年11月1日、マニラのフィリピン総督に対し、日本に入貢して服属するよう使者を送って威嚇した。要求に応じなければ武力遠征も辞さないと言明であった。秀吉はこの年、朝鮮出兵のための陣地として名護屋城の築城を命じており、本気で明国をも支配下に治める考えを持っていた。その背景には、戦国期世界最大の50万丁の銃を保有する軍事大国となっていたことがある。怖いもの知らずになっていたうえに、マニラとの貿易に従事していた原田喜衛門が、秀吉の側近長谷川法眼を通じて兵站が遠いフィリピンの防衛は手薄で、容易に攻略できると吹き込んだ結果だとされている。交渉の過程でフィリピン総督の使節として、フランシスコ会士ペドロ・バプティスタが1593年5月末にマニラを出発し、平戸を経由して名護屋に赴き、秀吉に面会して総督の書状を奉呈した。バプティスタら3人の宣教師は、布教活動を行わないことを条件に日本滞在を許されたのだが、イエズス会の活動が伴天連追放令で沈滞しているのに乗じ、秀吉の許可を得て、京都・大阪地方を中心に積極的な布教を開始した。

1594年にフランシスコ会士3名が来日し、さらに1596年に2名が加わって8人になった。スペイン宣教師の日本登場は、イエズス会のザビエルが日本布教を始めてから40余年後のことである。元来日本布教はローマ教皇によってイエズス会だけに認められ、教皇の許可なく布教を始めることはできないはずであった。当然ながらイエズス会は反発し、両者の間に生じた激しい対立が、やがて26聖人殉教の悲劇をもたらし、ひいては日本の鎖国にまでつながっていくのである。

サンフェリペ号事件と26聖人の殉教 1596年の夏、フィリピンからアカプルコへ向けてスペイン船サンフェリペ号が出帆したが、暴風雨に遭って船体が破損し、長宗我部元親の領地である土佐の浦戸湾に曳航され、修理が行われることになった。長宗我部元親は日本の慣習法に従って漂着船の積荷を没収し、事の次第を秀吉に報告した。一方、船長も使者を在京中のフランシスコ会のバプティスタ神父に送り、秀吉に善処を嘆願したが、すでに五奉行の一人増田長盛が積荷引き取りの任をおびて浦戸に向かっていた。イエズス会の報告書によれば、この時サンフェリペ号の一等航海士オランダ人が、スペイン王の威力を誇示するために、世界地図を広げて広大な植民地を示し、どのようにしてこれが可能であったのかという長盛の質問に答えて、「まず宣教師を送ってそれらの地方を教化し、次に軍隊を送り、信徒の内応を得て征服した」と答えた、と記されている。これを聞いて怒った秀吉が、フィリピン総督使節として来ているが、公然と布教活動を行っていたフランシスコ会宣教師5名の逮捕を命じたほか、日本人信徒ら18名が次々に捕えられた。長崎に護送される途中さらに2人が加わり、1597年2月5日（慶長元年12月19日）26人が磔刑に処せられて、日本における初の殉教者となった。26人は1860年代初めに、教皇ピオ9世によって聖人と認定され、歴史に残ることとなる。イエズス会宣教師たちがこの時拘束を免れたのは、石田三成ら奉行たちの配慮があったためとされている。

リーフデ号の漂着とオランダの登場

翌 1598 年 9 月 18 日に秀吉が死去して政治の実権は徳川家康に移ったが、その後もポルトガルのイエズス会、スペインのフランシスコ会などのカトリック勢力が日本の権力者との関係を修復することはなかった。その将来を暗示するかのよう、新興プロテスタント国オランダがアジアに派遣した西廻りの船団 5 隻のうちの 1 隻リーフデ号が、1600 年 4 月、豊後臼杵の海岸に漂着したのであった。

オランダの台頭 スペイン王カルロス一世（在位 1516～56）は、1519 年から神聖ローマ帝国のカルル 5 世皇帝を兼任していた。カルロスは 1556 年に引退する際、息子フェリペ 2 世にスペインとネーデルラント地方を、弟フェルディナンドにオーストリア・神聖ローマ帝国を譲ってハプスブルク家が東西に分れたのだが、プロテスタントが多かったネーデルラントの北部 7 州は、1581 年に独立を宣言して支配国カトリック・スペインと戦い、1588 年にスペイン無敵艦隊がイギリスに敗れて以来、独自の道を歩んでいた。1595 年、オランダ初のアジア向け船団が派遣されたが、この艦隊はポルトガルが独占するインド航路を避けて喜望峰を回ったあと北上せず、西に強く吹く季節風に乗っていきなりインド洋南部を突っ切って、ポルトガルの影響の及んでいないジャワのバンタムに到達した。現地の首長と通商関係を結び、本国出帆から 2 年 4 か月後の 1597 年 8 月、自力で大航海を成し遂げて無事オランダに帰着した。これがオランダのアジアへの初来訪であった。

次いで 1598 年、喜望峰を回る東廻りの 2 船団、マゼラン海峡を通る西廻りの 2 船団がアジアに向けて派遣された。これらのうち最も成功したのが喜望峰経由バンタムに向かったヤコブ・ファン・ネック指揮下の 8 隻からなる船団で、ファン・ネックはバンタムに交易所を開設し、さらに 4 隻を率いてセレベス、アンボイナ、バンダ諸島などをめぐって香料を仕入れ、帰途もインド洋を経由して 1600 年に帰国した。他方、マゼラン海峡経由でアジアに向かった 2 船団のうち、オリヴィエ・ヴァン・ノールト指揮下の 4 隻の船団はマゼラン海峡を通過したあと、太平洋を横断中に嵐で 2 隻を失い、フィリピンに到着してマニラ湾でスペイン船と交戦して 1 隻を失ったが、残る 1 隻が喜望峰を回って帰国した。この航海により、ヴァン・ノールトはマゼラン（セブ島からデルカノが引き継いで 1520 年帰着）、英人フランシス・ドレーク（1580 年）に次ぐ、第 3 番目の世界一周航海の成功者となった。

リーフデ号の航海 マゼラン海峡経由の 5 隻からなるもう一つの船団は、嵐でマゼラン海峡を抜けるまでに散り散りになり、悲惨な運命を辿った。リーフデ号は僚船ホープ号とともに敢えて日本に針路をとって太平洋をさまよい、僚船ホープ号はリーフデ号乗組員の眼前で沈没してしまった。残されたリーフデ号は、出帆時 110 人いた乗組員の多くが飢えや病気で倒れたが、頑健で沈着なイギリス人航海長ウィリアム・アダムズの指揮下に、1600 年 4 月 12 日、瀕死状態の 24 名を乗せて豊後の臼杵湾に漂着した。自分で歩けるものは 6 人だけだったという（「旅と観光の世界史」を参照）。これが日本とオランダ、そしてイギリスとの最初の出会であり、時は関ヶ原の戦（1600 年 10 月 21 日）のおよそ半年前であ

った。

臼杵城主太田一吉は小舟を出して弱っている乗員たちを上陸させ、長崎奉行寺沢広高に通報した。寺沢は船に積んであった大砲や銃・弾薬を没収し、大阪城の豊臣秀頼に指示を仰いだ。実権者だった五大老首座の徳川家康が指揮をとり、重体で動けなかった船長の代わりに航海長ウィリアム・アダムズ、高級船員ヤン＝ヨーステン・ファン・ローデスタイン、メルキオール・ファン・サントフォールトラを大阪に護送させ、リーフデ号は別に回航させた（のち沈没）。イエズス会の宣教師たちは、オランダ船の来訪に驚き、彼らは海賊であるから即刻乗員のオランダ人やイギリス人を処刑するよう繰り返し要求した。しかし、家康は引見したアダムズやヤン＝ヨーステンらに航海の目的や航路について問いただし、ポルトガル・スペインの両カトリック国と、オランダ・イギリスのプロテスタント国との対立の事情などを聞き取り、イエズス会の進言を容れず、彼らを活用することにした。事実、家康はアダムズとヤン＝ヨーステンを引止めて朱印船貿易に従事させ、両者を通じてオランダとイギリスにも貿易船の来訪を促した。他のリーフデ号の乗組員には朱印状を与えて帰国させている。

後発の非カトリック国オランダとイギリスは、ヨーロッパにおける政治対立、新旧宗教対立をアジアにも持ち込んでいた。トルデシリアス条約など彼らにとって無視すべきものであったし、ポルトガル、スペインの貿易船を発見すれば相手を拿捕して積荷を奪うことは当然という《国家による海賊》の時代というに等しかった。

日本貿易についても、両勢力の対立が陰に陽に幕府の政策に影響を与えることは避けられなかった。ポルトガルの商人・宣教師はオランダ人を海賊であるとそしり、彼らの来航や居住を許せば他国は寄り付かず、日本への来航はなくなると当局に進言して新勢力の登場を妨げようとしたし、対するオランダとイギリスは、自分たちの関心事は貿易のみであって布教に関心はないのに対し、カトリック両国は布教と侵略的植民地政策が不可分であり、日本の内乱を誘発するものであると告発して、当局の反感を醸成しようという具合であった。

5. 家康の対外政策

秀吉の死後、五大老政治で主導権を握った徳川家康は、関ヶ原の戦（1600年）で勝利して名実ともに権力者の地位に着いた。1603年（慶長8年）には江戸に幕府を開き、強力な中央集権体制の構築にかかった。家康は秀吉の対外強圧政策によって攪乱された諸外国との国際関係を好転させるべく親善外交を進め、外国人による来航通商と日本人による海外貿易の両方を奨励して国力を增強し、幕府政治を安定させる政策を進めていく。

朱印船貿易の始まり

1601年には早くもフィリピン政庁との間に平和を回復して貿易の発展を期し、次いで、アンナン、シャム、カンボジャ、パタニなどの東南アジア諸国にも次々に国書を送って親

善関係を樹立した。家康はこれらの書簡によって朱印船制度を創設したことを告げ、その諒解を求めている。こうした外交努力の上に立って、1604年から徳川幕府の南国渡航朱印状の発行が開始された。日本と明国との間の勘合貿易が大内義隆の死によって名実ともに途絶えたあと、形を変えた公的関係の樹立による朱印船貿易の制度が始まった。

秀吉時代にも渡航朱印状が出され、秀吉の朱印状を携えた日本船が南洋に渡航していたことは確かだが、これは海賊など怪しい船でないことの証明にはなっても、秀吉の場合諸外国との親善関係が前提になっておらず、相手国の官憲がこれを受け入れるか否かは自由であった。それゆえその効果は不明であり、記録もなく、現存する朱印状もないため実態はわかっていない。

渡航朱印状 家康の渡航朱印状は親善外交を背景として、発行者家康が公認する貿易船であることを明確にして海賊船と区別し、海上の安全と取引の保証をするためのものであった。朱印船の派遣には、遠洋航海可能な大船を建造し、艀装し、外航の知識ある船員を雇うに足る資金を有する船主が必要であった。それだけの資金を有し、ひと儲けをねらう者は、幕府の重臣や近臣への縁故を辿り、紹介・あっせんを得て朱印状の下付を受けて商船を海外に派遣するようになった。朱印船制度は幕府の意図をはるかに超える効果を発揮した。慶長4年(1604年)から慶長14年(1614)の10年間に朱印状を受けて商船を派遣した者は75名に上り、派遣船の延べ数は169隻を数えたという(「鎖国」p326)。これらの内、大名は島津、松浦、加藤、細川、有馬、亀井など十氏で、中国筋の亀井を除けばすべて西国大名であった。これに伴って多数の日本人が海外に出て行って日本町をつくり、各地で活躍した。

大名による大船所有の禁止 1609年、中央集権体制を強化するために、家康は西国大名の500石積以上の大船を淡路島由良港に回航させ、2～3の例外を除いてはほぼすべてを召し上げてしまった。万一の場合、大軍輸送が可能な水軍を抑制するためであって、500石以上でも朱印船貿易に使われる航洋船は除外されていたのだったが、西国大名側は遠洋航海に耐えうる大船の建造には気を遣わざる得なくなり、まもなく大名たちは朱印船貿易から手を引くことになる。1612年(慶長17年)に幕府がキリシタン禁教令を発令すると、家康への気兼ねと保身から、この年以降大名の朱印船派遣は途絶えている。徳川幕府は、成立以来大名の軍事力や経済力の弱体化をはかる方策を打ち出してきたが、名目はともあれ、大船の所有禁止は大名の対外貿易による経済成長を封じる結果となったのであった。

大名が手を引いた後は、角倉了以父子、末吉孫左衛門、茶屋四郎次郎、荒木宗太郎など京・大坂・堺・長崎の大商人40～50人が朱印船貿易の主体となり、ほかに三浦按針やヤン・ヨーステンら在留の大物外国人10人程度、琉球やシャムなどに住む若干の在外邦人、中には女性も2～3人いて、活発に貿易に従事していた。朱印船貿易は年を追って発展し、岩生成一の研究によれば、のちに幕府が鎖国政策を断行するまでの30余年間に、幕府の朱印状によって南洋各地に渡航したわが国の商船は355隻以上であったと推計されている

(「鎖国」 p215)。

なお、朱印船時代はとくに日本人の海外展開が活発に行われた時代であって、本書ではアウトバウンドの章で詳細を扱うこととする。

外国船貿易の統制

すでに見てきたように、戦国期には細川・大内氏らによる勘合貿易や後期倭寇による密貿易に加えて、西国の戦国大名が貿易の利を求めて来航するポルトガル船やスペイン船と直接の交易を始めていた。家康は統一国家として朱印船制度を開始するとともに、外国船による貿易を推進しつつ幕府の管理下におく施策をとり始める。

家康は、貿易と宗教を両輪のごとく展開するポルトガルとスペインより、キリスト教の布教に関心がなく、純然たる貿易に従事する新教国オランダとイギリスのほうを好ましく思っていた。ウィリアム・アダムズ、ヤン＝ヨーステンを朱印船貿易に従事させただけでなく、両者を通じてオランダとイギリスにも商船の来訪を促した。それまで日本貿易を独占してきたポルトガルにとって、このことは衝撃であり、やがてポルトガル本国の力の減退とともに、オランダにアジアでの支配権を奪われ、日本貿易でも力を失っていく。

糸割符制度 当時の最も重要な輸入品は中国産の生糸であり、ポルトガル船は生糸を大量に積載してきて大儲けをしていた。しかし、1604年以降、生糸の輸入販売に関して糸割符制度（特許を得た商人グループによる一括輸入の制度）が導入され、ポルトガル船にとってこれが足かせになっていた。導入のきっかけは関ヶ原の戦い以後の情勢不安であった。大名の領地の没収や転封が多く、中央・地方で築城がつづき、全体として経済に余裕がないうえ、貿易の仕方もまだ整っておらず、生糸の取引が円滑に進まないことも多かった。そういう情勢の上に、慶長6年（1601年）以来毎年のように各地で旱魃・飢饉が続いたためか、輸入生糸が2年間にわたってなかなか買い手がつかず、困ったポルトガル船の船長が長崎奉行を通じて家康に善処を求めてきた。家康はせっかく船載してきた生糸を持ち帰らせるのでは、その後の貿易に支障が出ると判断し、1603年分の生糸について、京都・堺・長崎などの大手商人に分担して全量を買収させた。

ところが、翌慶長9年にもポルトガル船が大量に生糸を積んできて廉価に売り出したため、前年上意によって買い取った長老たちが損する羽目に陥った。そこで幕府は、生糸取引の安定のために、まず幕府が必要分を買い上げたあと、長老たち（糸割符仲間といった）に優先買取りの権限を与え、その上で生糸以外の商品の取引をさせることにした。この年以降これが制度化され、黒船が船載してくる生糸は、あらかじめ適正な値をつけて全部を糸割符商人が買い取り、前記3都市のほかに、大阪、江戸の商人も参加して5カ所商人と呼ばれるグループに輸入生糸買取りの特権が公認された。世にいう糸割符法の成立であった。

ポルトガルからオランダへ この時点でオランダはまだ登場しておらず、対象はポルトガ

ル船だけであった。オランダ貿易船の初来訪は 1612 年である。

世界的に見て、この時期はイベリア勢力の後退と新興のオランダ、イギリス両国の拡大期に当たっていた。北アメリカではフランスとイギリスが勢力を伸ばし、アジアではジャワ島に拠点を置いたオランダがポルトガル勢力を駆逐しつつあった。オランダは 1602 年に東インド会社を設立して本格的に東アジア貿易に乗り出し、1603 年にはマレー半島東岸のパタニにオランダ商館が開かれた。この知らせが江戸にいるウィリアム・アダムズのもとに届くと、アダムズは家康の許可を得て、リーフデ号の船長だったヤコブ・クアルナッケルと船員のメルヒオール・ファン・サントフォールトを九州平戸藩の松浦侯の船に託してパタニに派遣した。彼らは 1605 年にパタニに到着し、本国から派遣されてきていたオランダ艦隊に、家康が日本での貿易開設を許可したいと言っている旨通報した。

これに応じて、1609 年 7 月、ピーテル・ウィルレムスゾーン・フェルブーフエンの艦隊の 2 隻が、オラニエ公マウリッツの手紙等を携えて平戸に入港してきた。使節は 8 月下旬に駿府で家康に会い、「日本中どこの湾に着岸しても構わない」という内容の朱印状を得て、ここに日本とオランダとの正式の国交が始まった。使節は許可証を持って平戸に戻り、平戸にオランダ商館を開くことを決め、初代館長としてジャック・スペックが 4 人のオランダ人とともに日本に留まることとなった。

かくして 1609 年に平戸に商館を開設したものの、その年も翌年もオランダ船の入港がなく、スペック館長はみずからパタニに出向いたり、館員をタイに派遣したりしてオランダ船の誘致に奔走した。幸いアダムズのとりなしなどが功を奏して、駿府にいる家康はオランダに好意を示したが、同じ頃家康を訪問したメキシコやポルトガルの使節には冷淡であり、扱いは対照的であった。オランダ東インド会社の本社は、日本との貿易に強い関心を示し、日本向け商品を定期的にするとし、第一便が 1612 年 8 月に平戸に到着した。これ以後日蘭の貿易は順調に拡大していく。

新たに参加したオランダがいかにかポルトガル船より有利であったか、1613 年 2 月 13 日付けの商館長ヘンドリック・ブラウエルがバタビアの総督に宛てた次のような手紙からも窺える。もっとも、幕府の方針が変わって長続きはしなかったわけだが…。

われわれは日本で非常に大きな自由を享受している。われわれの船は、誰の監督もなしに荷物の積み降ろしができる。…ポルトガル人は非常な干渉をうけており、われわれは彼らよりはるかに高い利益を上げられる。ポルトガル人の船が到着するや否や、将軍の買物掛により嚴重に封印され、この買物掛が参府し、彼らの生糸が日本全国の都市に配分されるまで、2～3 か月にかかる。この間彼らは少しでも商品を売ることを厳禁されている。そして将軍の思うままに価格を決められ、彼らが生糸を持ち帰らない限り、この値段で渡さねばならない。

(永積洋子「平戸オランダ商館日記」より)

イギリスの登場と撤退 イギリスもオランダに次いでアジアへの進出を目指し、東南アジアでのライバルとなりつつあった。1610 年頃から日本への渡航計画を進め、オランダ貿易

の便宜を図ってきた英人アダムズも、母国人の日本来航を期待した。アダムズは、平戸は日本の西端にあって連絡不便な地であること、家康が英船の浦賀入港を望んでいることをイギリス東インド会社へ書き送っていた。日本に派遣されてきた英船グローヴ号のジョン・セーリス船長は、アダムズの手紙を読んでいながら気に留めず、1613年6月に平戸に入港してしまった。松浦藩はもちろんこれを歓迎し、アダムズが平戸に急行したときには、すでに商館の建物も決まっており、浦賀への移転はもはや不可能であった。イギリスの平戸館長にはリチャード・コックスが就任し、他にイギリス人7名が館員としてとどまった。しかし、日本との接触において一歩先んじていたオランダに比べてイギリスは立ち遅れており、コックス館長の方針も見通しを欠いて、あまり利益が上がりなかった。コックスは江戸と大坂に分館を置いて取引に当たさせたが、1616年に家康が亡くなったあと、幕府による貿易制限が強化され（元和の制限令）、英蘭両国とも平戸と長崎の2港以外で貿易を行なうことを禁じられてしまった。この措置は禁令を繰り返して出しても宣教師を送り込んでくるポルトガル・スペインの活動に対する将軍秀忠の憂慮から来たものであるが、従来の糸割符制度を英蘭両国にも適用させようという日本商人の策謀があったと推測されている。

そうした日本側の事情のほかに、東南アジアにおけるオランダとイギリスの争いが激しくなり、1623年、香料諸島のアンボynaでオランダがイギリスの商館を襲撃して皆殺しにする事件が起こった。その3年前の1620年には、日英貿易の展望が開けないまま頼りにしていたウィリアム・アダムズ（三浦按針）が病で亡くなっていたこともあって、この事件をきっかけにイギリスは同年東南アジア貿易から手を引き、インドに専念することを決めてしまった。日本の商館も閉鎖し、英国はわずか10年ほどで日本から撤退していった。

キリシタンの絡んだ事件

他方、キリスト教に対する家康の方針ははっきりしていた。家康の国書に対するフィリピン総督の1602年6月1日付けの返書は、メキシコと日本の貿易実現に協力することを伝える一方で、宣教師に対する援助をも要請してきた。これに対する家康の回答は、①外国船が暴風のために寄港する場合には船荷を没収しない、②積荷の売買は取引する場所を含めて自由、③外国人の日本居住を是認するが、キリスト教を持ち込むことは禁止する、というものであった。

しかし、現実の問題としては、フィリピンとの親善関係の構築と貿易促進のためならスペイン系のフランシスコ会士を利用したし、ポルトガルとの貿易がイエズス会の仲介なしにはうまく動かないとみれば、イエズス会士をも利用した。1605年（慶長10年秋）、幕府はおひぎも元の江戸ではフランシスコ会士が日本人を相手に布教することを禁じ、パードレとキリシタンに家を貸すことを禁じたことがあった。この時はそれ以上には踏み込まなかったが、この江戸禁教はフランシスコ会士が約束したスペイン船の関東入港を実現できなかったことへの家康の不信感から来ていたから、従来のポルトガル貿易に対する幕府の必要度が低下するか、幕政に何か重大な変更が起れば、ただちに本格的なカトリックの禁

教が実行される可能性を示したものであった。

その上で、翌1606年から家康は新着したカトリック司教やイエズス会、フランシスコ会、ドミニコ会の各上長らを引見して幕府の権威と権限を彼らに強く印象づけ、キリスト教をコントロールする力を誇示し、これら体制外勢力をも自らの支配体制に組み入れることに成功したようにみえた。家康の一目キリシタンに寛大に見えるこうした姿勢を反映して、この時期、地方の諸大名もおおむねキリシタン教界に対して好意的であったが、それは、彼らの多くがイエズス会を介して貿易の利をあげていたからであった。

マードレ・デ・デウス号事件 家康が全面的なキリスト教禁止に踏み切ったのは1613年であるが、そこに至るまでには曲折があった。きっかけとなったのは、本多正純の祐筆でキリシタンでもあった岡本大八が、有馬晴信との間に起こした詐欺事件である。事件は2年前のポルトガルの貿易船マードレ・デ・デウス号事件に関連している。マードレ・デ・デウス号事件というのは、1608年に有馬氏がチャンパ（ヴェトナム南部）に派遣した朱印船が帰途季節風の時期が過ぎたためマカオで越年することになったとき、日本人乗組員の武士らが上陸して暴れ、殺傷事件を起こした。これを鎮圧したのが当時マードレ・デ・デウス号の航海司令官としてマカオに滞在していたアンドレ・ベッソア（マカオの秩序維持の責任者）であった。ベッソアは首謀者を牢獄に監禁し、50余名の日本人を帰国させる際、この事件が日本人側の落ち度による旨の文書に署名させた。そのベッソアが、1610年、貿易品を積んだマードレ・デ・デウス号で長崎に入港して歓迎を受けたのだが、ベッソアは家康に使節を送って事件の顛末を報告し、日本人のマカオ渡航を禁止する旨の朱印状を受けることができた。他方、帰国した有馬氏の朱印船のほうは、供述書は強制的に書かされたものだと訴え、もめごとの末、有馬氏と長崎奉行長谷川左兵衛が結託してベッソアを襲撃し、マードレ・デ・デウス号を焼沈させてしまった。この問題の結着は、マカオ側も使節を派遣して家康とやり取りした結果、双方貿易の継続が大切であるとして従来通りの関係を維持することとなった。ただし、この事件のために家康が信頼していた通訳のイエズス会士ジュアン・ロドリゲスが讒言によってマカオに追放されてしまったことが、ポルトガルにとって大きな痛手となった。

ジュアン・ロドリゲス ジュアン・ロドリゲス（1561/2～1633）は、1577年に若くして来日し、日本で多くを学んだ人である。ヴァリニャーノがインド副王使節の名目で少年使節を伴って再訪日し、伴天連追放令をめぐって伏見で秀吉と面会した際、高齢で病を得ていたルイス・フロイスに代わって秀吉との面会の通訳を務めている。この時以来秀吉の厚い信頼を得て、事あるごとに秀吉がポルトガル貿易の相談役として頼りにしていた人物であった。秀吉の死後、ロドリゲスは家康にも信頼され、イエズス会を代表して家康との交渉役を務め、家康も自身のポルトガル貿易の代理人として重用していた。

ロドリゲスは、1601年にイエズス会の会計担当に任命され、増大する会の経費をまかなう必要もあって、家康の貿易代理人として貿易事務にも携わり、生糸の価格決定にも積極

的に係わるようになっていた。このことは家康とポルトガルとの信頼関係維持のために重要であった。他方、イエズス会は本来宣教師が直接貿易に関わることには反対であって、本部やゴア管区長から日本管区に圧力がかかるようになっており、対立するスペイン系の托鉢修道会は当然ロドリゲスに反発していた。さらに、生糸の価格問題でロドリゲスは関係大名たちの反感も買っており、マードレ・デ・デウス事件をきっかけにロドリゲス追放が画策され、ついに家康によってマカオに追放されたのであった。さまざまな機会に家康にとりなしてきたロドリゲスという幕府中枢への窓口を失ったことは、イエズス会にとって大なる損失であったし、その後をウィリアム・アダムズが引き継いだことは、とくにカトリック系両国にとって痛手となった。

ちなみに、大航海時代の宣教会は現地住民の教化を目的に各地で文法書を編纂刊行しているが、ジョアン・ロドリゲスは在任中の1608年に「日本語文典」を印刷刊行したほか、1620年には初心者向けの「日本小文典」も刊行している。ほかに、イエズス会本部の要請によって長大で包括的な「日本教会史」も執筆したが、同書は印刷されず、写本だけが残された。これがのちに世に出て、当時の日本の紹介として賞賛されることになるロドリゲスの「日本教会史」である。

岡本大八事件 マードレ・デ・デウス号焼沈事件は後を引いた。本多忠純の祐筆岡本大八は、デウス号事件の主役であった有馬晴信とキリシタン同士として誼があった。この岡本大八が有馬晴信に、家康はデウス号事件に功績あった晴信に恩賞として竜造寺氏に奪われた有馬氏の旧領地を回復することを決めたと嘘をつき、運動費数千クルザードをだまし取った。晴信が本多忠純に沙汰の遅延理由を正したことから詐欺事件が発覚し、1612年3月大八は捕えられた。大八は獄中から、有馬晴信がデウス号事件の際同船攻撃に失敗したら長崎奉行長谷川佐兵衛を殺し、町に火を放って自殺する計画だったと訴え、申し開きできなかった晴信は、甲斐に流刑されたのち切腹させられた。異説では、晴信は最期に当たり、キリシタンとして自殺は禁じられているという理由で、進んで首を討たれたとも伝えられる。有馬晴信の死は、最後のキリシタン大名の死でもあった。

禁教令の発布とキリシタン迫害の始まり

岡本大八事件は幕府を震撼させ、詮議の過程のやり取りで、大名の有馬晴信や家康の近臣本多正純の股肱の臣岡本大八がキリシタンであったほか、自身の旗本や奥女中に至るまで多数の改宗者がいることが判明した。結局この事件でキリシタンというものへの危惧が一段と強まり、キリシタン弾圧への道に踏み出す引き金となった。

家康は1603年に江戸に幕府を開き、1605年には將軍職を秀忠に譲って駿府に隠居したが、引き続き実権をもっていた。駿府にまだ布教所はなかったが、1611年に駿府を訪れたさる神父は1200人の告解を聴き、270人に洗礼を施したといわれる。家康の殿中にも一群の熱心なキリシタンがいて、その中心人物が家康の旗本原主水（ジョアン）であった。彼らは駿府にも神父常駐の布教所を置くことを求め、伏見にいたイエズス会神父ジェロニ

モ・デ・アンジェリスが命を受けて、駿府に布教所を開設したばかりであった。

家康の決断 家康は自身の周辺のキリシタンを追放することからはじめ、駿府居住の家臣団を10人1組に分けてキリシタンか否かを検問し、3月11日頃15名ほどを検挙した。家康は家臣がキリシタンになることを厳禁し、信仰を捨てなかった直臣8名を改易処分にした。原主水はその一人で、棄教を拒否して岩槻藩の親戚を頼って出奔し布教活動を続けたが、最後は悲惨な運命をたどることになる。この結果を諸大名に告知した上で、慶長17年（1612年）3月21日、天領の駿府、江戸、京都に禁教令を布告して、キリシタン教会の破壊を命じ、以後教えを説くことを禁止した。ジェロニモ・デ・アンジェリスは、後述の大追放の際地下にもぐり、東北地方で活動し、蝦夷地まで探検した最初の西洋人として後世に知られることになる。

この時の禁教令で江戸のフランシスコ会の教会と修道院は破壊され、土地も没収された。京都では、家康の許可を得ていなかった教会等の施設がすべて破毀されたが、家康の特許状を得て建てられた教会と修道院は存続を許されており、まだ禁教令は内容も対象地も限定的であった。

しかし、有馬晴信の嫡男直純は父の所領を安堵され、長崎奉行の後見のもとに領内キリシタンの迫害に転じた。当然のように各地で家康の意向を受けてキリシタン迫害が広がり、幕府の対応も強化されていく。そして、1612年9月1日には、江戸を含む関東の幕府領全体にキリシタン禁制を広げたのであった。

慶長18年の禁教令 こうした禁令にもかかわらず、キリスト教の祈りを続け、処刑されたキリシタンを公然と祈り弔うなどの違反が続くので、ついに1614年1月28日（慶長18年12月19日）、全国に禁教令を拡大することを決めた。その総奉行として小田原城主大久保忠隣が京都に派遣され、所司代板倉勝重と図って激しい弾圧を開始した。教会施設は破壊され、パードレ達は全員長崎へ護送と決まった。家康の外交問題と宗教問題を扱っていた金地院宗伝に起草させた「伴天連追放文」（慶長18年の禁教令・慶長18年12月23日付け）が秀忠の朱印を捺されたうえで、日本国中すべての人が守るべき掟として公布された。この禁令は当然宣教師らにも届き、イエズス会と他の修道会の宣教師らは大阪に集められ、長崎に送られた。

金地院宗伝の手になるこの禁教令は、日本国の基本理念は儒教思想にあり、宗教は神道と仏教（両者は一体）である。そこに入ってきたキリスト教は邪宗であって、日本に商船を寄港させるだけでなく、邪教を広めて民を混乱させようとするものであると糾弾し、キリシタンを侵略征服の先兵であるとして、即刻追放し禁止すべきである旨を明記した。

この時期にキリシタン禁令を全国に布令した理由としては、宗教と貿易を切り離しているオランダが1612年以来貿易船を入港させており、同じ新教国イギリスも平戸に来るようになったことから、従来のポルトガル船の来港に支障が出て困らないこと、新教両国がポルトガル、スペインを敵として両国の来港を止めさせよう策動していたことなどが挙げ

られる。あるいはそれ以上に、大阪冬の陣を目前にひかえたこの時期、キリシタン武士に人気があった高山右近や内藤如安らが大阪方に参戦するのではないかと憂慮したことも理由の一つだったとされている。

慶長 19 年の大追放 翌慶長 19 年（1614 年）の春、京都や大坂にいた宣教師はもちろん、九州各地にいた宣教師たちのほとんどが長崎に集められていた。彼らが国外追放を待っているあいだに復活祭がやってきた。4 月から 5 月にかけて、長崎の町では、迫りくる迫害の嵐を前にして、各会派が別々に、競うように、信徒らの大行列を行った。この光景は長崎に 1619 年まで住んでいたスペイン貿易商人アビラ・ヒロン「日本王国記」が詳しく描いている。図説日本の歴史⑩「キリシタンの世紀」の要約引用を部分的に借用すると、次のようであった。

…5 月 12 日月曜日、諸聖人天主堂から荘厳な行列が出た。3000 人以上の男女が加わっていたが、ある者は血の贖罪をなし、ある者は十字架を背負い、また、ある者は大きな石を背や肩に負い、ある者は口にさるぐつわをつけ、身体には鎖をかたく巻き付けていた。多数の者が俵を身につけて太縄で強くしばっていた。また、大勢の者が両腕を後ろに強く縛り上げ、首に太縄をつけ、他の者がそれを引っ張っていた。また、裸の背を責縄や先を細く裂いた竹の鞭で打つ者もいた。…優しくか弱い女たちは、両手を後ろに、あるいは首をしばり、たがいに鞭で打ち合った。しばられた両手に持つ聖画像やキリスト像に敬虔なまなざしを注ぐ女もいた。その他の苦行を行なう贖罪者たちもいて、信仰をふるいたたせるとともに、哀れをさそった。…

5 月 14 日、水曜日の昼間、七つの行列が行われた。そのうちの一つには男女とも身分の高い人々が多く、1000 人以上の贖罪者が参加した。…先頭に大きな杉板をつけた棒をかかげ、そこにはその行列を準備し参加した者の名が記され、「われらは弱く、罪人ゆえ、己が罪を贖い、侮辱申した主への信仰のために、一致して死ぬるよう、われらの主なる神に、ご恩寵によりて誓い奉る」と書かれていた。…

これらの行列は街を練り歩き、天主堂から天主堂を巡り、信徒らの最後の示威を大っぴらに行ったのであった。この年の秋、3 隻のポルトガル船が彼らの追放のために使われた。3 隻のうち 2 隻はイエズス会士 66 人と日本人信徒を乗せてマカオに向かい、残る 1 隻はマニラ向けで、こちらにはイエズス会士 23 人、フランシスコ会士 4 人、ドミニコ会士 2 人、アウグスチノ会士 2 人のほか、高山右近と内藤如安およびその家族、従臣、日本人信者たちが乗っていた。p 108 ちなみに、キリシタン大名であり、布教のリーダー格として力を尽くし、信仰を守って大名の地位を捨てた高山右近は、内外で尊敬を受けており、マニラに到着した時総督や宣教師らの熱烈な歓迎を受けた。しかし、長い船旅の疲労と生活環境の激しい変化のため、到着後およそ 40 日後に熱病にかかって亡くなった。これまで日本人キリシタンの国内追放はあっても、国外追放は初めてという異例の措置であった。

折から大坂方では戦備を整え、一触即発の風雲急を告げる状態となっていた。家康が大

坂征討命令を發したのは、右近らのマニラ出帆の6日前であった。右近、如安ら元キリシタン大名の大坂入城によって大坂方の士気が高まるのを恐れたために、追放を急いだのであろうとされている。事実、秀頼の使者が長崎に到着したとき、すでに右近を乗せた船は出帆した後だった。キリシタン側では、「秀頼がもしキリスト教を奉じ、公開の会堂を建て、宣教師の居住を許可するなら、秀頼に仕えて戦争に助力しようと申し出たら、秀頼はこの条件を受入れた」とルイス・ソテロが書き記しており、すでに多くのキリシタンの武装勢力が大坂城に入っていたのであった。岩生成一「鎖国」p 203。

この時のキリシタン追放は「慶長の大追放」と呼ばれることになるのだが、追放後長崎に21カ所あった教会堂などの施設は全部破壊し尽された。長崎の乙名たちや町民が教会堂破壊の命令にしたがわなかったため、長崎奉行は佐賀、唐津、平戸、大村などの藩に士卒の派遣を命じて作業させたという。破壊されていく聖堂を悲しむ聖職者や信徒らの嘆きの様子もアビラ・ヒロン「日本王国記」(第22章)に描写されている。キリシタンの町として栄えた長崎は様相を一変し、その後も迫害と殉教は一段と激しく繰り広げられたのであった。というのも、大追放後も日本に残留して潜伏活動続ける者がかなりいたからである。イエズス会士26名(パードレ18名、イルマン8名)、フランシスコ会士6名、ドミニコ会士7名、アウグスチノ会士1名に加えて長崎の日本人教区司祭5名、合計45名の残留者がおり、さらに彼らの布教活動を支援する協力者・支援者が100名ほどいたという。五野井p 207

ちなみに、ヒロン「王国記」については、ほぼ同時期に日本にいて「日本におけるキリスト教の迫害」を書いた宣教師ペドロ・モレホンは、「ヒロンは日本の知識が乏しく、多くの誤りを含んでいる」と評している。モレホンは天正少年使節の帰路に同行し、1590年に長崎に上陸した人で、ヒロンの書への注釈の中で、1594年に石川五右衛門が釜茹での刑に処せられたことや、1596年に別府湾を襲った大地震で沖の浜が壊滅したことなどを書き記していることで知られる。モレホンの上記書も、1614~15年の大追放の様子を詳細に描いている。

伊達正宗による遣欧使節派遣 この当時キリシタン迫害は、奥州ではまだ京都・大坂、九州ほど厳しくはなかった。伊達正宗はかねてスペインとの交易を望み、ルイス・ソテロを招いて布教させていた。ルイス・ソテロは伊達正宗の領国内で1,800人に洗礼を施し、正宗に遣欧使節の派遣を進言した。慶長の大追放が行われたその時、伊達正宗は將軍秀忠の同意を得て準備していたフィリピン・メキシコ経由の遣欧使節団を送り出す寸前であった。ソテロも捕えられ追放されるどころだったが、正宗がソテロは使節派遣に欠かせない人物であると嘆願し、許されたのであった。正宗は、やはりソテロの紹介で、探検航海でメキシコから日本に来ていたビスカイノに依頼して、派遣船として西洋式帆船を仙台近郊月の浦で建造させており、正宗の負担で航海士や水夫を雇い、同船は1613年(慶長18年)9月に月の浦港を出港していった。使節団の長に支倉常長が選ばれ、ソテロが副長として同行した。

ルイス・ソテロ（1574～1624）は、セヴィリア生まれのスペイン人で、サラマンカ大学で学び、1594年にフランシスコ会に入会した。ヌエヴァ・エスパーニャ（メキシコ）を経て、1600年にフィリピンに到達し、マニラで日本人キリシタンから日本語を学び、1603年にフィリピン総督の書簡を持参して来日した。フィリピン総督ドン・ロドリゴ・ビベロが帰任の航海で現御宿町の田尻の浜で座礁難破して漁民に助けられた時には、ロドリゴの通訳を務め、後始末のために幕府との斡旋を務めている。ロドリゴは家康に謁見し、三浦安針が建造した西洋帆船（ガレオン船）の提供を受けて帰国していった。この時の見聞をまとめたのが「ドン・ロドリゴ日本見聞記」である。

津軽に流されたキリシタン 大追放の際、京都や大坂にいた日本人キリシタンたちは、奥州外ヶ浜、すなわち津軽地方に流罪に処せられることになった。京都から47人、大坂から24人、計71人の、多くは身分ある武士や町人とその家族が集められ、慶長19年（1614年）3月に京都を発ち、琵琶湖を船で渡って敦賀で乗船し、1カ月の船旅ののちに津軽に到着した。奥州では京都や西国ほどキリシタンの詮議は厳しくなく、とくに津軽は日本の果てであるゆえに追放地として選ばれたのであった。時の津軽藩主信牧（2代藩主）は、少年のころ父為信（初代）とともに京都に滞在していた時入信し、ヨハネの教名を受けていた。家康の時代に入って信仰を捨ててはいたが、キリスト教に対する理解があり、流刑者らに土地を与えて開墾に従事させた。彼らは流刑地での苦しい生活に耐えながら信仰を守ったが、宣教師との接触を断たれ、聖体拝受の機会を失ったことがそれ以上に苦しかった。その地が津軽のどこであったかは、長い間に痕跡も絶えてわかっていない。

パードレの来訪を待ちわびていた彼らキリシタンの要望に応じて密かに東北地方に下ったのが、イエズス会の宣教師ジェロニモ・デ・アンジェリスやディエゴ・カルヴァリョらで、とくにこの二人は東北から蝦夷地（北海道）にまで渡ったことで知られている。

蝦夷地を探検した宣教師 H. チースリク編「北方探検記：元和年間における外国人の蝦夷報告書」は、アンジェリスとカルヴァリョによる東北から蝦夷にかけての布教活動をまとめたものである。二人の埋もれていた長文の手紙がローマのイエズス会で近年発見され、チースリクの研究によって、1962年に刊行された（吉川弘文館）。ザビエルら初期の宣教師たちが戦乱の中を苦勞しながらも自由に布教した時期とは違い、二人の活動はキリシタン迫害の嵐の中、潜伏し、信徒らにかくまわれながらの移動であり、その最期とともに、一読して鬼気迫るものがある。

ジェロニモ・デ・アンジェリス（1568～1623）は、シチリア島出身のイタリア人で、18歳でイエズス会員となった。学生のうちから極東での宣教を志願し、1596年4月念願かなってカルロ・スピノラ神父ほか3人のイエズス会士とともにリスボンを船出したが、嵐で楫がこわれてさまよった挙句リスボンに引き返し、1599年3月再びインド行きの商船に乗り、ついに日本に到着しえたのは1602年のことであった。最初の出帆から実に5年余の後のことであった。日本到着後日本語を勉強し、伏見や駿府で布教に当たっていたが、「大追

放」のとき地下にもぐり、大坂冬の陣では明石掃部の部隊に加わっていたと推測されている。1615年(元和元年)、初めて東北地方に足を踏み入れ、各地の信者のもとを訪れながら、津軽まで行って流刑者たちを慰問した。その後も幾度かこの方面へ布教の旅を重ね、1618年には秋田から海を渡って蝦夷地にまで行った。同じころ、イエズス会士カルヴァリオも東北地方の布教に参加した。アンジェリスが蝦夷地に渡ったのは松前にいる信者を訪れるためであったが、同時にヨーロッパ人にはまったく未踏の地である蝦夷の情報を得るためでもあった。

アンジェリスもカルヴァリオも蝦夷地の調査報告書をまとめたあと、アンジェリスは潜伏行動を支える信徒たちが次々に迫害、拷問、処刑されるのに耐えられず、1623年江戸で自ら奉行所に出頭し、フランシスコ会のフランシスコ・ガルベス、原主水ら47人の日本人信徒とともに札の辻の刑場で火刑に処せられた。カルヴァリオは翌年仙台の青葉城に近い広瀬川で9人の信者ととともに水責めにされて殉教した。

6. 鎖国への道

世にいう鎖国は、キリスト教の禁止に踏み出しながら、どうしてもその勢いをとどめることができなかつたことから、日本人と西洋人の接触の機会をなくする方向へ動き、ついには日本人の海外渡航の全面禁止と外国船貿易の徹底管理により、あらゆる点で海外(とくに西洋)との往来を絶つことを制度として完成していった。大御所家康の晩年、ローマ(カトリック)教会の布教方針は日本国為政者の禁教令と正面衝突し、政権はキリシタンを根絶やしにする決意をもって政策を展開することとなった。中世以降のローマ(カトリック)教の殉教は、ヨーロッパ内の新旧宗教戦争での殉教を別にすれば、非キリスト教国での現地宗教との摩擦によって単発的に起つてはいたが、ヨーロッパ外の非キリスト教国の国策による弾圧がかくも大量の殉教者を出したのは日本だけであった。

宣教師らは、禁止しても禁止しても、ポルトガル船や朱印船などで潜入して布教活動を止めず、むしろ望んで殉教する有様であった。それでも家康の存命中は、布教を禁止しても、宣教師の血を流すことまではしなかつた(岩生「鎖国」p304)。本格的なキリスト教徒の迫害と弾圧が始まったのは秀忠独裁の時代になってからである。

家康は徳川幕府の確立を見届けて、元和2年(1616年)4月12日、75歳の天寿を全うして死去した。内政・外交の独裁者となった秀忠は、家康の定めた禁教策の強化と並行して、大名らによる貿易の制限へと向かっていく。

宣教師排除の政策

伴天連宗門御禁制奉書 その第一歩が、家康死去4か月後の元和2年8月8日(1616年9月18日)付けで諸大名に対して発した「伴天連宗門御禁制奉書」である。「下々百姓以下にいたるまでキリスト教を厳禁し、併せて唐船を除く外国商船の入港を長崎・平戸の2港

に限定すること」を通達した（元和2年の禁令）。前段はキリシタン禁令徹底の指示であるが、後段で大名らに領内に黒船が来航した場合、必ず長崎・平戸に回航させることを命じた点が重要である。西洋外国船による宣教師の入国阻止と外国船貿易の統制が同列に命じられていて、見方によれば、キリシタンの禁令強化を口実にして、諸大名と外国船との直接貿易を禁止する意図とも見えるからである。五野井 p 209.

宣教師の潜入と処刑 まず、禁教の徹底がどのように展開したかを見てみよう。1617年（元和3年）、秀忠は追放されたはずの宣教師らが、今も近隣に潜伏していることを知って大村氏を譴責し、宣教師の探索を督励した。このため大村純頼（純忠の孫で父喜前^{よしあき}とともにかつてはキリシタンだった）は、公領長崎をはじめ隣領の諫早・平戸・五島などに士卒を派遣して探索させ、同年早くも大村において、イエズス会とフランシスコ会の宣教師各1名、次いでドミニコ会とアウグスチノ会の各1名の宣教師が斬首された。これが徳川幕府による初の宣教師の処刑であった。彼らの殉教は宣教師や信徒たちの血をわきたたせ、その栄冠を目指して大村城下では白昼公然と説教が行われた。官憲をないがしろにする行動に領主として黙っておられず、大村喜前は長崎奉行長谷川権六（佐兵衛藤広の甥）、棄教した代官末次平蔵らとともに徹底的な弾圧に乗り出した。同じころ京都でも信者の探索・逮捕が始まり、1619年、京都の七条河原でキリシタン52名が火刑に処された。ただし、京都での処刑は一般庶民のみで、パードレもイルマンも含まれていなかった。

幕府が禁教令の徹底に突き進み、キリシタン迫害の時代を迎えると、逆に日本布教と殉教への情熱に燃えた宣教師らが死を賭してマニラから続々潜入してきた。1618年に7人、1619年6人、1620年2人、1621年3人という具合であった。1621年にはマニラだけでなく、マカオからイエズス会員3人がやってきたからこの年は6人がやってきている。

平山常陳事件と元和の大殉教 そうした中で平山常陳事件が起こり、続いて元和の大殉教が起った。平山常陳事件というのは、1620年、キリシタンでもあった堺出身の船頭平山常陳が朱印船に大量の輸入品を積んで日本に帰国の途中、台湾海峡でイギリス船に捕獲され、平戸に曳航されてきた事件である。朱印状をもっていたため怪しい船でないことは認められたが、その船にスペイン系の2人の宣教師らしき人物が潜んでいたのが問題であった。宣教師らは拷問を受けても宣教師であることを白状しなかったが、対抗勢力であるイギリスとオランダの商館長らが、彼らを宣教師であると告発し、彼らを知る証人も連れてこられ、拷問の過酷さにもまけて、二人はついに白状した。1622年8月、2人の宣教師と常陳は火刑に処され、日本人乗組員12人は打ち首となって事件は終結した。

常陳事件が決着したあとの1622年9月10日土曜日、長崎や大村の獄につながれていたイエズス会のカルロ・スピノラ、ドミニコ会の元代理管区長ヨセフ・デ・サンハシント、フランシスコ会のリカルド・デ・サンタアナら各会派の宣教師をはじめ、その他の伝道師や彼らをかかまった者とその家族など、老若男女の信者合わせて55人が長崎西坂の刑場で火刑に処された。世にいう元和の大殉教事件である。処刑されたスピノラは、京都在任中

の1605年、修院に天体観測器をとりつけて使用し、アカデミアを設けて数学と天文学を講じ、1612年には長崎で月蝕を観測して長崎とマカオの位置を測定した人物である。1622年はこの大殉教を含め、火刑や断罪に処された殉教者の数は120人を数えた。バジェスの「日本切支丹宗門史」の1622年の項は、56ページにわたって凄惨な拷問と殺戮の有様を描いている。

宣教師の密入国阻止 大殉教の報がマニラに伝わると、各会の宣教師や信者たちは、決死の覚悟で布教団を組織して日本に送ることを決議した。翌1623年の初夏、ドミニコ会のドミンゴ・デ・エルキシアをリーダーとする10人の宣教師たち（ドミニコ会4人、フランシスコ会4人、アウグスチノ会2人）は、商人の衣服に身をやつしてマニラを出発し、日本への渡航を企て、薩摩半島西南海岸の久志に到着した。途中で1人病死して残る9人がなんとか上陸はしたが、極度に取り締まりが厳しく、信徒にかくまわれて各地に身をひそめたが、さして月日も経たぬうちに捉われて殉教した。こうした動きは幕府にとって想定外の衝撃であったが、イスパニア政庁が日本との国交への悪影響を配慮して、以後彼らの渡航を極力抑えたとされている。「鎖国」 p 310

徳川幕府は、宣教師の入国を防ぐために、長崎では1622年末から翌年春にかけて、入港する船舶の監視を徹底し、宣教師の密入国の完全阻止を追求した。前記9人の薩摩半島への密入国阻止も、そうした対策の成果であった。五野井によれば、禁令以後の1615年から鎖国後の1643年までに、マカオ・マニラ・インドシナ半島から日本本土に密入国した宣教師は101名（パードレ85名、イルマン16名）に及び、その7割の70名は1615年から24年までの間に入国しており、監視の目が一段と厳しくなった1624年以降5年間は一人の入国もなかった。それでも1629年の11人をはじめ、43年までに30人ほどが決死の密入国を敢行しており、この動きを止めることがいかに容易でなかったかが窺われる。

フェレイラからキアラまで 1633年10月日本管区代理管区長であったクリストヴァン・フェレイラ（1580～1660）が長崎で捉えられ、穴吊るしの拷問によって転び（棄教し）、最初の転びバタレンとなった。フェレイラは1609年（慶長14年）に来日し、追放令の後も日本に残って禁制下に布教活動を続けていたパードレであった。フェレイラは棄教後日本名澤野忠庵を名乗り、以後カトリック弾圧に手を貸すことになる。フェレイラ背教の報はカトリック教会に衝撃を与え、フェレイラの罪を償うため、また彼の立ち返りを求めるために、禁教下の日本にさらに潜入の試みが行なわれた。1639年イエズス会士アントニオ・ルビノがフェレイラに立ち返りを勧めるために、2組の宣教団を編成して日本への潜入を企てた。ルビノをリーダーとする5人のパードレに同宿・小者を加えた9人からなる第1団は、1642年（寛永19年）にマニラを出て薩摩の下甕に着いたが、捉えられて長崎に送られ、翌1643年、激しい拷問の末に全員が殉教した。

次いで同1643年4月、日本管区長ペドロ・マルケスを団長とする第2団10名（うちパードレ4人、イルマン1名）がやはりマニラを出帆して日本に向い、筑前大島で捉えられ、

今度は江戸に送られた。江戸幕府のキリシタン禁教政策の指導者であった井上筑後守政重の取調べによって、この第2グループは全員が転び、全員殉教した第1団とは対照的であった。彼らは井上政重の屋敷内に建てられた切支丹屋敷に収容され、生きながらえることになった。一行の中のジウゼッペ・キアラ（日本名岡本三衛門）は、フェレイラらとともに遠藤周作「沈黙」の登場人物となった。キアラが主人公ロドリゴのモデルである。かくして宣教師密入国の流れはこの1643年の5人を最後に途絶えたのであった。

日本人キリシタンの根絶

幕府は宣教師らの入国阻止を徹底する一方で、キリシタンになっている日本人を探し出して根絶すべく、国の隅々にまでキリシタン探索の眼を光らせた。弾圧が強まる中で信徒らは宣教師らをかきまい、かえって信仰を強めていき、宣教師らの指導が受けにくくなると、迫害に抵抗する地下組織を結成して結束を固めるようになった。幕府は信徒らの抵抗にあって、ますます迫害の度を強めていく。

教皇の慰問状 日本の信徒らが迫害にさらされているという情報は、世界に大きな衝撃を与えた。時の教皇パウロ5世は、1617年、サンピエトロ大聖堂の工事完成を祝して罪障消滅の教書を交付したが、これを機に、とくに迫害に苦しむ日本の信徒たちに向けて慰問状を發した。教書は3年後の1620年（元和3年）に長崎に到着し、厳しい弾圧下に活動していた宣教師らは、この教書と慰問状の写しに翻訳を付して全国の信者に伝達した。九州から奥羽にいたる日本各地の信徒らは、感激と感謝の意を奉答文にしたため、代表者が署名を連ね、イエズス会はこれをまとめて教皇の元に届けたのであった。それら奉答文のうちの5通がバチカン古文書館に残されている。「図説キリシタンの世紀」 p 217

密告の奨励、踏絵、寺請制度 1623年に秀忠が隠居し、家光が將軍職につくと、迫害の度が一段と厳しくなった。ひそかに組織をつくって互いに連絡を取りながら信仰を守っている信者や、組織にかくまわれて信者らを支えている宣教師らを検挙するために、懸賞金をかけ、密告の制度を設け、探し出しては拷問によって棄教を迫り、応じないものは処刑した。「図説日本の歴史⑩キリシタンの世紀」は『試練と背教』の項でその拷問の凄惨さを描いている。1626年に水野河内守が長崎奉行になってからとくに激しくなり、次いで3年後に竹中采女正に代わると、近隣の島原豊後守と図って島原温泉（雲仙）の熱湯を使った地獄のごとき拷問が行われ、転ばないものはそのまま殺された。その中にはアウグスチノ会のパードレ・ヴィンセント・カルバリョほか4人の宣教師も含まれていた。

1629年頃に絵踏（踏絵）も導入された。絵踏は、監視や告訴による方法をさらに進め、個人個人に聖像等を踏ませてその信仰を試すという残酷な方法で、肉体の拷問と違い、精神への拷問であった。宣教師も信徒も殉教を栄光と信じて喜んで死を受け入れるので、幕府はやむを得ず拷問して殺すより、転ばせること（棄教）に方針を切り替えたのであった。禁教令以降に棄教したキリシタンは《転びキリシタン》と呼ばれ、棄教したことを寺請制

度によって保証させた。寺院に個々の住民が自院の檀家であることを証明させる制度で、寺請証文を発行した。当初は転びキリシタンだけが対象だったが、次第に一般人にまで広げようになったもので宗旨手形とも呼ばれ、江戸時代を通じて領民を統括する手段として使われることになっていく。「キリシタン小百科」 p 232

国際往来の制限：外国船の制限と朱印船の縮小

家康の時代は、黒船の来航を歓迎する一方で朱印船の派遣をも奨励し、台湾、マカオ、フィリピンからインドシナ半島方面まで活発な貿易を展開してきた。朱印船は日本と東アジア地域の貿易を、ポルトガル・スペインの南蛮船、オランダ・イギリスの紅毛船と競ってきたのであった。しかし、秀忠の時代になると、宣教師の違法潜入を阻止し、国内の切支丹を根絶するために、一転して黒船貿易を制限する方向に向かい、朱印船の派遣にも制限を加え、次第に鎖国へと舵を切っていく。

貿易地を長崎・平戸2港に限定 最初の本格的な外国船貿易の制限は、秀忠による元和2年の「伴天連宗門御禁制奉書」であり、これによって外国船の来航地を長崎と平戸の2港のみとする命令としたことは既に述べた。この時まで、外国商館は江戸や大坂はもちろん、国内各地の主要商業都市に支店や代理店を設け、商館員を派遣したり日本人商人に委託して自由に商業活動を行ってきたから、これは寝耳に水の衝撃であった。

この措置は、キリスト教徒である外国人貿易商人と日本人との接触を最小限にしようとする宗教的な狙いから来たものと考えられたから、イギリスは、同じキリスト教徒であってもローマ教会とは異なり、布教にまったく関心がないことを主張したが、幕府は同じキリスト教徒であることを言い立て、その違いが理解できないのか、少なくとも分からないふりをして応じなかった。この時の命令の文面（黒船やイギリス船も…とある）をみれば、ポルトガル・スペイン船とイギリス船だけが対象のように見えたが、オランダも同様に2港に制限された。ただしこの時は、制限の理由がキリスト教禁令と結びついていたため、唐船には適用されなかった。

長崎、平戸に貿易地を限った背景には、西国大名らが貿易活動で豊かになって強大化することを幕府が好まず、かねて大名による領内での貿易活動を禁止する方針であったため、イギリスの抗議が聞き入れられることはなかったのである。

初の交通貿易制限令 元和2年の伴天連宗門御禁制奉書は貿易地の制限を定めたが、次いで平山常陳事件の後を受けて、元和9年（1623年）暮れに、初めて海外交通貿易全般に関わる厳しい制限措置を講じた。内容は、①ポルトガル人は日本の新年までに日本から立ち去ること、日本に再来することは禁じないが、キリスト教徒の家に泊ってはならない、②日本人のフィリピンへの渡航禁止、とくにキリシタンの海外渡航を全面禁止する、③日本船にポルトガル航海士を採用することを禁止する、の3点を内容とする禁令であった。この禁令自体は日本には残っていないが、当時のヨーロッパ人の記録にしばしば登場する

ものである（「鎖国」 p 337）。

翌 1624 年、幕府はマニラ使節の引見を拒否してスペイン船の来航を禁止し、フィリピンとの国交を断絶した。マカオを拠点とするポルトガル船に対しては、乗船者名簿を提出させ、名簿に記載のない者の乗下船を禁止した。

このため、キリシタンは海外に出ようと思えば棄教するほかなくなった。日本イエズス会は、1623 年に布教補助者の不足を補うために、同宿やキリシタンの子弟をマカオのセミナリオに送って養成しようと思っていたが、これによって計画を断念するほかなかった。五野井 p 212/3

奉書船制度の導入 海外渡航朱印状が導入されて以来、その発行原簿というべき記録が残されている。記録は元和 2 年（1616 年）までで終わっているが、岩生成一「朱印船と日本町」によれば（p 32）、翌元和 3 年（1617 年）から鎖国までの 19 年間に、わが国の諸港から南洋各地に渡航した朱印船は 161 隻以上と推定されている（創設以来の累計は少なくとも 353 隻と推計）。大名の朱印船派遣が停止したあとも、有力商人は幕府の近臣などの縁故があれば、適宜コミッションを払って朱印状を下付してもらうことができた。しかし、キリシタンとの関係で制限が次第に厳しくなり、寛永 8 年（1631 年）6 月には、朱印状だけでなく、3 老中連署の渡航免状を併せて必要とする「奉書船制度」が導入された。永積洋子「平戸オランダ商館日記」によると、1634 年（寛永 11 年）2 月 7 日に、三浦按針の息子で秀忠の旗本になっている同名の三浦按針ジュニアが訪ねてきて、老中 3 名連署の朱印状の申請は多数あったが、7 名分しか下付されなかったと言ったと書かれている。下付されたのは三浦本人のほかに、平野藤次郎、末吉孫左衛門、茶屋四郎次郎、末次平蔵、橋本十左衛門、角倉了以の 6 人であった。しかし、これら七人衆の朱印船派遣も長続きせず、間もなく日本船の海外渡航の全面禁止へと向かっていく。

鎖国の完成

チースリク「北方探検記」によれば、1623 年に秀忠が家光に将軍職を譲って隠居したとき、信徒たちは新たな希望を胸に抱いたという。なぜなら家光は青年時代しばしば神父たちと親しく交わり、後年になってもキリシタンを嫌うという風を見せなかったからであった。しかも、最近の数年は迫害もいくぶんゆるんでおり、将軍の代替わりを機に、キリシタン禁令が廃止されるかもしれないという期待も、あながち根も葉もないことではないように思われたからであった。 p 11

しかし、彼らは間もなく失望を味わわなければならなかった。秀忠が寛永 9 年（1632）年に亡くなると、翌寛永 10 年（1633 年）、実権を握った三代将軍家光は総括的な制限令を発して鎖国へと邁進する。寛永 10 年令は 17 カ条からなり、岩生「鎖国」の整理によると、第 1 条から第 3 条が日本人の海外往来に関すること、第 4 条から第 8 条がキリシタン宗門関係、とくに伴天連取締りを内容とし、第 9 条から第 17 条が外国船取り締まりの規定、と 3 種類に大別される。

寛永10年令は、寛永11年、12年、13年、16年と4次の改定を経て強化されていくのだが、13年の改定のあとの寛永14年（1637年）秋から寛永15年春にかけて島原の乱が起ったため、この乱を踏まえ、最終的に寛永16年（1639年）の改定をもって鎖国は完成した。テーマ別に追ってみると以下の通りである。

日本人の海外渡航禁止 寛永10年（1633年）令では、①奉書船以外の船を海外に出してはならない、②奉書船に乗る以外に日本人は海外に行つてはならない（禁を破つた者は死刑）、③異国に渡つて居住して帰つてきた者は死罪、是非ない事情で5年以内に帰つて来た者は取り調べの上、日本に居住するものは許すが、再度異国に出れば死罪、とされており、まだ奉書船の渡航が認められていた。しかし、寛永12年（1635年）の改正令によって日本人の海外渡航は全面的に禁止された。すなわち、異国に船を派遣することは一切禁止、日本人が海外に行くことも一切禁止、異国に行つて帰つて来た者は死罪、と絶対無条件に禁止された。

奉書船制度によって制限を加えたにもかかわらず、幕府と縁故の深い商人たちの奉書船でさえ、鉄砲を密輸入する便乗者があつたり、マカオの日本人をキリシタンにしようとする者があつたり、さらには伴天連を日本に伴おうとする者があつたり、といった違反者が後を絶たず、初期の目的を達することができなかつたので、ついに朱印船そのものを全面禁止にしてしまったのであつた。

伴天連禁止令 伴天連禁止の令については、以前から絶対禁止となつており、徹底的に探し出して処刑ないし棄教させるという趣旨であつて、これは寛永10年から13年まで変更はない。寛永16年の令で変更されたのは、密告制度の懸賞金の金額が上げられただけであつた。

貿易統制 17カ条のうち半分以上の条文が貿易統制に関わるものである。しかし、重要な要件である長崎、平戸の2港に限定することは先の元和2年（1616年）の秀忠の命令で決まつていたので、寛永10年令はむしろ取引細部の規定である。①特定商人が貿易独占をしてはならない、②異国船の積荷の目録を江戸に報告する（返事を待たずに販売してもよい）、③生糸は5カ所商人が値段を建てて一括引き取る、④生糸以外の商品は生糸の値が決まつたあと相対で取引してよし、⑤奉公人は異国船から直接ものを買つてはならない、⑥貿易期間の制限、⑦異国船の来訪・帰帆の時期の制限、⑧異国船の売れ残りの品を預けることも預かることも禁止、⑨平戸や薩摩に入った異国船も長崎の値段で取引すること、といった内容であつた。⑦の異国船の来訪・帰帆時期の制限というのは、アジアで優位に立つたオランダが日本出港後にポルトガル船（大部分の船に日本人が投資している）を略奪するなどの心配があり、両国の船の寄港と出港の時期を調整したものである。末次平蔵はポルトガル船に投資している一人であつたが、ポルトガル船を襲撃しない旨の誓約書を書けば、入出港の時期に制限は加えないという方向で交渉したが、オランダ商館長がそれは権限外と断つたために、このような命令になつたという。

これらの規定は、前述の通り何度か改正され、寛永13年（1636年）の令において唐船（中国船）も黒船同様に長崎・平戸の2港に制限され、寛永16年（1639年）令でついにポルトガル船の日本寄港が全面禁止となった。この内容はオランダと中国にも正式に伝えられて、ひとまず鎖国は完成した。

ポルトガルの追放 ポルトガル船の寄港禁止を決断するに当たって、幕府はその影響についてオランダ商館長に事前に相談しており、慎重に事を運んだ様子が窺われる。第一に、ポルトガル船禁止の理由は、繰り返し警告しているのに、相変わらず宣教師を連れてきて布教を止めず、有馬・島原の反乱のように、毎年宣教師のために多くの日本人が死んでいることを説明し、第二に、ポルトガル船を禁止した場合、必要な輸入品をオランダ船で確保できるかどうか、第三に、日本を締め出されたら、ポルトガルはマカオを引き揚げてゴアに戻るのか、あるいは島原の乱のことを知って命令に反してまたやってくるのかどうか、などを訊きただした、とオランダの平戸商館日記は記述している。

ともあれ、これによって天文年間以来1世紀続いてきた日本とポルトガルの貿易は断絶した。禁令直後にこれを知らずに入港してきたポルトガル船が2隻あったが、禁令を渡してマカオに帰らしめ、鎖国令の施行を内外に明らかにした。この情報に接したマカオは驚き、日本貿易はマカオ存亡にかかわることとて急いで対応策を検討し、ゴアの政庁とも協議の上で、翌寛永17年（1640年）5月17日、使節団一行が長崎に入港した。急報を受けた幕府は迅速に処分することを決め、上使加賀爪民部少輔を派遣して乗船を焼沈するとともに、使節パチェコを含む乗組員61名を西坂で斬って首級をさらし、わずかに下級船員13名を中国船に乗せて送り返すことで、鎖国令を断固施行する態度を明らかにした。

鎖国の強化と手直し：オランダの扱い 1639年暮れに日本からバタビアに帰着したオランダ船がポルトガル船の日本入港が禁止されたことを告げると、バタビア総督府は長年のオランダの努力が実を結んだと大喜びし、盛大に祝賀と感謝の催しを行った。しかし、西洋国として唯一貿易船を入港できることにはなつたが、火の粉はオランダにも降りかかってきた。オランダもまたキリスト教国に違いはなく、日本人との接触を禁じられることになったのである。

ポルトガル人追放の1639年以降、日本に滞在するオランダ人の生活上の束縛が強化され、女性をはべらせることを禁止したり、牛の屠殺を禁じたりしている。1640年には建設したばかりの平戸の商館の取り壊しと長崎移転を命じられ、ポルトガルを追い出したあとの長崎出島に押し込められることになる。そのいきさつは「平戸オランダ商館の日記」が詳細に語っており、永積洋子の解説「平戸オランダ商館日記」（講談社学術文庫）によれば、この命令への商館長の対応によっては、大変危険な状態であつたらしい。岩生成一「鎖国」の記述も援用してこの部分を紹介すると、およそ以下の通りであつた。

1640年10月、キリシタン取締りで辣腕をふるった大目付の井上筑後守政重（元キリシタンであつた）が特使として長崎に下り、長崎奉行以下多数の随員とともに平戸に赴き、平戸

藩主の邸に商館長カロンを招いて次のように申し渡した。少し長いが引用する。

將軍は、貴下がポルトガル人と同様キリシタンである、との確かな報告を受けている。貴下らは日曜（安息日）を守り、キリスト生誕の年を我々の国の一般の人々から見える貴下の家（商館の倉庫）の正面の破風に書いている（東インド会社の紋章に 1639 と年号が入っている）。十戒、主の祈り、洗礼、聖餐礼、旧・新約聖書、モーゼ、預言者、使徒などを信じている。一見したところ、ポルトガル人とオランダ人の両者に見られる違いを、我々は小さいと考えている。貴下がキリシタンであることは以前から知ってはいたが、別のキリシタンと考えていた。そこで將軍は、私に、上記の年号の入っている貴下の住居を全部破壊すべしと命じられた。貴下が日曜日を公に守ることは許さない。この名を思い起こさせないためである。オランダの商館長は今後 1 年以上日本に留まってはならない。毎年交代するように。これはマカオの人々が行なっていたのと同様で、日本人と長い間接触してキリストの教えを広めないためである。

この意外な命令を受けても、カロンは平然として表情を変えず、つつしんで一礼し、將軍の命令通り取り計らいますと答えて引き下がった。命令に逆らうと大変な目に遭いかねないと承知していたからであった。井上政重はこれを聞いて驚き、喜んだという。平戸藩士に、「私がこれまでキリシタンの国をいろいろ扱ってきた時のように、彼らは何かを要求したり、願ったり、訴えるだろう、と思っていた。しかし、これがなかったので、多くの困難と流血を免れた」と語った。この時 20 人ほどの腕達者が周囲に待機していて、カロンたちが抗議や要求をしたら、その場で切り殺すことになっていたのだという。

商館長カロンは、オランダ人も 1 年以内しか滞在を認めないと決められたため、翌 1641 年に新着のマクシミリアン・ルメールに後を譲って日本を去っていった。

フランソア・カロン 鎖国時のオランダ商館長フランソア・カロン Francois Caron (1600～73) はオランダに亡命したフランス系ユグノー（新教徒）で、19 歳で日本行きのおランダ船に乗り、1619 年に料理人として来日した。以来 1641 年に日本を去るまで 20 年以上を日本で過ごしたが、その間江口十左衛門の姉と結婚し、6 人の子をもうけている。1626 年には商館助手に昇格し、日本語に熟達していたので、1627 年には台湾行政長官のピーテル・ノイツが来日したときは江戸参府に随行し、日本＝オランダ語の通訳として重要な役割を果たしている。タイオワン事件（浜田弥兵衛事件）で平戸の商館が 4 年間閉鎖された時は、問題解決のために奔走した。日本退去後もオランダ東インド会社の要職を占めて活躍したが、フランスがアジアに進出するに当たり、フランス宰相コルベールがカロンをアジア派遣海軍の長に推薦した際、フランス市民権をとってフランス人となった。1664 年には新設のフランス東インド会社の支配人に就任し、オランダからは永久追放された。カロンは日本人と接触した最初のフランス人であった。

平戸から長崎出島へ 幕府は鎖国政策の第一段階として 1634 年から長崎に人口島（出島）の建設を開始し、出島は 1636 年に完成した。長崎市内に住んでいたポルトガル人は強制的

に出島に移住させられていたが、1639年にポルトガル人が追放されたあと、1641年にオランダ人が平戸から空になった出島に移動させられた。カロンの後任のルメールは、扇型の出島を視察し、長崎の町役人と打ち合わせしたうえで、島の西方の水辺にある日本家屋7棟のうち2棟の内部を洋風にし、倉庫8棟を選んで商館の倉庫に決めた。新暦1641年6月24日、オランダ商館員らは平戸藩主と多数の市民に惜しまれながら、住み慣れた平戸を後にして長崎の出島に移転してきたのであった。

出島でのオランダ人の行動は極めて制約されたものとなったが、幕府は取引額の制限はまったく課していなかったから、唯一の西欧国としてオランダが扱う貿易量は膨大な量にのぼり、大いなる利益を上げる体制が整ったのであった。

中国貿易船の来訪状況

鎖国政策はキリスト教を締め出すことに主たる目的があったから、中国（明）船は別扱いとされてきた。ここで、この時代の中国船による貿易の状況をまとめておこう。

16世紀後半から17世紀前半にかけて、東シナ海の海上貿易で最大の利益をもたらしたのは日本の銀と中国の生糸を交易する日中貿易であった。明の海禁政策によって中国商人の対外交易は違法行為とされ、後期倭寇による非合法貿易が横行していた。1570年頃に海禁政策が解除されてからも、中国商人による日本貿易の禁止は解除されなかったから、その間隙をぬってポルトガル船が日中間の仲介貿易を行うようになっていた。

秀吉は天下統一を果たすと、天正16年（1588年）、長崎の教会領を直轄領にするとともに、「海賊停止令」を発して日本海域での海賊行為を禁止した。秀吉の停止令の意図は国内海域の安定だけでなく、東シナ海での海賊（倭寇）活動の取り締まりも含んでおり、翌天正17年（1589年）、九州諸大名に宛てた朱印状において、日本船に限らず、中国・朝鮮・ポルトガル船の海賊行為をも取り締まるよう命じている。その結果、東シナ海の海域ではほぼ倭寇の活動は停止し、以後日中貿易は、1557年にマカオを拠点として明と公式貿易を始めたポルトガルによる仲介貿易の独壇場となっていた。

秀吉は東アジアでの覇権を求めて2度にわたって朝鮮に出兵して失敗し（文禄・慶長の役）、その結果朝鮮および朝鮮を支援した中国とは関係が断絶したままであった。

明との交易再開は失敗 対馬の宗氏は日本軍撤退と同時に朝鮮との修好復旧の交渉を始め、家康の親善外交の方針に沿って何度も交渉を繰り返し、慶長12年（1607年）5月、朝鮮使節呂裕吉一行の来日が実現し、朝鮮との関係は復旧した。宗氏と朝鮮の間に条約が結ばれ、以後対馬から毎年朝鮮に20隻の貿易船を出すことが決められた。

秀吉死後に権力を掌握した徳川家康は、朝鮮や琉球の仲介によって明との国交樹立を望んで画策したが成功せず、明はかえって沿岸の警備を厳しくする道をとった。日明の国交回復はならず、公式貿易の開始には至らなかったが、慶長15年（1610年）に広東の商船が自主的に長崎に入港してきた。家康はこれを歓迎して寛大な朱印状を与え、将来にわたって中国船の貿易活動を保証した。同年暮れにはさらに応天府の商船が五島列島に来訪し、

知らせを受けた家康は船長を駿府に招き、やはり寛大な条件による貿易入港を認める朱印状を与えた。こうした日本側の態度に反応し、南京・福建の商船が続々長崎にやってくるようになった。国交も勘合貿易も復活しなかったが、民間貿易船は慶長 19 年（1614 年）に 60 隻、寛永元年（1624 年）40 隻、寛永 2 年（1625 年）には 90 隻にも上り、その後も活発に来航した（岩生「鎖国」 p 165）。

明から清へ 幕府が鎖国に突き進んでいた頃、中国は明から清への交替の大変動のさなかにあった。明の末期、北方女真族のヌルハチが 1616 年に建国した後金が、1618 年に撫順・清河を陥落させ、1621 年には瀋陽に遷都して中国に侵入する動きを見せた。ヌルハチの後継者となったホンタイジは満州国のハンにとどまらず、内モンゴルを支配下に入れたのち、中原を目指す志を示して 1636 年に国号を清と改め、満・蒙・漢 3 国の君主であることを示して皇帝を名乗った。

しかし、直接明の滅亡をもたらしたのは、外的勢力ではなく内乱であった。1634 年から翌年にかけて陝西省で起った大飢饉に端を発した窮乏農民の反乱は、李自成に指導されて巨大な反政府勢力になり、1644 年には 40 万人の大軍をもって北京を包囲し、崇禎帝を自殺に追い込んだ。李自成は順帝を名乗り新王朝が誕生したかに見えた。しかし、万里の長城の東端山海関で清軍と対峙していた呉三桂は、急を聞いて清軍と和して反転攻撃のために清軍の援助を乞うた。清はこれを受入れて李自成討伐に向かい、同年 5 月、反乱軍を破って北京に入城した。かくして明王朝は倒れたが、南部では明の遺臣たちが様々な王を立てて清軍と対峙した。明滅亡の情報は長崎に来る中国船によって徳川幕府にもたらされ、明の遺臣らは日本の支援を求めて使い送ってきたが、幕府は慎重に検討の結果要請を断わった。

鄭成功 各地に形成された反清勢力の中で、最大であったのが中国東南部沿岸を支配していた鄭芝龍・鄭成功父子であった。鄭芝龍は福建省出身の商人で、1620 年代前半は朱印船貿易を営む中国系商人の傘下で台湾や東南アジアとの貿易に従事し、平戸島に住んでいた。平戸で藩士田川七左衛門の娘マツと結婚し、1621 年息子鄭成功が生まれた。1628 年に鄭芝龍の勢力を頼んだ崇禎帝によって明の海将に任じられ、息子成功とともに福建省にもどった。成功はこの時明王家の姓である朱を賜ったため、国姓爺と呼ばれることになる。鄭芝龍はまもなく清国の招撫を受けて投降するが、鄭成功は父とたもとを分かち、明の遺臣による永曆政権を奉じて徹底抗戦する道を選び、抗清活動を続けた。彼は東シナ海・南シナ海での交易から得られる潤沢な資金を基盤に、一時は長江を遡って南京に迫り、海戦に不慣れな清軍を手こずらせた。

清朝は、1656 年、鄭成功の資金源を断つために江蘇・浙江・福建・広東・山東などの人民が海に出て鄭成功の一党に糧食その他の物資を売ることを禁止した。1661 年にはさらに禁令を強化する遷界令を発し、沿海住民を内地に強制移住させて沿岸を無人地帯にすることで鄭氏勢力と住民との接触を断とうとした。当時すでに内地の永曆政権も滅亡寸前の状

況にあり、1661年、清の排除対策に苦しむ鄭成功は海外に新拠点を築くべく台湾に侵攻した。本拠のゼーランディア城を包囲されたオランダ人は降伏し、台湾を捨ててバタビアに戻っていった。

鄭成功の活動は近松門左衛門の浄瑠璃作品「国姓爺合戦」に取りあげられ、日本人を母に持つ和唐内（鄭成功）が明国再興のために中国に渡って奮闘する英雄として描かれ、大当たりしたことはよく知られている。

鄭氏の日本貿易 中国船も寄港地を長崎に制限された1635年頃から、鄭芝龍は東シナ海・南シナ海における日本の対中国貿易を支配し、子の鄭成功も1660年代初頭に清の封鎖策に妨害されるまで、生糸をはじめとする中国産品の対日貿易を支配した。台湾に拠点を移してからは、長崎と台湾・マニラ・インドとの仲介貿易でイギリス商人との通商に活路を見出し、鄭成功が1662年に死ぬと長崎貿易は子の鄭経が引き継ぎ、1680年代初頭まで繁栄した。しかし、清政府が1683年に台湾侵攻に踏み切るに及んで降伏し、鄭氏時代は終わった。中国の取引に係わる数字の資料は少ないが、岩生成一「鎖国」が鄭氏時代の貿易の品目や数量をあげて、その力が巨大であったことを示している。

鎖国時代の日清貿易 鄭氏が降伏した翌年の1684年（貞享元年）、清は遷界令を廃止して展海令を発し、江蘇・浙江・福建・広東の各省にそれぞれ海関を設け、海外貿易を希望する商人に渡航証明を給付した。海禁令から一転して、武器や鉱産物などの禁止品目以外の輸出が自由になったので、これ以降中国商船が長崎に押し寄せるようになった。1685年には85隻、86年には102隻も来航して幕府をあわてさせ、中国貿易の制限へと政策を転換させた。1689年には、それまで長崎市内の知人や縁故者の家に自由に宿泊・滞在していた中国人をまとめて1ヶ所に滞在させるよう改め、唐人屋敷を設立して管理を強化した。唐人屋敷と唐人の生活ぶりについては、岡田章雄著作集Ⅱ「キリシタン風俗と南蛮文化」の『唐紅毛の遺産』と題する章（p 334～）が詳しく紹介している。

展海令以後に長崎に来た中国船は、いわば清朝の間接的な派遣船であった。鎖国日本と中国は国交を結ぶことはなかったが、清朝は長崎へ行く自国船に非常な関心を持ち、つねにバックアップしてきたのであった。

7. 南蛮人の来訪がもたらしたもの

キリシタンの世紀は、ヨーロッパとの初接触が日本にさまざまな影響をもたらした特徴ある時代であった。最初に日本を発見することになった西欧人は、領土侵略でも、金儲けのためでもなく、キリスト教布教の情熱に燃えるイエズス会の宣教師たちであった。日本古来の仏教・神道とは異質のキリスト教が短期間に浸透して為政者が不安に思うほどの勢力になって行き、天下統一に成功した秀吉、家康は、貿易だけを望んでキリスト教を遠ざけようとして失敗した。

しかし、彼らはキリスト教の教えだけでなく、すでに爛熟期に入っていた西洋ルネサンス文化をももたらしてくれた。ザビエルに続いて来日したイエズス会宣教師たちは、ヨーロッパでも最高の教養を修めた人たちで、当時のヨーロッパの技術と文化の粋をも伝えてくれた。島国日本は、ポルトガル人によってもたらされる新しい文化・知識と貿易の利を大いに歓迎し、大なる刺激を受けたのであった。ただ、それらがカトリック教の布教と不可分の形で進められたのが問題だった。

鎖国：カトリック布教に対する防御

ポルトガルのアジア進出は、インドに到着したヴァスコ・ダ・ガマが最初にインド当局に問われて来航の意図を述べたように、キリスト教徒と香料を求めることから始まっており、物心両面の渴望が大航海のエネルギーの元であった。だが、既に文明度の高かったアジアでは、貿易の利益は獲得できたが、キリスト教徒の獲得には失敗した。その点では、インドのかなりの部分からマレー半島、インドネシア諸島からフィリピン南部のミンダオまでイスラム教が広がった事実は、武器も国家の支援もなく、商人として進出したイスラム教のほうが結果的に改宗者を無理なく得ていったのであった。

攻撃的だったカトリックの布教 レコンキスタを数世紀にわたってイスラムと戦い、その延長線上に海外に進出したポルトガルとスペインは、戦闘的であるうえにキリスト教の布教を天命と考えていた。野蛮な偶像崇拜を打破して人々に光明を与えるという思い上がりがあり、権力の獲得と維持のためには武力を使い、植民地支配という悪名高いシステムを作り出したのだったが、結果として力づくで得た改宗者は少なかった。

すでに見てきたように、一神教のカトリックの教えは、イエズス会の熱血布教によって、至る所で日本の宗教と軋轢を起こした。自身の神のみが正しいと信じ、暗闇の中にいる混沌の異教徒を救うという宣教師たちの信念は、知性・清貧・真摯さにおいて人を感動させたし、持ち来たった天文学・気象学・医学・地理学・航海術などの知識によって日本の知識層を圧倒した。また、死後の天国救済の教えは、戦乱に苦しむ庶民を惹きつけ、多くの改宗者を獲得していった。しかし、世俗権力を超越する權威の崇拜は、国内統一に成功したばかりの日本の封建政権と正面衝突するのは避けられなかった。

日本人にとって、他の宗教を許容しない戦闘的な布教活動は驚くべきことであった。未知の世界に乗り出したイベリア半島の両国は、数百年にわたってイスラム支配と戦い続けたカトリックの最強勢力であり、その中でもイエズス会士は教皇に身命を捧げ、使命感に燃え、命をかけて渡来してきた。ザビエル自身初対面の僧侶たちを邪教の徒として罵倒し、仏教や神道は悪魔の宗教と決めつけた。キリスト教の教えは偶像や世俗皇帝への礼拝を拒否し、それらを伴う各地の共同体的儀礼への参加を拒否して反感を招いた。のみならず、ヴィレラは平戸で信徒らとともに仏教寺院を襲い、経文や仏具などを焼き捨て、高山右近や小西行長らキリシタン大名は、領内の寺院を片っ端から破壊した。カトリック教を唯一正しい信仰と信じた宣教師や日本人信徒らのそうした姿勢は全くの独善と映り、旧秩序に

とって迷惑この上ない存在となった。戦乱の時代を生きる希望のない庶民がキリストの教えに救いを求めたのは当然であったし、大名や知識人の間にまで急速に広まっていった裏には、カトリック伝道の背景に存在した貿易の利と学術・文化の新知識への憧憬があった。

しかし、戦国大名が割拠した時代が収束し、統一国家が誕生しようとするとき、まだひ弱なその権威を否定する存在と衝突するのは不可避であった。豊臣秀吉は「伴天連追放令」を発するにあたって、「キリスト教はなぜ仏教のように寺院に留まって説教するのではなく、激しく動き回って人々に改宗を迫るのか。なぜ神道や仏教を貶めて神社仏閣を破壊するのか」と問うた。キリスト教の予想外の勢いを怖れた秀吉や家康が、禁教令を発して押しとどめようとするほどキリシタンは結束し、教えのためなら死をも恐れず、迫害に対しては殉教を栄光とみなして嬉々として死んで行った。武力や物理的な力で脅せば何でも強制できるはずの人々の、空恐ろしい反抗であった。その結果キリシタン禁止令を徹底させ、それでも宗教の侵入を止められないために貿易船の往来までも制限し、鎖国へと傾斜していったのであった。

遺された四半世紀に及ぶ鎖国体制 ここまで鎖国に至る経緯を見てきたのだが、西洋との人的交流・文化的交流を四半世紀にわたって遮断してしまった「鎖国」はどうしても避けることができないことだったのだろうか。答えはどこにも見出すことができない。

鎖国政策に踏み切ったのは、脆弱だった統一政権の維持を最重要課題とした日本側であるの間違いないが、アルマンド・マルティンス・ジャネイラ「南蛮文化渡来期：日本に与えたポルトガルの衝撃」（1971年刊・松尾多希子訳）は、当時のポルトガルとカトリック教会について、「書簡・勅書によって、半世紀以上ものあいだ日本の為政者たちが執拗に主張した貿易と布教の分離問題に対し、ポルトガル側は頑迷にも信仰の拡大の意図を繰り返すのみであった」（p8）とその誤りを指摘している。

攻める側の（と日本がみなした）ポルトガルにはフロイス、ヴァリニャーノ、ロドリゲスをはじめ、世界の情勢に通じ、日本への深い知識と洞察をもった人たちが大勢いたのだが、それでもなお日本側の怖れを理解できなかったのだろうか。あるいは、あれほどまで性急に日本全国をキリスト教に染めていく必要があったのかどうか、などといふ考えて見たい。他方、日本側はキリシタンの最後の一人まで根絶するほど恐れ迫害する必要があるのか。現代から振り返ってみれば、この時期にはすでに宗教は俗界の権力に従うようになっており、政治を超えるものではなくなっていた。他のアジア諸国の例を見ても、徳川政権ほど極端にキリスト教を排除しなくても、さして大ごとにはならなかつたらうとも考えられる。

それに、鎖国という政策に踏み切ったのは幕府ではあったが、その裏には貿易独占を計ってさまざまに策動したオランダの動きも見逃せない。永積昭は「東インド会社」（学術文庫）の中で、オランダは鎖国によって貿易上圧倒的優位に立ったことにも満足せず、中国船をも日本貿易から追い落とそうと策略を巡らし（成功しなかったが）、イギリス、タイ、カンボジャなどが何度も日本との交易復活しようとした試みを、その都度妨害してついに

断念させていることなどを挙げ、「日本が鎖国政策を定めた段階までは江戸幕府にほぼ全責任があるが、いったん成り立ったこの状態を2世紀以上もの間かたくなに守ったのは、むしろオランダ人の策動によるものである」と言い切っている。p 134。

もしも鎖国がなかったら 中世後期から近世の初期、つまりキリシタンの世紀についての研究者である岡田章雄は「キリシタン大名」(教育社)の中で、第二次世界大戦直後に外国人宣教師が激増し、物質的にも精神的にも不安定だった一時期、多数の信者を獲得することに成功したものの、高度成長期時代になると宣教師たちの敗北が始まり、信者の多くが教会を去って行った例を挙げて、仮に幕府の弾圧がなかったとしてもカトリックの信仰が日本全土を蔽ったかどうか疑わしいと言っている。さらに著作集Ⅲ「日欧交渉と南蛮貿易」の小論『もしも鎖国がなかったならば』の中で、観念の遊びだが、とことわって次のように書いている。少し長いが引用する。

…もしも鎖国の政策が行われなかったとしたならば、おそらく徳川幕府の政権はもっと早く、せいぜい5代か6代ごろに崩れ去っていたに違いない。これこそ当局者が何よりも心配していたことで、その惧れがあったからこそあれほど嚴重に鎖国の政策を強行したわけである。もともと自然経済を基礎として成り立っていた封建社会が、外国貿易によって、まるで山から転がり落ちる雪の塊りのようにぐんぐん肥っていく商業資本の力を抑えつける手段は、ほかにはなかった。鎖国とはいえ、実は強力な外国貿易の統制なのだが、そうした道をもしえらばなかったら、巨大な富を積み上げた商業資本の手で、幕府の政権は容易に崩され、封建社会の機構はもろく解体されてしまったに違いない。

岡田はこのあと、鎖国をしなかった日本のその後についてさまざまな興味深い思いを巡らし、これはひとつの夢、悪夢であると言っている。そして、和辻哲郎が第二次世界大戦後に書いた「鎖国—日本の悲劇」に言及し、「鎖国は日本の悲劇であった」とすれば、これは《もしも鎖国がなかったならば》、そこにもまた別の異なる悲劇があったという仮定であると結んでいる。貿易統制が政権維持に必要であったという見解は、それが鎖国の目的であったというより、結果論を考えた議論のように思われる。鎖国の功罪については、江戸時代のインバウンドの章でもう一度触れることとしたい。

いずれにしても、ポルトガル・スペインとの接触は、世界に目を開く機会を与えてくれたと同時に、鎖国に追い込まれたことによって深い傷跡をも残していったのであった。

南蛮貿易

岩生成一「鎖国」には、相手国別の日本の輸出入品目のリストが掲載されている。主要なものはその量の推計も出ている。日本に輸入された品々のうち数量・価格の大なるものは、生糸・絹織物・綿織物・毛織物・鹿皮・鮫皮・錫・鉛・砂糖・種々の香木などとなっている。これら量の多いものは、戦国の争乱から次第に近世的封建国家が誕生して行く社

会が要求し、その獲得を海外に求めた物資が基調になっている。それらが国内においてどういふ方面に需要があり、どのように消費されていったかなどは大変興味深いが、そうした分析は専門書を見て頂くとして、むしろこういうもののほかに、限られた数量ながら、武家社会の上層部の貴族的欲求を満たす珍しい南蛮の多種多様な生活の具が輸入されていること、また、宣教師らが自身の使用や日本の上層階層への贈物として持ち込んだ品々がこれまた多数あり、日本人の生活文化に様々な影響をもたらした。

以下、貿易商品としてではなく、モノを含めた南蛮人との交流による文化的影響について概要を見てみよう。

学術・技術

ルネサンスを経て宗教改革の新旧宗教闘争を戦い、人文主義の開花によって文芸や科学技術を発展させた西欧文化が宣教師や南蛮貿易によってもたらされ、日本人は大きな刺激を受け、これを吸収した。カトリック教については、その攻撃的な布教が為政者たちを不安に陥れ、恐怖感から締め出すことになったが、西洋がもたらした科学技術や文化は大いに求められ、好まれた。残念ながらこの時期に到来した西洋文化は、鎖国によって遮断され、発展することはなく失われ、鎖国以後はわずかに長崎出島に開いたプロテスタント国オランダという小さな窓からもたらされるものだけとなった。以下、宗教以外に南蛮人によってもたらされたものを概観しておきたい。

銃砲と火薬 種子島に鉄砲がもたらされたことが最初の接触であったのは象徴的である。鉄砲の威力に驚いた種子島時堯が大金を投じて火縄銃を購入して製造法を学び取ったことは先述した。「鉄炮記」によれば、鉄砲の製造や操作は種子島を訪れた紀州根来寺の杉の坊や泉州堺の橘屋又三郎などが持ち帰って研究し、やがて各地で製作されるようになった。戦国の世であったからたちまち普及し、戦争の在り方を根本的に変えてしまったばかりでなく、間もなく日本は50万丁の鉄砲を所有する世界最大の鉄砲国となり、過信した信長、秀吉に、大陸への侵攻を本気で考えさせる元となった。ただし、この時伝わったのは火縄銃で、ザビエルが大内義隆に献上した贈物の中に発火装置にフリント（燧石）をつかった新型銃（燧石銃）もあったのだが、当時はまだ高価で有用にはならず、改良された燧石銃を日本は幕末まで知らなかった。

来訪するポルトガル船は大砲も積んでいたから、やがて大砲の鑄造も習得し、ルイス・フロイスの報告によれば、信長はすでに大砲を使用していた。大阪の冬・夏の陣では家康の大砲が豊臣方の息の根を止めたとされているし、島原の乱でも大砲が城攻めに用いられた。鉄砲が作られるようになると、火薬と銃弾の製造に必要な硝石や鉛が日本に産出しないから、これらが主要輸入品の一つにもなった（宇田川武久「鉄砲伝来」p 59）。

しかし、徳川幕府のもとで平和が維持され、鎖国以降その必要性が軽減されたとはいえ、いったんこれだけ広まった鉄砲という強力な武器を日本人は封印した。いったん手にした高度の武器を捨てるという選択は、別の意味で高く評価する向きもある。世界に類のない

この展開をノエル・ペインは「鉄砲を捨てた日本人」（川勝平太訳・中公文庫）として核軍縮の時代に世に問うたのであった。

天文学と地理学 日本人が驚いたのは鉄砲だけではむろんなかった。そもそもポルトガルやスペインの艦隊がアジアまでやってきた大航海時代とは、天文学や地理学の追究によってはるかなる海洋を渡海し、自然の猛威を克服してきた結果にほかならない。ヨーロッパ人に接するまでの日本人の世界や宇宙に関する知識・関心は乏しかった。宇宙については中国の蓋天説あるいは須弥山説といわれる説があったが、これらは天文学というより、暦計算のための天体観測に過ぎず、国家や支配者の運命を占うための学問であった。

世界地理についての日本人の理解は、世界とは本朝（日本）と唐と天竺の3国によって成り立っているに過ぎなかった。『天正遣欧使節』（デ・サンデ編著、泉井久之助他訳）の冒頭部分におかれた「日本使節派遣の目的」の中で、千々石ミゲルは概要下のように述べている。ちなみに同書は、ヴァリニャーノの依頼でドゥアルテ・デ・サンデが少年使節らの見聞体験してきたことをまとめたもので、有馬に帰国した千々石ミゲルら4人が、ミゲルの2人の従兄弟たちとの質疑応答の形をとった対話録という形にまとめられている。「図説日本の歴史⑩キリシタン世紀」の関連部分の要約を借用する。

…われわれ日本人は、たとえていえば、まったくよその世界ともいうべきヨーロッパからもっとも遠く離れたこの島々に住んでいて、これら《遠国》の人々とは交易や事物の交換ははなはだ少なかった。このため、今までわれわれは日本のほかにシナやシャムなど近隣の国々のことしか知らなかった。われわれはこのたび、はじめてその国々に行ってみて、たとえていえば、打ち開かれる目をもって、しかもその目からはあたかも闇が吹き散らされたかのような有様で、実際にものを見て、世界にはさらに多数の国々があり、その大をもって世に知られた州も、さらに多く世界に散在し、その数はほとんど無限であり、したがって、日本・シナ・シャムの三つの地域のごときは全世界のきわめて微細な一部分にすぎないことを知った…。

教会はまだ地動説を認めていなかったから、イエズス会の説く天文学は天動説によるものではあったが、すでにコペルニクス（1473～1543）は地動説を唱えていた。ザビエルは日本人から天体の運行や日月の蝕、潮の満ち引き、雷や地震などの天体の動きや気象現象について問われることが多く、日本人が知性を重んじる国民であることを知り、日本に派遣する宣教師には学識豊かな人材を送るよう指示している。例えば、ペドロ・ゴメスがコレジオの日本人神学生のために編纂した「天球論」という書物があるが、第1部で天体の本性、天体の運行、日・月・年の周期、日蝕・月蝕等について章を分けて詳しく説明し、第2部では地・水・火・風の4要素を扱い、風や雨、雲や雪、泉、潮の干満、地震の原因など、主に気象学を扱っていた。実際、仏僧や日本の学者らとの対話・論戦で、日蝕・月蝕や気象関連の説明が問われると、宣教師が科学的理論に基づいて説明するのに対し、仏僧らの説明は非論理的で赤面させられることが多かったと記録されている。こうしたこと

は、日本の知識階級がキリスト教に改宗する大きな理由の一つとなったであろう。

地図と測量術 地球儀や世界地図、航海図なども持ち込まれ、彼我の知識の差が歴然となった。測量に基づいた地図の作製はまったくの新知識で、日本人に大きな影響を与えた。当時の航海図はポルトラーノ図と呼ばれ、コンパス（羅針盤）による方位線が蜘蛛の巣のように交差して航海の目的地を示すもので、比例による縮尺で描かれ、安全運航のために不可欠のもとなっていた。日本の朱印船にも採り入れられたが、羅針盤などとともにポルトガルのものをそのまま使用した。

ヨーロッパ最先端のポルトガルの造船術や航海術も影響をもたらしたが、日本は中国のジャンク船の技術を採用していたから、短期間に大きな影響を及ぼすにはいたらなかった。それでも 1618 年には池田好運による「元和航海記」が出され、太陽と南十字星の高度の測定法、大熊座による時間の計測法を説明し、羅針盤、象限儀、観測儀の使用などについて解説しているし、1930 年には深田正室による世界地図も作成されている。

また、造船については、ウィリアム・アダムズ（三浦按針）が家康の命をうけて伊東で西洋式帆船を建造した例や、ビスカイノの指導で仙台月の浦港でつくられた支倉常長の乗船サン・バプティスタ号が有名だが、帆船の操作は習得が難しく、乗組員は西洋人に頼まなくてはならなかった。時間をかければ習得し得たであろうが、徳川幕府が鎖国によって日本人の海外渡航を禁止し、外洋船の建造を不可能にしてしまったから、造船も航海術も、それらの元になる数学や測量術も、進むどころか忘却の彼方に捨て去られてしまったのであった。

医学と薬学 医学についても宣教師の影響は大きかった。イエズス会のアルメイダが豊後大分に慈善病院を建設し、病気治療が布教の大きな力となったことは既に述べた。東野利夫「南蛮医アルメイダ」の第 12 章『医療者たち』は、当時のポルトガル人医師とともに、日本人信徒の医師たちの姿も紹介している。

イエズス会本部の方針でアルメイダらは病院から手を引いたが、その後入ってきたスペイン系のフランシスコ会は各地に病院や療病院を建設して南蛮医学を広めている。日本には外科的知識が乏しかったから、とくに砲弾・銃弾による銃創の外科治療や接骨術などを彼らから学んでいる。ルイス・フロイスに「日欧文化比較」という著書があり、1～14 章にわたって日欧比較をしているが、その第 9 章は『病気、医者および薬について』と題し、14 の小項目で両者を対比している。これによると、ヨーロッパ医術の移入によって、瀉血や刺絡・縫合・焼灼・浣腸・検尿、それにガーゼの使用などが紹介されたと考えられている。医療の技術だけでなく、病人に対する処置や栄養の考え方、療病患者を隔離することなど、得るところが多かったと思われる。薬草については古来中国の医学・本草学などが採り入れられて研究が進んでいたが、ポルトガルやスペインからいろいろな新しい薬草もたらされている。

その他の学術・技術 そのほかの学術・技術としては、採鉱・冶金・土木関連の技術、印

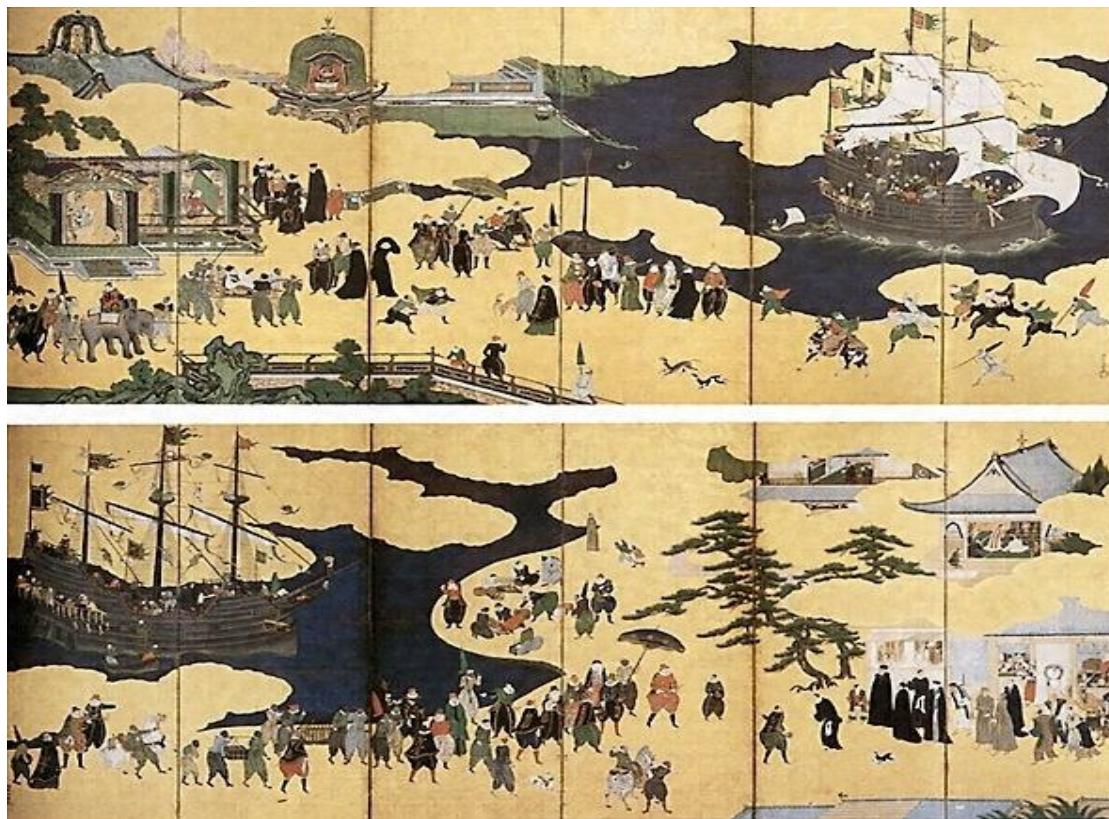
刷術の伝来とイエズス会による印刷出版が注目される。

銀の精錬のためのアマルガム法が一時佐渡の銀山に導入されたが、日本ではこれに必要な水銀を産出しなかったから、水銀を輸入することになった。土木・建築の技術についてもヨーロッパの影響を受けた可能性はあるが、具体的な資料に乏しく詳しくはわからない。

少年遣欧使節が持ち帰った活字印刷機は、帰国途中のゴアで原マルチノのラテン語の演説の印刷に使われ、マカオでは前述のドゥアルテ・デ・サンデ編纂になるラテン語の「天正遣欧使節」が印刷され、日本では加津佐のコレジオに置かれて各種の印刷物に使用された。1591年この地での弾圧が厳しくなって天草に移され、さらに1600年以降は長崎に移されて1611年まで様々なものの印刷に使用されていた。イエズス会が日本で印刷したものに今日に残るものは27種に及び、その中には宗教書以外に「伊曾保物語（イソップ物語）」、「平家物語」「日葡辞典」などがある。

美術工芸と南蛮屏風

イエズス会宣教師らの来日以来、美術工芸品についても、ヨーロッパの影響を受けて、いわゆる南蛮美術と呼ばれる工芸美術品が誕生した。南蛮美術は安土桃山時代の美術の中



南蛮人渡来図屏風 左双（上）異国を出航する南蛮船、右双（下）日本で荷揚げする南蛮船

で大きな特色のある流れであったと推定されるが、母体となったキリスト教が禁止されたためにほとんどが姿を消し、日本美術への影響はわずかなものとどまっている。そうした中で異彩を放つのが南蛮屏風と呼ばれる西欧を描いた屏風である。

南蛮屏風は〈南蛮人渡来図屏風〉〈黒船屏風〉とも呼ばれ、今日まで約 60 双ほど残存している。これらは南蛮人の当時の風俗を示すもので、興味深い資料となっている。筆者ではっきりわかっているのは狩野内膳ひとりだけで、仕入絵として多量生産されたと推定されている。残存する屏風を主題別に分類すると、①左双にポルトガル船の入港・荷揚げ、右双に外国商人の日本市街での行進を描いたもの、②左双に外国港におけるポルトガル船の出港、右双に日本港への入港・荷揚げ・行列を描いたもの、③左双に外国人の舞踊・競馬などの遊樂、右双に日本港への入港・荷揚・行列を描いたもの、の 3 種があった。いずれも日本の港で行われる行動や事件を一定の構図内に表現するもので、表現方法や材質はすべて日本流で、西洋画の影響はほとんど受けていない。

衣生活・服装

南蛮屏風に描かれたポルトガル人の風俗は、日本人の観察の結果とそのイメージが表現されている。南蛮人の風俗といっても、聖職者と聖職者以外の商人や船員などの俗人とは当然異なっている。聖職者の場合は宗派により、位階によって色や種類が決められており、一目でわかる。これに対し、一般人の服装は人々を大いに喜ばせ、一時はそれを着ること日本人の間で流行した。1590 年頃、京都ではポルトガル風の衣服や服飾品を持っていないければ人と思われぬほどに流行し、大名たちはカッパやマンチーリア（頭巾）、カミーザ・ダワノ（肌着の一種）、短いカルサ（ズボン的一种）、シャポウ（無縁帽子）などを身につけていたといい、のちに秀吉が名護屋から京都に戻ってきたときには、諸大名や家臣たちがポルトガル人の服装をして随行した。そのため、長崎の裁縫師は大人気で皆忙しく、京都にまでついできた。彼ら（日本人）の間では、琥珀玉とか金の鎖、ボタンなどが流行しているとフロイスが書いている。とくに武将の間では、ポルトガル風のつばの広い帽子とカッパが喜んで用いられた。帽子は南蛮帽子・南蛮笠・南蛮頭巾などとよばれ、信長は南蛮黒笠をかぶっていた。

毛織物と合羽 毛織物はポルトガルとの貿易で初めて日本にもたらされた衣料である。中国では羊毛は主として敷物に使われ、紡績の技術があまり発達しなかったからである。毛織物はポルトガル語をそのまま使ってラシャ（羅紗）という語が使われた。高級品であって一般の衣料に使われたのではなく、厚手で防水性に富んでいたため、武士の間で合羽や陣羽織などの外衣や甲冑の部分、馬衣、鞍蔽い、鉄砲袋などに用いられ、需要が多かった。とくに黒色と緋色のものが猩々・猩々緋と呼ばれて戦勝・武運の縁起が良いとして好まれた。

カッパは漢字で合羽と書いて日本語に採り入れられた。元は毛織物製の貴重品だったが、江戸時代に日本化してからは雨合羽、道中合羽のように、一般庶民にも広く使われるようになった。

カルサン・ジュバン・ボタン 南蛮屏風に描かれているポルトガル人は、多くが足首のと

ころをくくった緩やかなズボンを穿いている。これはポルトガル人の風俗ではなく、東洋の植民地の風俗を採り入れて用いたものだが、これが日本の服装に影響を与えてつくられたものがモンペの一種であるカルサン（軽衫）で、ポルトガルでは半ズボンの意味である。ジュバンはポルトガル語で肌着の意味。ボタンもポルトガル語に由来している。のちにボタンに代わるものとしてコハゼ（鞋）が案出され、これをボタンと呼んでいたという。ほかにポルトガル語由来のものとして、ビロード、カナキン、サラサなどがある。 p 187

食生活・食品

ポルトガル人との接触によってヨーロッパ風の料理も伝わり、南蛮料理と呼ばれた。食事の仕方食べ物も日本人とは大きく違ったから、当時は物めずらしく、彼らの風俗に驚いた様子がうかがえる。例えば、サンデの「天正遣欧使節記」に紹介されているポルトガル人の食事に関する日本人の観察が次のように書かれている。

商用で日本に来るポルトガル人たちは、その食卓で清潔を守っているようには見えない。われわれとしてはとても食べられたものではないのに、手当たり次第に牛肉であれ豚肉であれ、肉類をやたらに食べるばかりか、箸も使わずいきなり手掴みに取り扱って、なんとも醜いばかりか、そのほかにも、この種のことを常に行なって意に介さず、われわれの習慣からはとてもやりきれないことをする。

この頃ヨーロッパではまだフォークは普及しておらず、手掴みで食べるのが普通だった。その点は宣教師たちも、日本の子供らが箸を用いて食べるのに感心している。

肉料理 食習慣の違いでは嫌悪を覚えることがあったようだが、ポルトガル人の影響を受けて、牛肉や馬肉を食べることが流行し始めている。仏教では肉食を固く禁じていたが、宣教師たちは、肉食は罪ではないとして信徒たちに肉料理を振る舞ったから、やがて肉食の風は九州から京都にまで広がっていった。

肉以外の料理・食品 肉食以外にも南蛮料理が採り入れられ、後世に残ったものに、長崎料理のヒカド、京阪地方のヒリョウズ、テンプラなどがある。パンもポルトガルの由来だし、保存食として砂糖漬け、蜂蜜漬け、酢漬けの果物、トウガラシ、生姜などは南蛮漬物と呼ばれ、大名への贈物として喜ばれた。また、南蛮菓子としてハルテ、コンペイトウ、ボーロ、カルメラ、カステラなどがある。

ヨーロッパの葡萄酒はポルトガル人によって初めて紹介された。ミサに欠かせない貴重品であり、日本にも野生の葡萄はあったから、日本で生産することを考えた宣教師もいたが、実現はしなかった。葡萄酒は珍重され、信長、秀吉、家康へも贈物として届けられている。

その他の生活文化

日本とほとんど、あるいはまったく共通性のない生活様式をもつ宣教師ら西欧人が数多

く日本に滞在し、彼ら自身の生活維持のために多様な物品を輸入させて使用、あるいは贈物として要人に提供したことで、さまざまな形で日本人の生活文化に影響を及ぼしたのは当然であった。鎖国によってそれらは遮断され、宗教に関係するものは破壊され、それ以外のものも忘れ去られていったが、その痕跡は随所に残っている。

ガラスとガラス製品 ガラスはポルトガル語の *vidro* をビイドロと読んで珍重した。ガラスの製造技術は伝わらなかったが、ガラスを使った製品はコップ、フラスコ（小瓶）などの様々なガラス器、メッキした鏡、眼鏡などが紹介され、要人への贈物として使われた。

ガラス製品でも瓶やコップなら日本にも陶製のものがあったし、鏡は金属製のものがあったが、眼鏡や望遠鏡は全く知らなかったから、人々を驚嘆させた。カブラルが信長を岐阜の城に訪ねた時眼鏡をかけていたところ、目玉が四つある怪人が現れたという風評が広まって、宿舎前に群衆が群がったという逸話をフロイスが伝えている。ガラス製品は日本で売れ行きのよい商品とされていた。ちなみに、サンデ「天正遣欧使節記」には、ヴェネチアを訪れてガラス工場を見学したときの千々石ミゲルの感想が書かれていて、日本には入

っていなかった建物の窓に使われる板ガラスを見て大いに感心し、ガラスの生産技術を詳しく説明している。

←家康に贈られた機械時計



機械時計と不定時法 日本にもたらされた最初の機械時計は、1551年にザビエルが大友宗麟に献じたものとされるが、現物は残っていない。フロイスが信長に目覚時計を献上しようとしたとき、信長は感銘を受けながら、自分が手元に置いても維持ができないと断って受け取らなかったことは既に述べた。少年遣欧使節団が帰国して秀吉に面

会したとき、ヨーロッパ土産に機械時計が含まれていたとされているが、これも伝わっていない。今日日本に残る最古の機械時計は、1609年、フィリピン総督だったドン・ロドリゴが帰任途中に千葉県沖で難破した際、家康が三浦安針の新造船を提供して帰国させたことへの謝礼として、1612年にスペイン王から家康に贈られた置時計（1581年スペイン製）で、現在静岡県久能山の東照宮に宝物として保存されている。

機械時計はヨーロッパ中世の修道院で1300年頃に発明されたらしい。昼も夜も一定の時間に神に祈りを捧げるために、祈りの正確な時刻を知る必要があったのが発明の理由とされる。時間が来れば自動的にチンチン鐘が鳴る機械時計があれば、時間を気にしなくて済む。だから機械時計には出現当初から必ず鐘がついており、鐘（clock）が機械時計の名前にもなった。かくして発明された機械時計は1日を24時間に等分するもので、これを定時法と叫んだ。それまではヨーロッパでも1日を昼と夜にわけ、それぞれを12等分して時を測っていた。日没から日の出までと日の出から日没までをそれぞれ12時間に分けるから、春分秋分の日以外は昼と夜で1時間の長さが異なり、極端に言えば毎日違う《不定時法》

によっていた。それゆえ、機械時計は単なる技術革命ではなく、新しい時間概念を創出した画期的な発明であった。

機械時計の日本伝来に関連して興味深いのは、この頃朝鮮使節が家康に献上した機械時計（内容不詳）が故障したとき、家康が京都中に触れを出して、この時計を修理できるものはいないかと呼びかけたところ、鍛冶士の津田助左衛門がこれに応じて修理に当たった。津田は時計を修理しただけでなく、同じものを新作して献上した。津田はのちに尾張徳川家に仕えることになり、この逸話は1832年（天保3年）の『尾張誌』に記載されている。このことは、日本がすでに機械時計をただちに模倣するにたる既存の技術と技術者を持っていたことを示すものだが、不定時法の社会に定時法の時計は役に立たなかったから、ヨーロッパの機械時計が輸入されることはなかった。しかし、鎖国の江戸時代にこの技術をもとに改良を加え、昼用と夜用の二挺テンプをつけた複雑な機構を作り出し、美術工芸的にも優れた和時計を作るようになった。

明治5年に日本でも定時法が採用されたため、和時計の実用性がなくなってほとんど廃棄されたが、和時計の存在を知った明治の外国人たちは驚嘆し、彼らが持ち帰ったものが各地の博物館に保存されている。近代化以後の日本人の技術的対応力はこの時期からすでに発揮されていたのであった（角山栄「時計の社会史」・澤田平「和時計」より）

その他の南蛮文化 ほかに、椅子やベッドや敷物なども持ち込まれているし、西洋馬や馬具・馬術、南蛮犬なども珍しがられた。

8. 南蛮人の見た日本

宣教師らは日本を発見し、多くの記録を残し、日本を世界に紹介してくれた。マルコ・ポーロによってミステリアスな黄金の国（コロンブスはジパングを目指したのだった）と紹介された日本は、ついに宣教師や商人たちの生々しい実体験によるその実像がはじめてヨーロッパに伝えられた。16世紀の半ばになって、ヨーロッパ人の歴史観が宗教から離れて世俗化し、世界史を教会に抑制されずに考察する風潮が高まりつつあったときに、突如として異様に高度な「日本」という文化圏がヨーロッパ人の前に出現した。

ポルトガル人を宗教とともに受け入れたのは中国より日本のほうが半世紀早く、西欧人は大陸極東の行き着いた果てに、異質の先進国を発見して大いに驚くことになる。イエズス会の宣教師や修道士らは日本語を学び、日本を観察し、書簡や正式の年次報告において彼らが観察した記録を残してくれており、それらがヨーロッパで読まれ、様々に研究され紹介されているので、文献から当時伝えられた日本像を拾ってみよう。

異文化の先進国：全体的評価

西欧から日本にやってきた宣教師や商人たちに、日本と日本人はどのように見えたのか。

ザビエルやトーレスら初期の宣教師たちは、日本は文化こそ異なるがその文化程度は自分たちと同等と認め、地球の果ての日本に、ヨーロッパ人とは全く異質の文化圏があり、その文化が自分たちと同じように高度であることを見出して、感動し、あるいは狼狽したにちがいない。来日まもなくカブルによって京都担当に任じられたオルガンチーノは、京都や上方の日本人と交際を重ねるうちに、いよいよ日本人に魅せられ、海外への通信のなかで次のように書いた。「われら（ヨーロッパ人）は賢明に見えるが、彼ら（日本人）と比較すると、はなはだ野蛮であると思う。私は真実、毎日、日本人から教えられることを白状する。私には世界中でこれほど天賦の才能をもつ国民はないと思われる。」と書き、また「^{みやこ}都こそは日本におけるローマに当たり、科学、見識、文明はさらに高尚である。信仰のことはともかく、われら（ヨーロッパ人）は彼ら（日本人）より顕著に劣っている」とまで言っている（松田毅・E. ヨリッセン「フロイスの日本覚書」より）。

また、宣教師でなく、17世紀はじめに初来日したスペインの前フィリピン臨時総督ドン・ロドリゴ・デ・ヴィヴェロも「日本の政治は、私が知る限り、世界で最も優れており、彼らが^{デウス}神を知らないにもかかわらず、まことに完全に数多くの法律を有することは…心にくい」と書いている。

この時代、ヨーロッパは中世のカトリック支配による精神の束縛や生活文化の貧弱さからようやく開放されたばかりで、日本や中国に出会うことによって眼のあたりにしたのは、人々の豊かな暮らし、芸術の香りに満ちた文化であった。中国の絹、陶磁器、茶、日本の金銀、茶の湯文化、漆器、インドの染付されたサラサなどは、これらに接したヨーロッパ人にとって大きな驚きであり、カルチャーショックであった。日本側はそれまでの本朝（日本）・唐・天竺の3国世界観をあっけなく放棄させられたが、ヨーロッパ人もまた、日本人と出会うことによって、それまでアフリカ、アジア、アメリカを体験してきても変えることのなかった人種観や世界観を変えざるを得なかったのである。

この時代に日本にやってきた西欧人によって日本と日本人に関するおびただしい記録が作られ、今に残されている。日本人の中に西欧人を尊敬する者も嫌悪する者もあったように、日本人に対する彼らの好悪もまたはなはだしい。ザビエルやオルガンチーノのように絶大な好意を抱いてくれた人がいる一方、嫌悪し侮蔑する宣教師も少なくなかった。ヴァリニャーノは日本を文明国と認め、少年をヨーロッパに送って学ばせたほど日本に好意的であったが、晩年は幕府のキリスト教拒否にあつて、最後には不可解な日本に愛想をつかす発言もしている。

A.M.ジャネイラ「南蛮文化渡来記：日本に与えたポルトガルの影響」は、そうした数ある日本紹介の中で、「日本史」のフロイス、「日本諸事要録」と「同補遺」を残したヴァリニャーノ（「日本巡察記」としてまとめられている）と「日本教会史」を書いたジュアン・ロドリグスの3人は、日本語によく通じ、日本紹介の大作を残した点で擢んで評している。

ザビエルの見た日本 イエズス会によって派遣されたフランシスコ・ザビエルは、インド

や東南アジアの原住民に対するそれまでの布教活動の経験を踏まえ、日本の国情や国民性をアンジローとアルヴァレスを通じて知って、日本への布教が実り多いものと確信したという。日本がポルトガルの政治的、軍事的支配を受けておらず、植民地として毒されていないこと、またイスラム勢力が及んでいないことも、布教にプラスであることを確信させた。事実、鹿児島到着直後の手紙で、日本人について、「この国民は、これまでに私が会った国民の中でもっとも傑出している。日本人は相対的に良い素質を備え、悪意がなく、交わってすこぶる感じが良い」と述べている。

ザビエルのこうした考えはイエズス会の布教方針に生かされた。全世界へのカトリック布教を使命としたイエズス会は、非キリスト教諸民族を文化の水準によって3つのカテゴリーに分け、日本は中国などと並んで最上位に属する国とされた。2代目のトーレスもザビエルの方針に従い、日本での布教の方策を次のように定めている。第一は、日本および日本人に適応したやり方をとること、すなわち、異教文化であっても評価すべきは評価し、宗旨の根幹に触れるものでない限り、極力現地の文物に適応して無用の摩擦を避けることを基本方針とする。ただし、在来宗教（とくに仏教）は《敵》であり、徹底的に攻撃の手を緩めなかった。第二は、封建領主から布教の許可を得て、家臣と領民に対する自由な宣教を確保すること、第三は、ポルトガル商船による貿易を活用すること、であった。

フロイスの「日欧文化比較」 フロイスは冷静な観察者であった。フロイスが大著「日本史」や「年報」とは別に、日本とヨーロッパの風習を対比した「日欧文化比較」ともいうべき小冊子がある。1585年6月14日に加津佐で書かれたものと記されており、フロイスがこれをまとめた意図は「(ヨーロッパと日本の) 人々のあいだにこれほど極端な対照が存在しうるとは、ほとんど信じる気持ちになれないほどである。ここで私は、彼我の間のもろもろの事柄が混乱を見ぬよう、それらを数章に分けて列挙するものである」と書かれているだけで、誰のため・何のために書かれたものかは不明である。しかし、イエズス会の布教方針が「郷に入れば郷に従え」であり、両者の差異の大きさは、その実践が極めて辛く厳しいものであったことを窺わせる。

同書は、日本とポルトガル人ないし西欧人との違いを14章にわけ、合計611項目にわたって書き記したものである。内容は、男女の風采と衣服、児童・育児、食事と飲酒、武器、馬、病気・医者・薬、家屋・建築・庭園、船と道具、演劇・舞踏・歌謡・楽器などなどであり、細かい観察によって16世紀末頃の西洋と日本の生活習慣の違いが対照されていて記録として面白い。松田毅一・ヨリッセン「フロイスの日本覚書」(中公新書)、岡田章雄訳註「ヨーロッパ文化と日本文化」(岩波文庫)など、入手しやすい紹介図書があるので詳細はそちらに譲り、フロイスの同書およびフロイス以外の日本文化評、岡田章雄「キリシタンの世紀」、ジャネイラ「南蛮文化渡来記」などの文献から、ここでは日本を高く評価している事柄を概観してみよう。

日本がヨーロッパ文化に与えた影響

西欧人にとって異質で耐え難い日本の風習が多かったのだが、宣教師たちは日本人を導くことを仕事とした。ゆえに広く深く日本人と接し、日常までも共にしてきたから、欠点ばかりではなく、日本および日本人の中に、彼らが高く、あるいは好意的に評価したものもたくさんあった。

清潔と秩序ただしさ 宣教師たちが日本の生活に入り込んでみて、もっとも心を打たれたのは、清潔さと秩序正しさであった。大名や豪商の居館・住宅を訪れた宣教師たちは、その建築・調度の美しさ、行き届いた清掃、生活様式の中の優れた秩序に大いに感心した。彼らが悪魔の殿堂とみなした寺社、悪魔への奉仕者と非難した僧侶たちの生活に対してさえ、宗教的感情を超えて感服しないわけにはいかなかった。日本人が入浴を好み、浴室や公衆浴場の設備が行き届いていること、履物を脱いで家の中に入り、箸でものを食べ、もっとも不潔になりがちな便所や厩舎が極めて清潔に保たれていることなど、衣食住すべての面にわたって日本人が極度に清潔を重んずることは、到底ヨーロッパ人の及ぶところではないと彼らは考えていた。宣教師たちは、日本の上層社会と接触することでそのことに気づき、自ら身边を清潔に保ち、侮りを受けないように心掛けるようになっていた。

児童と育児 宣教師たちは日本人が礼儀正しく、思慮深く、自制心に富み、きわめて忍耐強いことをヨーロッパ人に勝る長所としてあげ、こうした特性が幼少時から培われていることに注目した。上記フロイスの「日欧文化比較」の児童・育児の項目を見ると、「日本では、生まれた子供に産着を着せるが、その場合、両手はいつも自由になっている。ヨーロッパでは長いあいだむつきで手を包んでおくので、手は拘束されている。日本には揺籃もなく歩行を習わせるための車もなく、ただ自然に育てている。

ヨーロッパでは4歳の子供でも一人で食事ができないのに、日本の子供たちは早くから箸を使うことを覚え、3歳になればひとりで食事をする。また、ヨーロッパでは鞭を用いて子供に懲罰を加えるが、日本では言葉で戒め、6～7歳の子供に対しても、6～70歳の人に対するかのように、真面目に話して譴責する。日本の子供たちは、ヨーロッパのように美衣・美食によって育てられることがなく、ほとんどを半裸で、寵愛も受けず、快樂も与えられずに養育される。しかし、子供でもその行状に分別と優雅を完全に備えている点はヨーロッパをはるかに凌ぎ、十歳ですでに使者としての役目を果たす判断と思慮を身につけている…」などと続いている。

フロイスはかくのごとく日本人の育児法が、ヨーロッパの育児法に比べて、子供の成長のうえではるかに効果的であることを賞賛しているのである。

茶の湯 日本文化の中で宣教師らがかもっとも感嘆し、重要視したのは茶の湯の儀礼であった。当時堺で生まれた新しい数寄^{すき}の儀礼が全国的に流行した時代で、茶の湯は自然との調和の中に、簡素と清潔と秩序とを追及した日本文化の粋ともいべきものであった。ジョアン・ロドリゲスは名著「日本教会史」で来客を迎える日本の儀礼について非常に多くのページを割いているが、中でも第32章から35章までの4章にわたって茶の湯の儀礼につ

いて取り上げている。茶の湯の形式の紹介にとどまらず、岡田章雄の言葉を借りれば、「科学的にまた哲学的に、茶樹の植物学的研究から茶の医学的効能までを論じ、さらに深く茶の湯の精神を追究し、その中に日本の文化を究めようとした本格的な論文」である。岡田はそれを証するために、ロドリゲスの以下の言葉を引用している。

茶の湯の道は、外面的行動における礼法・作法・謙讓・自制を守り、また傲慢や不遜さを示さず、外面に謙虚さをあらわして、身心の安らぎと静けさを保つことを信条とする。また、栄耀栄華と外面的華麗と公的生活の豪華さを避けて、むしろ僻地の隠者に適したような、表裏のない簡素を本分とし、礼儀正しく清潔な衣類をつけ、その職に相応しい家とその職務に関するすべてにわたって、一定の規律と清浄さと淡泊さを旨とする。なぜなら、すべての人がこの芸道を本業とする人に注目していて、彼らは、民衆のあいだで立派な習慣を身につけた人としての声望を得ており、そのようなものとして尊ばれ、敬われているからである。

茶の湯は宣教師にとって、日本人と交わるための外交的儀礼として重要であったばかりでなく、それを通じて日本の精神に触れ、日本の文化を理解し、布教のために役立てることができたのであった。それゆえ、ヴァリニャーノは住院を建設する際の重要事項として、すべての住院に清潔で整備された茶室を設け、茶の湯について心得のある同宿なり誰かを常駐させ、訪問者の身分に相応しい接待を行なえるよう準備しておかなければならないと定めた。そのために必要なお茶の準備や道具の備えについてもこまかく指示しており、宣教師自身も必ず茶の湯の作法を身につけることを命じていた。

建築と庭園と日本美 フロイスもヴァリニャーノもロドリゲスも、日本のお城、大名・武士の屋敷、神社仏閣から庶民の家までよく見ていて、それぞれの書いた日本の歴史にこまごまと書き込んでいる。フロイスは、ヨーロッパの建築と日本のそれを比べて、一般論として威厳や頑強さにおいてヨーロッパが勝っているが、日本建築に見られる秩序と清潔さ、技巧について絶賛している。とくにその立役者である大工の技術に感嘆して次のように書いている。「日本の大工は仕事が極めて巧妙で、広大な邸宅を造る場合、必要に応じてばらに解体し、ある場所から他の場所に運搬することができる。そのためには、まず材木を全部細工し、その後3～4日でそれを組み合わせて立てるので、1年かかっても建ちそうもない家を何もなかったところに突如として建ててしまう」とプレハブ建築ともいうべき方法を開発していることに驚き、さらに「われわれのものとはほとんどあらゆる点で異なるすがすがしい壮大な庭園について、日本の美しい絵画について、美麗・豪壮な建築について、《部屋の豪華、細工の繊細、精緻、風変わりな木材、技巧など》の凄さ」を驚異の念を込めて語っている。

ロドリゲスも日本建築を称え、家屋の構造、装飾、広間の仕切り、様々な部屋の働きを細かく描写し、「木、川、泉、動物、島、湖、海、舟、人の姿や昔物語」を描いた内壁の絵についても細かく述べる。広間の部屋ごとに図柄を異にする絵が描かれ、貴人の屋敷では

装飾板や部屋の戸が金箔塗りの地になっていて、この金地のうえにそれぞれにふさわしい色とりどりの絵が描かれる。…装飾用として壁に沿って、あるいは壁のかわりに屏風を立てて広間を飾りつける。その屏風はどれも、金地にだれか有名な絵師が描いた飾り板6～8枚よりなっている…。」と感嘆の思いを語っている。

日本画と日本刀その他の日本美 日本の優れた美術・技芸として当時ヨーロッパに紹介されて世界の注目を惹いたものに、日本画・屏風・刀剣・漆器・和紙などがある。日本画の技法について、ロドリゲスは「彼らは自然の事物を描くのに、できるだけ優れた類似性をもって自然を模写することにおいてきわめて優秀である」といい、また、色絵・墨絵・泥の^{でい}絵画をあげ、とくに墨絵について「墨の絵具またはそれを水に混ぜたものを使うが、この絵はきわめて巧妙であり、優秀である。これが日本人生来の気質に合致しているために、これを大いに楽しむ」と書き、彼らはすばらしい技巧をもっている、それらは生き生きとしており、同じ墨色で、鳥類や樹木、その他の物の色そのものさえも表わしているかと思われるほどである、と賞賛している。

当時来日したヨーロッパ人は至る所で豪華な障壁画や襖絵・屏風絵を鑑賞することができた。室内調度品としても便利な屏風は盛んにヨーロッパに輸出され、ヨーロッパ人にとって新奇な日本画が注目を浴びることになった。

ロドリゲスは、日本の技術者の中でもっともすぐれているのは木造建築部門の者で、それに次ぐのが刀鍛冶であると言っている。刀剣も日本の優れた技術を代表するものとしてこの頃に初めてヨーロッパに紹介された。完璧な切れ方のみならず、細工の彫金も高く評価され、ロドリゲスは「細工の優秀さと多彩さにおいても、金銀と銅とを混合させることについても、シナ人やその他の東方諸民族を凌駕している。この合金によって黒い銅（赤銅）をつくり、それで刀の鞘につける鏝をつくっている」と技術の優秀さを讃えている。

漆器と和紙 ロドリゲスは「漆器は中国や交趾^{ヨーロッパ}、シャム、カンボジャでも行われているが、日本人がもっともこの技術に卓越し、きわめて器用で、いろいろな漆器をつくる。まるで光り輝く滑らかな皮で出来ているかのように見え、固い金粉でさまざまなものを描く。金と銀の薄片でできる花とか、比類のないほど贅沢に細工された真珠貝とかをそれにはめ込む仕事を専門にする職人がいる」と書く。また、フロイスは、秀吉がインド副王に送った書簡を収めた漆塗りの箱について、細かく説明したうえで、「このような立派な工芸品がどのようにしてつくられるのかわからないだろう。優雅で豪華で雅致があり、それに箱を閉じる紐がついている。もし、ヨーロッパの櫃のようなものが作られれば、ヨーロッパの王侯が誰でも珍重するだろう」と褒めている。

このように日本の漆器はヨーロッパ人に珍重され、愛好されて、さかんに輸出されたばかりでなく、好みに応じた櫃や箆笥・双六盤などを注文によって輸出用に製作することさえあった。また、教会でも、聖餅箱や書見台、机などに、漆器の品を特別注文で作らせることもあったという。

和紙については、フロイスの「日欧文化比較」が「ヨーロッパでは、紙はすべて古い布の屑から作られるが、日本の紙はすべて樹皮からつくられ、われわれの紙はわずか4～5種類しかないが、日本の紙は50類以上ある」と書いている。日本の紙は楮・三桮・麻など、原料により生産地によって多くの種類があり、ヨーロッパの紙よりもはるかに上質で、用途もきわめて広がった。和紙は書簡や記録用、印刷用などに宣教師らも盛んに使ったので、その優秀性は実物を通じてヨーロッパに認められたのであった。

2016. 05・01